

思想上に有力な功績をしたのである。彼の説教の全體の調子は、厳格な酷しいものであつた。反對者に對して用ひた言葉は、最も峻烈なものであつたやうである。いはば、荒々しい引つ切り無しの罵倒であつた。恐らく、政治にも彼は没交渉では無かつた。師のパヌウによつて、殆ど彼と接觸したヨゼフスが、それとなくそのことを洩して居り、また彼の生命を斷つた悲惨な最後も、そのことを想像せしめるやうにおもはれる。彼の弟子達は、非常に嚴肅な生活を營み、毎度斷食をして儼いだ心配さうな様子をしてゐた。時々財産共有のこと、或は富者は必ず所有せる物を分配すべしとする思想の閃いてゐるのが見える。貧しき者が神の王國の第一列に座すべき恩恵を與へらるべきものであるといふ意味も既に見えてゐる。

ヨハネの活動の中心は猶太であつたが、その名聲は速かにガリラヤに傳はつて、イエスの耳に達した。イエスも、既に自己の周圍に、その最初の説教によつて小さな聽衆の群をつくつてゐた。まだ僅かの權威を有つてゐただけであり、それに、自分自身の思想と、大に關係のある教訓をもつてゐる師に會つて見たいといふ欲望に誘はれて、イエスは、ガリラヤを去り、僅かの同志をつれて、ヨハネの許に赴いた。この新參の人達も、多くの人と同様に洗禮を受けた。

ヨハネは、このガリラヤの弟子の一團を極めて厚遇し、この人達が自分の弟子達と別個になつてゐることを悪いこととはおもはなかつた。二人の師は若かつた。彼等は多くの共通思想を有つてゐた。彼等は互に相愛し、互に親切をつくして世間に對して戰つた。かやうな事實は、最初一見したところでは、バプテスマのヨハネとして意外なことであり、従つて、それを疑ふべきことと誰しも考へたくなる。忍従といふことは、決して猶太の強者の特色では無かつた。常に激したラムネエのやうな、それ程剛直な性格の者は、非常に立腹したに相違無く、對抗も堪へられなければ、半加盟をも我慢することができなかつたに相違無いやうにおもはれる。しかしながら、かういふやうな物の見かたは、ヨハネの人格について誤つた見解をしてゐることから出て來るのである。人々は、彼を成熟した年齢の人と想像してゐる。之に反して、彼はイエスと同年輩であつて、當時の思想から見て非常に若かつたのである。同一の希望と同一の憎惡とを湛へてゐた、この若い二人の熱心家は、立場を共通にし、相互に助け合ふことができたのである。無論、老大家であつたら、有名でも無い者が、自分の方に遣つて來て、彼に對して獨立の態度を保持するのを見た時には、立腹したかも知れない。一派の首領たる者が、やがて自己を繼

承すべき者に對して、熱心に歓迎をした例は殆ど無い。しかしながら、青年はあらゆる犠牲をすることのできるものである。従つて、自己のそれと類似した精神を、イエスの裡に認めたとヨハネが、個人的のわだかまりを棄てて、彼を歓迎したといふことは、承認することのできることである。この良好な関係は、次いで福音書の編者達によつて發展することとなつた全體系の出發點となり、さうして、その目的は、イエスの神聖な使命に第一の基礎として、ヨハネの證明を彼に附加することであつた。バプテスマのヨハネによつて與へられた權威は、これ程のものであつて、それ以上の優つた保證は、この世に發見し得られないものと、人々が信じてゐた程であつた。しかしながら、事實ヨハネがイエスに對して讓歩したところでは無く、却てイエスは彼の傍にゐた間は、始終彼を長者と崇め、遠慮しながら、僅に自己の才能を發展させてゐたのである。

事實、彼に深遠な獨創力があつたにも拘らず、イエスは數週間以上に亘つて、ヨハネの摸倣者であつたやうである。彼の進むべき道は、まだ彼の前に明かで無かつた。それに、あらゆる時代を通じて、イエスは、意見の方では多く讓歩をし、自己の方向に無かつた多くの物、或は

さほど念頭になかなかつたものを、唯それらが民衆的であつたといふ理由から採用した。但、その第二義的のものは、決して彼の主要思想を害するもので無く常に主要思想に隸屬してゐた、洗禮は、ヨハネによつて、大に有利な位置に置かれた。イエスは、彼のやうに爲すべきものであると信じた。彼も洗禮を施し、彼の弟子達もまた洗禮を施した。無論その儀式に、彼等はヨハネの説教と類似せる説教を添加した。こんな有様で、ヨルダンの兩側は洗禮者で埋まり、彼等の説教も、多少の成功を獲た。間も無く、弟子が師と同等になつて、彼の洗禮を求める者が多くなつた。この事に關聯して、ヨハネの弟子達の間に或嫉妬が起るやうになつた。ヨハネの弟子はヨハネの許に來て、若いガリラヤ人が日増に成功を得るといふことを訴へた。その言葉によると、イエスの洗禮が、間も無く、ヨハネのそれに取つて代らうとしてゐたのである。けれども、首領であつた兩人は、そんな小事には超然としてゐた。ある傳説によると、イエスが己の最も有名な弟子の群を、ヨハネの派中から抜いて作つたかのやうである。ヨハネの地位の優越は、まだ殆ど知られてゐなかつたイエスにとつて、打勝たうなどと夢みるにしては、あまりに偉大であつた。唯、彼はその蔭に生長しようとおもつただけであつて、大勢を集める爲め

には、ヨハネに驚くべき成功を獲させた外的の手段を是非とも用ひなければならぬものと想つてゐた。彼が、ヨハネの逮捕された後、再び説教を始めた時に、その口にした最初の言葉は、ヨハネの使ひ慣れた或句の反覆に過ぎなかつた。其他ヨハネの多くの言葉が、その儘に彼の説話の中に見出された。兩派は、久しい間親交の裡に過ぎたもののやうであり、ヨハネの死後、イエスは頼もしい親近の人として、最初にその事件を報ぜられた一人であつた。

果して、ヨハネは豫言者の生活を送つてゐる中に、程無く逮捕された。昔の猶太の豫言者のやうに、既成権力に對して、彼は最も甚しい批難者であつた。権力者を批評する時用ひたその言葉の、非常に明快であつたことが、累を彼に惹起さすにはゐなかつたのである。猶太に於てヨハネはピラトから脅かされることは無かつたやうであるが、ヨルダンを越えたペレアのアンチバスの領土で、彼は蹉躓したのである。ヨハネの説教の中に、十分隠して無かつた政治的の禍源を、この暴君が憂慮したのであつた。ハプテズマのヨハネを中心として、宗教的且愛國的の熱心から出来上つた大袈婆な集合は、幾分嫌疑を受ける理由があつた。それに、全く個人的の愁訴が、國家としての動機に加はるやうになつて、嚴肅な弾劾者の死を免るべからざる

ものにしたのである。

あの悲劇的なヘロデ家の、最も著しい性格の一人は、ヘロデ大王の孫女にあたるヘロデヤであつた。無道で、野心の多い、感情の強かつたこの女は、猶太教が大嫌で、その律法を唾棄してゐた。多分自分の心からでは無かつたのであらうが、彼女は、マリアンヌの子で、ヘロデ大王に廢嫡されて、従つて、公職を全く帯びてゐなかつた叔父のヘロデに娶はされてゐた。同族の人達に對して、自分の良人の地位の低かつたことが、彼女の心を休める時を無くした。彼女は何かとして主権者になりたいと念つてゐた。アンチバスは、彼女の道具に用ひられた人物に過ぎなかつた。この意志の弱い男は、無分別にも彼女に戀をして、ペトラの王でありペレア近傍の部落の酋長であつたハレトの娘の、自分の妻になつてゐた者を逐ひ出して、彼女と結婚する約束をした。その企を感じた妃は、逃走の決心をした。自分の考を秘して、妃は父王の領土のマケロに旅行をしたいと伴り、アンチバスの武官をして已を護送させた。

マカウル或はマケロといふのは、アレクサンドル・ヤヌスによつて築かれ、次にヘロデによつて修築された巨砦で、死海の東岸にある最も險阻な峽地にあつた。それは奇怪な傳説の多

い、また悪魔の住んでゐるところと信ぜられてゐた變な荒涼な地方であつた。要砦は、ハレトとアンチバネとの國境にあつた。當時はハレトの所有であつた。ハレトは、娘の逃走の爲めに何かと準備を整へてゐたので、娘は部落部落を通つてベトラに到着した。

アンチバスとヘロデヤとの殆ど不倫の結婚はその時行はれた。婚姻に關する猶太の規定は、非宗教的なヘロデ家と嚴肅な猶太人との間の感情を始終齟齬させる種であつた。一門の多い、且、かなり孤立してゐたこの王家の一族は、互に結婚しなければならぬやうになつてゐたので毎度律法の定めてゐる禁制を犯すやうな結果を生ずるのであつた。極力アンチバスを批難した時のヨハネは、一般感情の反映であつた。それは、彼がヨハネに對する嫌疑を十分であると決める上に、必要以上のことであつた。彼はこの洗禮者を逮捕させて、マケロの要砦に幽閉することを命じた。マケロは、ハレトの娘が出發した後に、恐らく彼が奪取してゐたものやうである。

残忍よりも、怯懦であつたアンチバスは、彼を死刑に處することを好まなかつた。或評によると彼は人民の反亂を虞れたのであつた。また別の説明によると、彼は囚人の言葉を聽くのを

愚みとしてゐて、その談話が彼を非常な當惑に陥らしめたのであつた。唯確實な事は、禁錮の期間がのびのびになつて、ヨハネが牢獄の中で廣い活動の自由をもつてゐたといふことである。彼はその弟子と交通をして居り、尙イエスとも交渉を保つてゐたことを認められる。近くメシヤが降臨するといふ彼の信念は、益々固められるばかりであつた。彼は注意して外部の運動の様子を窺ひ、彼が胸に抱いてゐた希望の成就に好都合な證徴を其處に見出さうとつとめてゐたのである。(5)

第七章

神の王國に關するイエスの思想の發達

われらが、略紀元二十九年の夏と推定するヨハネの逮捕の時迄、イエスは死海及びヨルダン河の附近を去らなかつた。猶太の沙漠に於けるその滞在は、公けの行動に出る前の一種の隠遁生活として、大事を成すための準備と一般に考へられた。イエスも先驅者の例に倣つて野獸以外に伴侶も無く、嚴格な斷食を行つて四十日間を過した。この滞在の事について、弟子達は尠からず想像をめぐらした。民間の信ずるところでは、沙漠は惡魔の居所であつた。死海の西岸一帯の、石ころの傾斜地以上に、寂しく、神に見放された、生活に縁の遠い地方は、世界にもあまり無い。彼がこの怖しい地で過したその時期の間、彼は恐しい試鍊を經、サタンが幻影で彼を驚かしたり、誘惑の甘言で迷はせたり、竟に彼の獲た勝利に酬いるために、天使が降りて

來て彼に奉仕したと人々は信じたのである。(一)

恐らく、この沙漠を出た時、イエスは、バプテズマのヨハネの捕へられたことを知つたのであらう。かうなつては、最早、彼にとつて半ば縁の無くなつたその地に、滞在を延ばす理由は無かつた。それにヨハネに對して擡げられた酷しい網の中に包まれることを、彼が虞れたといふこともあり得ることであり、また假に少しの名を得たにしても、死といふことが何等彼の思想の進歩に役立たない時に、身を危険に暴露することを彼は欲しなかつたであらう。彼は重要な一つの經驗によつて思慮を増し、それに、甚しく彼と異つた偉人と關係を結んだことで、彼自身の獨創力に對する自覺を得たので、眞の故郷のガリラヤに歸つたのである。

要するに、イエスに及ぼしたヨハネの感化は、彼にとつて有用といふよりは厭ふべきものが多かつた。その感化は彼の發展の一停頓であつた。綜合して見ると、彼がヨルダンに下つた時ヨハネのそれよりも優れた思想を彼は有つてゐたのであり、一種の讓歩からして、彼は一時洗禮の方に傾いたのであつた。彼が免かれるに難い權威を具へてゐたバプテズマのヨハネが、依然として自由の身であつたら、恐らく彼は儀式や物質的の勤行の束縛を脱することができなかつたで

あらう。従つて、無論彼は無名の猶太の或一宗派の人として止まつたことであらう。といふのは、世界が勤行を廢して別の物に向ふことが無かつたかも知れぬからである。あらゆる外面的の形式を解脱した宗教の魅力によつてこそ、基督教は進んだ人々を引きつけたのである。ヨハネが一度獄に入れられると、彼の派は甚しく減少し、イエスも彼自身の運動に復したのである。彼がヨハネに負うた唯一のものは、説教と民衆に改宗を勧めるための教訓位のものであつた。實にこの時から、彼は前よりはすつと力のある説教をし、權威をもつて群衆に臨んだのである。

猶ヨハネの許に彼が滞在したことは、ヨハネの影響によつてといふよりも、彼自身の思想の自然の経路からして、『神の王國』に關する彼の思想を熟させた觀がある。これから後の彼の合言葉は、『好き音信』即ち神の世の近づけることの知らせである。イエスは、最早單に生々した短い訓言の中に、崇高な教訓を含ませようと希ふ甘い道德家では無く、根柢から世界を革新し、自己の懐ける理想を地上に建てようと試みる超然的の革命家である。『神の王國を期待すること』は、イエスの弟子といふことと同じ意味の言葉になつた。『神の王國』或は『天國』といふ此言葉は、われらの既に言つた如く、すつと以前から猶太人の聞き慣れてゐた言葉であつた。し

かしながら、イエスはそれに精神的の意味、默示録のやうな情熱に浸つてゐたダニエル書の作者すら、殆ど想見することのできなかつた社會的意義を與へたのである。

現實の世界に君臨するものは惡である。サタンは『この世の王』であり、何人も彼に服従する。諸の王は豫言者を殺し、祭職者及び博士等は、他人に成すべしと命ずる事柄を已は行つてゐない。正しき者は迫害され、善人の獲る唯一のものは泣くことである。『現世』は、それ故神と聖者との敵である。しかしながら、神は覺めて、聖者の爲めに復讐するであらう。日は近づき、それは不信冒瀆が頂點に達してゐるからである。次いで來るものは善の世であらねばならぬ。

その善の世の到着は急激な大革命であらう。現世は顛覆するかの觀があるであらう。現世の状態は惡であるから、未來を胸に描かうとするには、現存するものの略反對を考へれば十分である。新しい秩序が人間を纏めることにならう。今は善と惡とが、野に於ける烏麥と小麥との如くに混つてゐる。主人はそれらを一緒に成長させる。しかながら、峻烈な類別の時が來るであらう。神の王國は、善き魚と惡しき魚とを齎す大なる網の如くであらう。人は善きものを壺

の中に入れ、その餘を棄てるであらう。この大革命の胚子は、最初目にとまらぬものであらう。それは、種の中で最も小さい芥子種の如くであらう。けれども、地に投げられると葉蔭に鳥が来て憩ふ程の木と變るであらう。あるひは、粉の中に入れると、それを全部膨らませる酵母のごとくであらう。中には往々意味の曖昧な譬喩の一つづきがこの突然の出來事に對する驚愕、其表面的不正、その必然の決定的性質を言ひあらはす目的に用ひられた。

誰がその神の世を建てるのであらうか。イエスの最初の思想、それは多分他に基因するところの無い、實に彼の人格の根源にあつたものとおもはれる程の彼の深い思想は、彼が神の子であり、天父の親近者であり、その意志の實行者であるといふことであつたことを記憶して置かう。従つて、右の問に對するイエスの答は、疑を容れる餘地のあるやうなものであり得なかつた。神を君臨させようとする信念は、彼の心を領して絶對的であつた。彼は自ら宇宙の改革者をもつて任じた。天、地、全自然、狂、病、死は、彼にとつて道具たるに過ぎなかつた。英雄的意志の發作に入つて、彼は自己を全能と信じた。若し地がこの最高の改造に同意しなければ、神の焔と呼吸とによつて、地は粉碎せられ淨化せられるであらう。新しき天が創られ、世界は

神の天使によつて住はれるであらう。(二)

地其物をまでも包含する根本的革命、それこそイエスの根柢の思想であつた。その時から、無論政治のことなどは顧みなかつた。ゴオロニチのユダの例は、彼に民衆の叛亂の無益なことを教へてゐた。決して羅馬人や太守などに反抗しようとは、彼は夢にも想はなかつた。ゴオロニチ人の、狂的な無政府主義的原理は、彼のものでは無かつた。既成權力に對する彼の服従は根柢では馬鹿にしたものではあるが、形式上からは完全なものであつた。彼は侮辱を加へない爲めに、カイザルに貢物を上つた。自由と權利とは世俗的のものでは無い。無駄な感情によつて、何うして彼の生活を紊すことがあらう。地を蔑み、現世を煩惱にも値しないものと信じてゐた彼は、彼の理想の王國に楯籠つたのである。超然的蔑視のこの偉大な教義、平和を與へる唯一のものであるとされる靈の自由といふ眞の教義を、彼は建設したのである。しかしながら、まだ『わが王國はこの世のものでは無い』と彼はいはなかつた。多くの暗い影が、彼の極めて眞直な視線の中に混つてゐた。時として變な誘惑が彼の心を過ぎることもあつた。猶太の沙漠の中で、サタンは彼に地上の王國を提供した。羅馬帝國の力を知らなかつた彼は猶太に存して

わた熱誠——それは間も無く後に非常に怖い軍事的抵抗となつた——をもつて、また味方の數と大膽とにより、一王國の建設を希望することもできたのであつた。神の王國の實現されるのは、暴力によつてか、それとも溫和によつてか、叛亂によつてか、それとも忍耐によつてであらうかといふ最高の問題が、恐らく幾度も彼に提供されたのである。傳ふるところによると、ある日ガリラヤの質朴な人民達が、彼を擁して王としようとした事があつたとのことである。イエスは、その時山の中に遁れて、其處に暫時一人であつた。彼の美しい性質は、彼を救うて、トウダスやバルコケベのやうな、陰謀者や叛徒の巨魁となる過ちを彼に無からしめることができた。

彼の成さうとした革命は、常に精神的革命であつた。しかしながら、その遂行の爲めに、天使や最終審判の時の喇叭に依頼するところに迄は達してゐなかつた。彼が働きかけようとしたのは、人間に對してであり、人間によつてであつた。最終審判の近いといふこと以外に、他の考の無いやうな空想家であつたら、人間改善の爲めにかやうな配慮をしなかつたであらうし、また人類の受けたものの中で、最も美しい實際的教訓をつくり出すやうなことは無かつたであらう。

らう。無論、彼の思想の中には、多くの疑義があつた。しかも、一定の計畫よりも、崇高な感情が、彼を驅つて高遠な事業——それは彼の描いてゐたものとは非常に趣を異にして彼によつて實現された——に赴かせたのであつた。

彼が建設したのは、實に神の王國であり、自分はそれを精神の王國といひたい。さうして、若しイエスが天父の懷から、天の事業が歴史とともに實を結ぶのを見たら、彼は正に「それこそ自分の欲したところである」と當然いひ得る物である。イエスが建設したものは、永久に彼から遺るものは、人類によつて實現されるものには、何に拘らず混入する不完全な點は別として、それは精神の自由といふ教義である。これより前、希臘は既にこの事に關して立派な思想を有つてゐた。多くのストア學者は、暴君の下にあつても、自由たり得る方法を發見してゐた。しかしながら、概して古代の世界は、自由をもつて或政治形式と結びついてゐるものやうに考へてゐた。ハルモデイウスやアリストギトン、ブルトウスやカシウスなどは、自由主義者と稱せられてゐた。更に眞の基督教徒になると、ずつとあらゆる束縛から解脱してゐた。その人は現世に於ては亡命人である。祖國で無い地上の一時的君主は、彼にとつては没交渉である。彼

にとつては、自由こそ眞理であつた。共和政治の自由は終を告げ、古代の都市村落の小憲法が坼びて、羅馬帝國の統一中に没した時代に、彼のやうな教義が、何れくらゐ機宜に適してゐたかを了解するには、歴史の知識がイエスには不十分であつた。けれども、讚嘆に値する彼の常識と、その使命に對してもつてゐた彼の眞に豫言者的本能とが、此際驚くべき確實さをもつて彼を指導したのである。「カイザルの物はカイザルに返せ、神のものは神に返せ」といふ言葉によつて、彼は政治とは離れた或物を創造したのであり、暴力の帝國中に、人々の爲めに一個の避難所を設けたのである。たしかに、かやうな教理には、危険があつた。權力を合法と認める符徴は貨幣を重要視することであるといふ原則を立てること、及び完全な人は租税を蔑視して議論無く支拂ふものであると宣言する事は、取りも直さず、昔風の共和制を破壊することであり、あらゆる横暴を助長することであつた。この意味に於て、基督教は公民權の感情を弱め、世界をして既成事實の絶對權に服せしめる勢を助けてゐる。しかしながら、三百年間政治無しに過すことを得しめた廣大な自由組合を構成したことで、基督教は民權に加へた損害を十分償つたのである。基督教のお蔭で、國權は地上の事物に限られたのであり、精神は解放され、或

は尠くも、羅馬帝國萬能の怖るべき結果は永久に破砕されたのである。

専ら公共生活の義務を念とする者は、自己の黨争以上の或ものを認める他人を容赦しない。政治問題を社會問題に従屬させ、政治問題に對して、一種無關心の態度を示す者を、その人々は批難するのである。或意味に於てその人々に道理がある。といふのは、排他的に作用する方向は、人事をよく治めて行く上に、すべて有害であるからである。けれども、それは如何なる進歩を人類全體の道徳性に對してさせたであらうか。若し、イエスが天國を建設しないで、チベリウス顛覆の陰謀や、ゲルマニクス追慕に身を窶してゐたとしたら、世界は何うなつたであらうか。嚴肅な共和主義者であり、熱心な愛國者たる彼も、その時代の事件の大潮流を阻止することは無かつたであらう。之に反して、祖國は全部で無いといふこと、人間は公民としてよりも以前からあるものであり、それよりも優れてゐるものであるといふことの眞理を彼は世界に宣布したのである。

われらの實證科學の原理は、イエスのプログラムに含つてゐる空想のために損害を受けた。われわれは地球の歴史を知つてゐる。イエスが期待したそのやうな革命は、地質學的原因か

星學的原因によつてで無ければ生ずるものではない。それと道徳的事項との關係に至つては、嘗て何人も明示した者が無い。しかしながら、偉大なる創造者に對して正當な批判者たらうとするには、その創造者達が有してゐたかも知れぬ偏見を顧慮してはならぬ。甚しい誤謬思想から出發して、コロンブスはアメリカを發見した。ニウトンは、默示録に對する彼自身の愚劣な解釋を、彼の引力説と同程度の確實なものとして信じてゐた。アツシジオのフランシスコや聖ベルナルやジャンヌ・ダルクやルウテル等の述べた誤謬を有つてゐないからといつて、現代の凡庸人を、人々は彼等以上の地位に置くであらうか。人々は、物理學上の思想の正確の度や眞の世界の體系について有つてゐる多少正確な知識の程度などからして、人間を評價しようとするであらうか。イエスの地位及びイエスに力あらしめたものの、何であるかを、もつと善く理解すべきである。十八世紀の自然神教や、ある新教の思想は、基督教信仰の建設者を目して、唯單なる一個の偉大な道學者、人類の爲めの恩惠者であるといふやうにわれらをして想はせることに慣れさせた。最早福音書の中に、われらは唯結構な金言を認めるばかりである。彼が生れた當時の奇怪な知的状態にわれらは用心深い覆ひを置いてゐる。また佛蘭西革命が、再三原理か

ら外れたこと、それが穩健聰明な人々によつて成されなかつた事を嘆ずる幾多の人達がある。尋常の尺度を越ゆることの夥しいこれらの異常な運動に對して、小賢しい町人的算盤を適用すべきでは無い。われらをして『福音書の道徳』を讚美することを續けしめよ。われらの宗教教育中から、その精神となつてゐる架空を棄てしめよ。けれども、幸福とか個人的道徳などの單純な思想をもつて、世界を動かせるといふやうなことは信じないことにしよう。イエスの思想は、たしかにもつと深刻なものであつた。それは嘗て開いたものの中で、思想として最も革命的なものである。歴史家は、全體からその思想を見なければならぬ。さうして人類更生の上に、明に有效であつたものを切棄てるやうな卑怯な削除を加ふべきでは無い。

根柢に於て、理想は常にユトピヤである。われらが今日近代意識から、基督、即ち慰安者、新時代の批判者を描き出さうとする時、われらは何うするであらうか。それは千八百三十年前イエス自身が成したことである。われらは、現在のそれよりも全く異つた世界の状態を想像する。われらは、武器を持たずして黒人の武器を破り、無産者の境遇を改善し、壓制の下にある諸民族を解放するやうな解放者を想像して描く。しかしながら、それでは、世界が顛覆せられ

ヴァジニヤやコンゴの風土が變化し、幾百萬の人間の血と人種とが變り、われらの社會の複雑が空想的の單純に還元され、歐羅巴の政治的成層の常規を逸した場合を想像するものであるといふことをわれらは忘れてゐるのである。イエスの希望した『一切の改革』は、それ程困難なものでは無かつた。その新しい地、その新しい天、その天より下る新しいエルサレム、『これこそわが全く新たにつくり直さむとするものである』といふその叫びは、何れも改革者に共通のものである。常に理想と悲惨な現實との對照が、人類の世界に於て、冷酷な理性に對する反抗を生ぜしめる。その反抗が勝利を占め、それを否定した者が先頭に立つて、その理由の高遠なことを認めるやうになるまでは、凡庸人はそれを狂氣の沙汰と見るのである。

世界が近く終りを告げるといふ教理と、事實現在のそれと甚だ類似してゐる人類の常態を見てイエスの出した日常道徳との間に、或矛盾の存するかも知れぬことは、これは誰も否定しようとならないことであらう。その矛盾こそ、正に彼の事業の運命を保證するものであつた。千年の間メシヤが君臨するといふことを説く人が出ただけでは、何等永續性のあることを成すことはできなかつたであらう。道徳の人であつただけでも、何等力強いことを成し得なかつた

であらう。幸に千年説があつて衝動を興へたのであり、その上に道徳が未來を保證したのであつた。そこで、基督教は現世界に於ける大なる成功の二條件、即ち革命的の出發點と生存の可能性とを結びつけたのである。成功するやうにできてゐるものは、すべてこの二つの要求に應ずべきものである。といふのは、世界は變化と繼續とを同時に欲するものであるからである。イエスは、人事に於て無比の變動を豫言すると同時に、爾來千八百年間社會がよつてもつて立つてゐる諸の原則を宣言したのであつた。

彼と當時並びにあらゆる世紀の煽動者との異なる點は、取りも直さず、彼に完全な理想主義のあつたことである。或點から見ると、イエスは一個の無政府主義者である。といふのは、彼は政治に關して、何等の思想をも有してゐなかつたからである。この政治なるものは、彼にとつては、單に純乎たる一個の弊害と見えたのである。それに就いて、彼は漠とした言葉で、しかも一切政治觀念の無い民衆のやうな言ひかたをしてゐる。すべての官吏は、神の人民の本來の敵のやうに、彼の目に映じたのである。その弟子達に警官との紛争のあることを、假にも赤面すべきことなどは想到することも無く彼は豫告してゐる。しかしながら、權力を握つてゐる者

乃至富者などに取つて代らうとする企ては、嘗て彼に於て示されたことが無い。富や権力を殄滅しようとおもつても、それを奪取しようとは、彼はおもはなかつたのである。弟子達に對して迫害と形罰とを豫言してゐるけれども、唯の一度も武器を執つて抵抗するといふ思想は彼に於て認められなかつた。人は苦惱と忍従によつて全能となり、心の清淨なることによつて暴力に打勝てるといふ思想がたしかにイエス獨特の思想である。イエスは精神主義者では無い。何となれば彼から見ると、何事も具體的の實現に到達するものであるからである。けれども之に反して、彼にとつて物質は觀念の記號たるに過ぎないものであり、現實は目に見えないものの生きた表現に過ぎないのであるから、彼は一個の立派な理想主義者である。

神の治世をつくりあげる上に、誰に訴ふべきか、誰の助力を要求すべきかといふ點に關しては、決してイエスは答に躊躇しなかつた。即ち人間にとつて高貴なものは神の眼からは唾棄すべきものである。神の王國の建設者は單純な心の人々であらう。富者達でも無く、博士達でも無く、祭職者達でも無い。婦人達であり普通の民衆であり、謙遜な人々であり、微賤な人々である。メシヤの大なるしるしとなるものは、『貧しき人々に告げられた好き音信』である。イエス

の牧歌的な優しい性質は、ここでもまた主要なものとなつてゐる。階級が顛倒され、この世の公的のものは、悉く卑められることになる大きな社會革命、それが彼の空想である。世人はそれを信じないであらう。世界は彼を殺すであらう。しかしながら、彼の弟子達はこの世の人達では無いのである。その人達といふのは、彼の屈辱そのものによつて勝利を占める、謙遜な單純な人々の小さな群であらう。『世俗的』をもつて『基督教的』の對照語としたその感情は、この師の思想の中で十分是認せられるものである。(8)

第八章

カペナウムに於けるイエス

次第に命令的になる觀念に取りつかれてゐたイエスは、彼の驚くべき天才と、彼の生活してゐた異常な境遇とが、彼の爲に示してゐた道を、爾來一種の宿命的な泰然自若たる態度で進むこととなつた。この時迄は、彼の許に集つた少數の人達に、密かに自己の思想を傳へてゐたに過ぎなかつた。これから後、彼の教訓は公けのものとなり、且繼續的のものとなる。彼は約三十歳に達した。パプテズマのヨハネの許に彼と同行した聽講者の小さな群も、無論大きくなつて、恐らくヨハネの弟子の若干も彼の下に加はつたであらう。彼がガリラヤに歸つてから、大膽に「神の王國の福音」を宣傳したのは、この最初の教會の中核者達をもつてしたのである。その王國は將さに來らんとしてゐたのであり、しかも、ダニエルが最高最後の天啓の尊とき使者

として幻に見た「人の子」が實に彼イエスであつたのである。

藝術や神話に對して同情の無かつた猶太思想では、單なる人の形の方が、準天使や空想的動物——民衆の想像がアツシリヤの影響を受けてから神の位の周圍に列んでゐるものと想像してゐた——などの形よりも、上位に置かれてゐたことを記憶しなければならぬ。既にエゼキエル書の中に、神秘の車に乗つた怪物よりはずつと上に、至尊の玉座に座つた人物、即ち豫言者の幻の偉大な天啓を示す人物が、人間の姿をしてゐる。ダニエル書の中には、動物によつて代表されてゐる諸國の幻の中で、大審判の會合が催され、書物が開かれてゐる際に、「人の子に似た」人物が、世界審判の権力と永久に世界を統治する権力とを授ける「時の老人」の方に進み出てゐる。人の子といふ言葉は、セミチツクの言葉殊にアラムの地方語では、單に人の同義語である。しかしながら、ダニエル書のこの主要の一節は、人々の心を動かして、人の子といふ言葉が、少くも或派に於ては、世界の審判者、まさに開けんとする新世紀の君主と考へられるメシヤの稱號の一つとなつてゐたのである。イエスが自己に對して成した適用のしかたは、だからして、自己に救世主の資格のあることを宣言したものであり、「時の老人」が委任する十

分の権力をもつて自己が審判者となるべき大變動の近きにあることを斷言したものであつた。

新豫言者の言説の成功は、今度は決定的であつた。男女の一群、悉く同一の若々しい純潔と天心爛熳な精神とを特色とする人達が、彼を慕うて集まり、彼に對して「御身がメシヤである」と言つた。メシヤはダビデの子であるべきであつたから、前者と同義語であるこの名稱をも人々は無論彼に對して授けたのである。彼は全く平民の出であつたので、いささかそれは迷惑であつたが、しかし與へられるが儘に喜んでそれを受けてゐた。彼にとつて自ら好む名は、表面卑しい名であつても、直接メシヤ的希望と關係のあつた「人の子」の方であつた。彼が自己を指す時は、此の言葉によつてゐた。といふのは、彼の口に於ては、「人の子」といふのは、彼が用ひるのを避けた「私」といふ代名詞と同義語であつたからである。しかしながら、人は決して彼をさうは呼びかけなかつた。無論その理由は、件の名前が彼の未來の顯現の日に於てで無ければ、十分彼に相應しいもので無かつたからである。

この時代に於けるイエスの活動の中心は、ゲネザレ湖畔にあるカペナウムといふ小さな町であつた。カファル即ち「村」といふ言葉の入つてゐるカペナウムの名は、チベリアのやうな羅馬

式によつて作られた大都市に對して、舊式の部落を指してゐたものであるらしい。(H)この名は、極めて名の現れてゐなかつたもので、ヨゼフスがその書の或個所で、それをその村より多く知られてゐた附近の泉の名と想つてゐたくらゐである。ナザレと同様に、カペナウムも過去を有してゐなかつたので、ヘロデ王家の助長した俗的運動に毫も與かつてゐなかつたのである。イエスはこの町に非常に執着して、第二の郷土のやうにしてゐた。歸つてから幾程も経たないことであつた、彼はナザレに對して企圖を試みたことがあつたが成功を得なかつた。イエスの傳記著者の一人のいふところによると、其處では彼は何等偉大な奇蹟を行はなかつた。さして大した家柄で無いことを人々の知つてゐたことが、彼の權威をあまりに傷けたのである。毎日その兄弟姉妹義兄弟等と會つてゐる者を、人々はダビデの子と看做し得なかつたのである。のみならず、彼の一家の者が、かなり強い反對をして、彼の神の使命を信ずることを明白に拒んだことは注目すべきことである。或時、彼の母や兄弟等は彼を氣の狂つた者と主張し、興奮した空想家として取扱ひ、無理に彼を逮捕しようとした。傳ふるところによると、更にもつと亂暴なナザレ人は、絶壁の上から彼を突飛ばして殺さうとしたことがあつた。聰明にもイエスは、

この冒険があらゆる偉人に共通なものであることを認め、「何人も故郷に於ては豫言者たる能はず」といふ諺を己に適用した。(2)

この失敗は彼の意氣を阻喪させるどころでは無かつた。彼はカペナウムに歸つて、遙かに此處の好都合の事情にあることを發見し、さうして此處からして、附近の小都市に布教系統を組織した。この美しい、且肥沃な地方の人民は、土曜日の他には殆ど集りをしなかつた。彼はその日を教訓を傳へる日として選んだのである。當時町村は、各會堂、すなはち集りの場所を有つてゐた。それは希臘式の裝飾をした廻廊のある、かなり小さな長方形の室であつた。猶太人は獨特の建築法を有つてゐなかつたので、決してこれらの建物に特有の様式を示さうとは念はなかつた。幾多の昔の會堂の名残が、今でもガリラヤに存在してゐる。それらは何れも巨大な立派な材料をもつて建造してあるが、猶太の記念物の特徴になつてゐる植物模様、唐草、振れ房などの裝飾が混じてゐる爲めに、その趣味はかなり卑俗なものである。内部には、若干の腰掛と讀經の爲めの教座が一つと、神聖な經卷を納れるための戸棚とがあつた。一向寺院らしいものの無いこれらの建物が、すべての猶太生活の中心であつた。祈禱の爲めと、律法及び豫言

者の書を讀經する爲めに、人々は安息日に其處に集るのであつた。エルサレム以外の地では、猶太教には所謂聖職者なるものが無かつたので、劈頭に參會した者が起立しその日の讀經(パシヤとハフトラ)をして、それに全く個人的のミドラシ即ち註解を附け足し、その中で自己の思想を開陳してゐたのである。これがフィロンの小論文中に完全な見本の出てる註解的説教の起原であつた。誰でも異義を唱へ、讀經者に質問を發する權利があつた。従つて、會合は早速一種の自由會合に墮するのであつた。この會堂には、一人の堂長と幾人かの長老と、一人のハザン、即ち屢讀經者となる助手と、他の會堂との間に通信若しくは使者の役目をする數人の代理者と、一人のシヤンマシユ、即ち聖器監理者とがあつた。かやうに會堂は獨立した小共和國であつた。それは廣い司法權を享有して居り、奴隸解放の保證をし、解放された者の上に保護權を行使してゐた。羅馬帝國の餘程進んだ時代迄、あらゆる自治の組合の如くに、會堂は訓令を出し、その自治體には法律の效力を有する決定を議決し、體刑をも宣告してゐた。體刑の執行者は通常ハザンであつた。

常に猶太人の特色であつた極端に頭腦の働くことが、かやうな制度に認められてゐる專斷的

の嚴重さがあつたにも拘らず、極めて激しい論争を生ぜしめずには置かなかつた。會堂のお蔭で、猶太教は迫害の十八世紀間を通じて無疵の儘生命を完うすることができた。それは孤立した小世界が多くあつたやうなもので、その中で民族的精神が保存され、内争に十分準備の整うてゐる場所を提供してゐたのである。其處で夥しい量の感情が消費されたのである。其處では上席を争ふことが猛烈であつた。前列に名譽の椅子を占めることが、敬虔の念の高いことの報酬であつた。或は人々の最も羨望する富の特權であつた。一方に於ては、聖經の讀誦或は註解に關しては、それに當らんと欲する者に放任されてゐた程の自由のあつたことが、新説を宣傳する上に非常な便宜を與へてゐた。其處にイエスの大なる力の一つ、及び彼の教義的教訓を建設する上に用ひた最上の慣用手段があつた。彼は會堂に入つて讀經の爲めに起立した。ハザンに彼に聖卷を捧げ、彼はそれを披き、その日のバラシャ或はハフタラを讀みつつ、その讀經から自己の思想に一致する若干の敷衍をしたのである。ガリラヤにはパリサイ人がさうゐなかつたので、彼に對する反駁が、エルサレムに於て冒頭から彼を遮り止めた程の激しい峻烈の調子にはならなかつた。これらの善良なガリラヤ人は、嘗てこれほど快い想像に適合した言葉を聽

いたことが無かつた。人々は彼を嘆賞し、彼を愛し、彼の辯舌の爽かなこと、その理由の首肯さすものであることを認めた。最も困難な異議を、彼は確信をもつて解決した。彼の言説の殆ど詩的な音律は、博士達の街學で潤らされてゐないまだ若々しい人達を擒にした。

若き師の權威はかくして日に日に増大して行つた。さうして無論人々が彼を信すること多ければ多きにつれて、彼は益自己を信するやうになつた。彼の活動の範圍は甚だ限られたものであつた。それはチベリア湖畔に全く限られてゐた。しかも、其湖畔に於ても、彼の好みの地方があつた。湖水は長さ五六里、幅三四里で、かなり規則正しい楕圓形を呈してゐるが、チベリアからヨルダンの口までは、灣の形になつてゐて、その屈曲が約三里位である。イエスの蒔いた種が、十分準備の出來てゐる地を發見したのは其處である。イスラムの惡魔が蔽ひかくすに用ひた枯涸と愁傷との外套を搔きあげることを試みつつ、われらは其地を一步一步跋涉して見よう。

チベリアを出ると、まづ絶壁の巖、水中に崩れ落ちるかと思える山がある。次いでその山々は遠ざかり、平野(エルグエイル)が殆ど湖の水面の高さに開けてくる。それは緑の濃い得

も言はれぬ叢林で、一部分は古代に造つた圓い大きな池（アインメダワラ）から流れ出る、水嵩の多い流れがその間をうねつてゐる。この平野——それは所謂ゲネザレの土地である——の入口に、メジデルといふ貧弱な村がある。平野の反対の外れに（始終湖水に沼うて）、市街（カイン・ミネエ）の跡や、極めて美しい流れ（アインテン）や、巖に穿つた狭い深い綺麗な道——イエスの必ず屢通行した、さうしてゲネザレの平野と湖水の北の斜面との通路となつてゐる、——に遭遇する。そこから十五分の距離のところ、鹹水の小さな河（アインタビガ）が、湖水にすぐ近いところから若干の廣い泉となつて湧いて居り、緑の濃い繁みの真中で湖水に注いでゐるのを渡ることになる。最後に、更に進むこと四十分で、不毛な斜面——それはアインタビガからヨルダンの谷口まで擴がつてゐる——の上に、若干の茅屋とテルフムといふ名の可成りの記念物らしい廢趾の一群とを發見する。

羅馬や雅典と劣らぬ程、人類が永久に語り傳へる筈の五つの小市街は、イエスの時代にはメジデルの村落からテルフムの間に擴がつてゐる空間中に散在してゐた。この五つの市街、マグラ、ダルマスタ、カベナウム、ベトサイダ、コラジンの中で、第一のみが今日確實に認められ

る。メジデルの怖い村はイエスに最も誠實な女性の友を獲せさせた部落の、名と位置とを無論保存した。ダルマスタの位置は全く知られない。コラジンが、幾分北方の地中にあつたことは不可能のことでは無い。ベトサイダ及びカベナウムに関しては、それらがテルフムにあつたとかアインエティンにあつたとか、カインミネエ乃至アインメダワラにあつたとかいふのは、事實殆ど出鱈目である。地形學に於ても、歴史に於けるが如く、深い計畫があつて、偉大な建設者の事蹟の跡を隠蔽せんとする意志があつたものとも謂ふことができやう。徹底的に荒廢してゐる此地上に、人類が來つてその古跡を愛撫したいとおもふ位置を、竟に決定し得るに至るや否やは疑はしいことである。

湖水、地平線、灌木、花、それらがイエスの神聖な事業を創めた三四里の山地より殘存してゐる全部である。樹木は全然消滅した。昔ヨゼフスが一種の奇蹟と認めた程の、植物の燦としてゐたこの地方に、ヨゼフスの言葉によると、自然が寒地の植物と熱帯の産物とを並列せしめ、温帯の樹木は四時花と實を結んでゐたこの地方に、今では、翌日の食事をする場所としていささかの葉蔭を發見し得る場所をも、一日前に豫定して置く必要がある位である。湖水は沙漠と化

した。唯一艘の小舟が、非常にあはれな状態で、昔は生と歡びとに充ちてゐた波間に今日漂うてゐる。しかしながら、水は常に軽く透き徹つてゐる。岩か礫石かで出来てゐる磯は、ヒユレ湖畔のやうに、小さな海の磯であつて、池沼のそれでは無い。それは鮮かで清く、泥は無く、何時も波の微動で打たれてゐる。夾竹桃、聖柳、荊のある風鳥草などに埋れてゐる小さな突角が、其處に點在してゐる。就中二箇所、タリケ附近のヨルダンの出口と、ゲネザレの野に沿うたところに、浪が芝生と花の繁みに來て消してゐる艶な花壇のやうな場所がある。アインタビガの溪流は、綺麗な貝殻の多い小さな洲になつてゐる。水禽の群は湖面を蔽うてゐる。見渡すかぎりの景色は光でまぶしいばかりである。碧空の色のやうな水が、焦りつける岩の間の深い底にあつて、サフエドの山の上から眺めると、黄金のコツブの底に湛へられてゐるやうに見える。北方ヘルモンの雪のやうな傾斜の急な山は、天に白い線をして浮き出てゐる。西には、ゴオロニチヤベレアの浪を打つたやうな全く不毛な高原が、日の光によつて一種天鵞絨の衣を着けたやうな姿で、密集した山、といふよりも長い聳えた臺地を成して、ピリビのカイザリヤから南の方へすつと走つてゐる。

今は湖畔の暑さは甚しく強い。湖水は、地中海の水面より百八十九メートルも低下してゐて、死海の熱帶的條件の通りになつてゐる。昔は繁茂した植物が、その酷しい暑さを和けてゐた。今日あの火爐のやうな地が、嘗ては五月以降湖畔全部が非常に盛な活動の舞臺であつたことは誰しも了解し難いであらう。しかしながら、ヨゼフスは非常に溫和な土地だと記してゐる。屹度この地にも、羅馬のカンパニヤのやうに、歴史的原因から生じた氣候の變化が幾分あつたのであらう。回教、殊に、イエスの好んだ地を、死の風のやうに荒した十字軍に對する回教の反動がそれである。あの平和な逍遙者の頭の中では、ゲネザレの美しい地の運命が、動搖するものとは氣づいてゐなかつたであらう。危険な同胞であつたイエスは、イエスをのせたことで非常な名譽を贏ち得たこの地にとつて、宿命的のものであつた。衆人の愛憎の對象となり、敵視せる二個の狂的精神によつて渴望せられたガラヤは、その光榮の代償として、荒野に變じてしまはねばならなかつたのである。しかしながら、イエスがこの村落で人にも知られず長命したら、その方がもつと幸福であつたらうとは誰しも言ひ得ないであらう。若しその部落の將來を危くする危険を犯して、部落中の一人が「天父」を認め、「神の子」と自己を宣言しなかつた

としたら、あの忘恩のナザレ人達のことを誰が念頭にかけたであらうか。

互に三十分位の距離にある四五の大村落が、だから、今われわれの敍べてゐる時代のイエスの小世界であつた。極俗的な町で、大部分は異教徒の住んでゐる、さうしてアンチパスの常住の地であつたチベリアには、彼は一度も足を踏み入れなかつたやうである。それでも、時として彼は、自分の好きな地方を離れて行つた。彼は舟に乗つて、東岸の、例へばゲルゲサに行つた。北の方ではパネアスやピリピのカイザリヤに於て彼を見受けた。尙或時は、當時非常に榮えてゐたツロヤンドンの方に旅行した。これらの地では、彼はまるで異教の中に入つたのである。カイザリヤでは、ヨルダンの水源とされ、俗間の信仰が奇怪な傳説をもつて圍繞してゐたパニウムの名高い洞窟を彼は見たのであつた。彼はその附近で、アウグスツスを祀る、ヘロデの建てた大理石の殿堂を眺めることもできた。彼は、恐らく野の神のパンや森の精や洞窟の音の神に奉納したもので、恐らくこの美しい場所に敬虔の心が既に積み重ねてゐたらとおもはれる澤山の像の前に足を停めたであらう。神化された人間或は悪魔と異形の神々を看做すのが普通の例であつた神化論者の猶太人は、すべてこれらの形象的表現を、偶像と目したに違ひ無

い。もつと多感的の民族を酔はせてゐた自然教の魅力に對しては彼は冷淡であつた。無論ツロヤにあるメルカルトの古い御堂に、まだ猶太人のそれと多少似通つた原始的宗教のものを藏してゐたかも知れないといふやうな知識を、彼は毫も有つてゐなかつた。フェニキヤに於ては、丘毎に殿堂と神聖の森とを造つた異教、大なる産業、それらの俗的の富のあらゆる光景(3)も、殆ど彼にとつては微笑せしむるものが無かつたに相違無い。一神教は異教の宗教を理解するすべての能力を奪ひ去るものである。多神教徒の中に投げこまれた回教徒は、眼を有つてゐなかつたやうであつた。いふまでも無く、イエスはその旅行中に何等學ぶところが無かつた。彼は相變らず懐しいゲネザレの岸邊に歸つて來た。彼の思想の中心は其處にあつたのである。彼は其處に信と愛とを見出したのである。

第九章

イエスの弟子達

歴史上の大革命が、その時まで殆ど没交渉であつたこの地上の樂園に、地そのものと完全な調和をした、勉勵な、律義な、人生の快活溫雅な感情に浸つた人民が住つてゐた。チベリアの湖水は、世界中最も魚類の多い沼池の一つである。極めて獲物の多い漁場が、就中ベトサイダ、カペナウムに設けられてゐて、一種の安樂境を現出してゐた。漁夫の家族達は、前述の湖畔全地に幾多の親戚關係をもつて擴がつて、平和な一社會をつくつてゐた。あまり忙しくない彼等の生活は、彼等の想像に極めて自由を與へてゐた。神の王國に關する思想は、これらの善人の小さな會合に於て、他の何處よりも多くの信用を得た。希臘風の俗的の意味に於て、人の文明と稱する何物も彼等の間に入つてゐなかつた。日耳曼乃至ケルトの眞摯は無かつたが、しかし

その慈愛心が往々淺薄な深味の無いものであつたにも拘らず、風俗は溫和であつて、幾分恰侗なところと才氣とがあつた。彼等をレバノンの最も優れた人民とよく似たものと想像することができるが、しかも偉人を産出するといふ、後者の持つてゐなかつたものを有つてゐた。イエスは其處に眞の彼の家族に遭遇したのである。彼は此處にその中の一人としてとどまつた。カペナウムは彼の『町』となつた。さうして彼を崇拜する小さな群の中にあつて、彼は自己の懷疑的な兄弟や、忘恩のナザレヤ、その馬鹿にしたやうな無信仰を忘れたのである。

カペナウムに於ては、とりわけ一軒の家が、彼に快い住家と誠實な弟子を供給した。それはイエスが湖畔に来て定住した頃には、恐らく故人になつてゐたヨナといふ者の子であつた二人兄弟の家であつた。それはシリヤカルデヤの言葉で、ケバス、希臘語でペトロス(石)といふ仇名のついたシモンと、アンデレとであつた。ベトサイダに生れた兩人は、イエスが公生活を始めた時にカペナウムに居住してゐた。ペテロ(ペトロス)は結婚してゐて數人の子供があつた。その姑も彼の家に住んでゐた。イエスは此家を愛して何時も此處に泊つてゐた。アンデレはバテズマのヨハネの弟子であつたらしく、イエスは彼をヨルダンの河畔で識つてゐたのであら

う。二人のこの兄弟は、その師の爲めに最も多忙であつたらしい時にも、漁業を営むことを繼續してゐた。言葉の洒落を好んでゐたイエスは、時には彼等をもつて人間の漁夫とするのだといつた。實際彼のすべての弟子の中で、彼等以上に誠實に彼に跟き従つた者は無かつた。(一)

また別の家、氣樂な漁夫で、また幾艘かの船主であつたザブデヤ、即ちゼベダイの家が、イエスに熱心な歡待をした。ゼベダイには二人の子があつた。即ち長男であつたヤコブと、後年初期基督教史上に極めて顯著な役目を果す使命を有つことになるヨハネといふ次男とであつた。多少の證據があるので、ヨハネもアンデレ同様に、イエスをバプテズマのヨハネの群の中で識つたもののやうに想像される。ヨナとゼベダイとの二家は、要するに双方とも非常に關係があつたもののやうである。ゼベダイの妻のサロメは、非常にイエスに愛着してゐて、イエスの死まで隨行してゐた。

事實、婦人達が熱心にイエスを歡迎した。彼は兩性間の思想的結合を、甚だ柔味のあるものとする謹慎な態度を婦人に對して持つてゐた。東洋民族の間に、情味のあるあらゆる發達を妨げた男女間の差別は、當時も今日の如く、無論大都會に於てよりは、田園村落に於ての方がす

つと嚴重で無かつた。敬虔なガリラヤの婦人三四人が常に若き師に隨行し、彼の言葉を聴き、且代るがはる彼に侍づく喜びを競争した此婦人等が、此新しい宗派に熱心と驚異との要素を加へた。人々は既にその意義を解してゐた。その中の一人で、あはれなその村の名を世界にあれ程名高くしたマグダラのマリヤは、非常に情熱に富んだ女性であつたらしい。當時の言葉によると、彼女は七つの悪魔に憑かれてゐた。即ち表面からは説明のつかない神經性の病氣に罹つてゐたのである。イエスは、己の清淨溫雅な美しさによつて、この狂亂の手を和めたのである。

マグダラの女はゴルゴタに至る迄彼に忠實であつて、彼の死の翌翌日第一位の役目を果したからである。何となれば後章に述べる通り、復活の信仰を確立する重要な役目の人物であつたからである。アンチバスの家従の一人の、クウザの妻であつたヨハンナ、スザンナ、其他無名の幾人かが、絶えず彼に追従して侍いて居た。ある婦人は富裕であつて、その財産をもつて、其時迄營んでゐた職業をせずとも、若い豫言者をして生活のできる身分にした。

尙多數の者が彼に跟き従つて、彼を自分達の師と認めてゐた。それはベトサイダのピリピといふ者、第一期の弟子で、カナのトルマイ若しくはプトレメオといふ人の子であつたナタナエ

ル、原始基督教のクセノフォンともいふべき人らしいマタイなどである。傳へられるところでは彼マタイは税吏であつた爲めに他の者よりも自由にカラムの筆を扱ふことができたのであつたらう。恐らく彼は、イエスの教訓として、われらの知つてゐるものの基礎であるロギアを書かうと既に考へてゐたであらう。尙弟子の中には疑を懐いたが親切な殊勝な心掛の人であつたらしいトオマス或はデイデイモスといふ者、レツパイ若しくはタツウオといふ者、當時から存してゐた、さうして、間もなく猶太民族の運動に、甚だ大きな役目を演ずることになるカナイム黨に屬してゐた者で、ゴオロニチのユダの弟子であつたらしい狂熱家のシモンといふ者、ユスツスといふ仇名で呼ばれたヨセフ・バルサバ、マチアス、アリスチオンといふ疑問の人物、最後に、忠實な群の中で例外となつた上に、非常に怖い評判を得たユダといふ、ケリオトの町のシモンの子があつた。想像するに、これだけがガリラヤ人で無かつた唯一の人であつたらしい。ケリオトは、ヘブロンを越えて一日の行程の、猶太の南の果ての町であつた。

既に述べた通り、イエスの家族は概して彼を顧みなかつた。けれども、マリヤクレオバを通じてイエスの従兄弟にあたるヤコブとユデとが此時から弟子の仲間入りをした。マリヤクレオ

バ自身は、カルヴァアリの山まで彼に従つて行つた連中の數にあつた。此時期には、彼の母を彼の傍で見ることは無かつた。マリヤが大變尊重され、弟子達が味方に入れようとしたのは、實にイエスの死んだ後のことであつた。始祖の家族の人達が、『主の兄弟』といふ肩書で有力な團體となつたのもその時からであり、その人達は永くエルサレムの教會の主位を占め、この都の侵掠された後にパタニヤに遁じたのであつた。

丁度マホメットの死後、この豫言者の妻女達で生前彼を信用してゐなかつた人々が、大いなる勢力となつたと同じやうに、彼の近親であつたといふ唯一の事實が、彼等の決定的の利益となつたのである。

親愛なその群の中で、イエスは好きな人々、いはば、更に狭い範圍の仲間を明かに有つてゐた。ゼベダイの二人の子、ヤコブとヨハネとが、その小團體の第一線に屬してゐたやうである。二人とも情熱に富んでゐた。イエスは彼等の過度の熱心から『雷の子』といふ巧みな綽名をつけた。若しこの雷の子が雷電を驅使することができたら、あまり毎度それを使用したかも知れぬ。(○)弟のヨハネはイエスととりわけ或親密の程度であつたらしい。恐らく、ゼベダイの

第二子の周圍に、後れて集つて、この派の利益のかなり現れるやうに、彼の追憶を記した弟子達が、イエスのヨハネに寄せた愛情を誇張したことであらう。しかしながら、著しいことは、四福音書の中で、シモン・バルジヨナ即ちペテロ、ゼベダイの子ヤコブ、その弟ヨハネ等が、イエスが他の者どもの信念叡智に疑を挿んだ時に、呼び集める一種内輪の腹心の人達となつてゐたことである。のみならず、この三人は、漁業を営むにも同じ組合仲間であつたらしい。イエスのペテロに對する愛情は深いものであつた。正直、誠實で、人の先に立つこの人の性格は、時にイエスをしてその決斷のよきに微笑せしめた程、彼の氣に入つてゐたのである。あまり神秘的の方で無かつたペテロは、師に對して、自己の單純な疑惑、嫌惡、聖ルイに侍したジョアンヰルのそれを聯想せしめるやうな、極めて人間的な弱點を率直な態度で打ち明けてゐた。イエスは信頼尊敬を感じしめる友誼的の調子で彼を導くのであつた。ヨハネの方はといふと、その青年客氣のところと、潑刺とした想像力が、多大の魅力を有つてゐたに相違無い。非凡なこの弟子の人格は、後になつてから始めて發展した。彼の名を冠してある甚だ貴い教訓の含つてゐる、(イエスの性格が多くの點に於て撓められてあるにも拘らず)あの妙な福音書の著者で無い

にしても、尠くも彼がその機縁を作つた人のやうである。興奮性の熱病に罹つた者のやうな不安に襲はれながら、自己の追憶を混亂さすのが例であつた彼は、自己の師を描寫するつもりであるながら、師の面目を變へ、巧妙なる偽作達者に、完全な信念が主となつてゐないかのやうな如何はしい記録を作らしめる口實を供給することになつたのであらう。

發生期のこの宗派には所謂階級制は毫も無かつた。何人も互に「兄弟」と呼ぶべきであつた。彼一人が師であり、神のみが父であつたのであるから、ラビ、「師」「父」の如き上長の稱號を用ひることをイエスは絶対に禁止してゐた。最大なる者は、他人の奴僕で無ければならなかつた。けれども、シモン、バルジヨナはその同信の中にあつて、ある格段の地位を以て拔んでゐた。イエスは彼の家に宿し、彼の舟の中で教を授けてゐた。従つて彼の家は福音の説教をする中心であつた。世間では、彼をこの群の長と看做し、通行税の税吏が、この團體に課せられた税の支拂交渉をするのは彼に對してであつた。イエスをメシヤと認めたのはシモンが第一であつた。イエスが不評判であつた時、その弟子達に「汝等もまた去らんとするか」と尋ねると、シモンは「主よ、われら誰に適くべき、御身は永生の言葉を持てるに非ず

や」と答へた。イエスは彼の教會の中に於て、一種の敬稱を幾度も彼に授け、ケファ(石)といふシリヤ語の緯名で彼を呼んだ。それは、彼が新しき建物の礎石であるといふ意味であつた。また或時、彼はシモンに「天國の鍵」を約し、永久に准された決定を常に地上に告げうる權利を彼に與へたもののやうに想像される。(3)

ペテロの地位が上であることが、多少嫉妬を生ぜしめることになつたことは毫も疑の無いことである。その嫉妬は、殊にイスラエルの十二族を審判する爲めに、すべての弟子達が師の左右の玉座につくべき、將來の神の王國のことを考へて燃えたのである。その時、人々は、人の子の最も傍にあるべき者は誰であらうかと想像した。それをイエスの宰相補弼といふべきもののやうに想像したのである。ゼベダイの二子はその地位を希望してゐた。そんな考に煩はされてゐた二人は、その母を唆かした。母のサメロは、ある日イエスを別に呼んで、わが子の爲めにその名譽の二座を懇望した。イエスは、自らを高うする者は卑くせられ、天國は乏しき者のものなるべしといふ、平素の原則によつて其請を斥けた。この事は團體中に多少の物議を惹起した。ヤコブとヨハネとに對して大なる不満が起つた。ヨハネの筆とされてゐる福音書の中にも

同様の敵對心が現れてゐるやうである。この推定の筆者が、絶えず自己が「愛せられた弟子」であるとしてゐること、臨終の師が母を彼に對して、托したといふことを宣言してゐること、同時に自己をシモン、ペテロの傍に置かうとしてゐること、時としては、もつと舊い福音書の記者達が省いてゐる重要な場合の際に、ペテロよりも上に自己を置かうとしてゐることなどが、その福音書中に見えてゐる。

前述の人達の中で、多少人に知れてゐる人々は、始めから漁夫であつたやうに見える。誰も勞働をする風俗の單純素朴な國では、この職業も、基督教の起原の奇蹟を都合よく高める爲めに、説教者の誇張の言葉がそれにつけてゐるやうな、極端な賤しいものでは無かつた。要するに、弟子中の誰一人も、高い社會的階級には屬してゐなかつたのである。唯アルバイの子のレヴィといふ者と、恐らく使徒のマタイとだけが税吏であつた。しかしながら、猶太に於てこの名を與へられてゐる者は、羅馬でアブリカニと呼んでゐた(何時も羅馬の貴族であつた)高い階級の司稅官のことでは無かつた。それは司稅官の手先で、下級の使用人、單なる稅關の吏員であつた。アクルからダマスに達する、世界最古の道路の一であつた大道は、湖水に沿うてガリ

ヲヤを横ざり、従つて其處には此種の吏員が非常に多かつた。恐らくこの途上にあつたカペナムには、その吏員が多くなつたことであらう。この職業は決して評判のよいものでは無かつた。寧ろ猶太人の中では全く罪な職業と見られてゐた。彼等によつて新奇なものであつた租税は、彼等が臣民である證據であつた。ゴウロニチのユダの一派は、それを支拂ふことを異教の一行爲であると主張した。それ故、税吏は律法の狂信者達から呪はれてゐた。彼等を目して、刺客、大道泥棒、無頼漢の連中に過ぎないやうに人々が言つてゐた。かやうな役目を受負うた猶太人は、破門せられ、遺言をすることもできなくなつてゐた。彼等の帳場は呪はれ、其處へ行つて兩替をすることを教學者は禁じてゐた。社會から爪弾きされたこれらのあはれな人達が、彼等の間にあつた。レヴィの献じた、當時の言葉に従へば、『多くの税吏と罪人』のゐた龔安をイエスは承諾した。それは非常に評判の悪いことであつた。悪評のあるこれらの家では、悪い社會の者に會ふといふ危険があつた。思慮ある人々の偏見を傷けることを殆ど念頭にかけないで、正統派の人達によつて卑められてゐる階級を高め、かくして狂信者の極めて酷しい批難に、敢て身を暴露する彼をわれらは屢見るであらう。パリサイの教は、無数の戒律と一種の外

的『尊敬』をすることとで、救済を得られるものとしてゐた。神は唯一つの事、感情の正しいことだけを重んじ給ふのであると宣言した眞の道德家は、公的偽善によつて歪められてゐないすべての人々によつて、當然歡び迎へられたのである。

これらの幾多の獲物の一部を、その人格と言葉とにイエスは負ふところがあつた。胸に徹るやうな一語、唯覺醒されることだけを待つてゐる純白な良心の上に落ちて來る一瞥が、熱心な弟子を作るのであつた。時として、イエスは後にジャヌダルクが用ひるやうな、無邪氣な技巧を用ふることがあつた。彼はその人から多少の誼を得たいとおもふ人については、その人の事を知つてゐるやうな風を装つた。またはその人に對して胸に覺えのある境遇のことを想ひ起させた。かうして彼が感動させたのは、ナタナエル、ペテロ、サマリアの女等であるといはれてゐる。周圍に及ぼす彼の力の眞の原因、といふよりも彼の優越を隠して、時代思想——しかし立派に彼の思想であつた——を満足させる爲めに、彼は天上よりの啓示が、彼に秘密を發見させ、彼の心を開いたのであるといふことを信じさせた。彼は他の人類には達しられない圈内に生活してゐるものと人々から想像されてゐた。人々は、彼がモオゼ及びエリヤと山上で、談話

したと言つてゐた。彼の孤獨時代には、天使が来て彼に讃辭を呈し、彼と天との間に超自然の交通を作つてゐたものと人々は信じてゐた。(註)

第十章

湖畔の説教

右の如きものが、チベリアの湖畔に於て、イエスの周圍に集つた群であつた。その中で貴族階級は一人の税吏とある執事の妻によつて代表されてゐた。其他は漁夫と庶人であつた。その人達の無智は極端なものであつた。その人達の頭腦は秀れたもので無かつた。その人達は幽霊や悪靈を信じてゐた。希臘文化の一要素すら、此最初の清き群の中には入つてゐなかつた。猶太の教育も此人々には甚しく不十分であつた。しかしながら、情味と善き心掛とがこの人々に溢れてゐた。ガリラヤの美しい風土は、この淳朴な漁夫達の生活を不斷に楽しいものとしてゐた。彼等は、眞に神の王國の序曲を奏してゐたのであつて、單純、善良、幸福な人達であり、靜かに快き小海の上に揺られ、或は夕になれば、その岸邊に眠つてゐた。かやうに、空を見つ

流れる生の陶醉、常に自然と觸れて生れる柔かく強い焔、果てし無く深い紺碧の穹窿の下に、星の光に過したその夜々の夢などを、人は想像することができない。ヤコブが石を枕にして無数の子孫を授かる約束を星の中に見たり、エロヒムが天地の間を往復した不思議の梯子を見たりしたのは、こんな夜中のことであつた。イエスの時代には、天は閉ざされてゐなかつたのであり、地も冷たくなつてゐなかつたのである。雲はまだ人の子の上に開かれてゐた。天の使が彼の頭の上に降つたり、昇つたりしてゐた。神の國の幻は到るところにあつた。それといふのは、人がそれを胸に持つてゐたからである。これらの單純な人々の清い柔かな目は、宇宙を理想の泉として眺めてゐたのである。これらの幸福な子等の神の如く明かな良心に、また、その心の清淨が他日神の前に召さるる値のある人達に、恐らく世界はその秘密を顯してゐたのである。

イエスはその弟子達と、多くは戸外で生活してゐた。ある時は、彼は舟に乗つて、岸に集つた聽衆に教訓を授けた。ある時は、空氣の甚だ清い、眼界の甚だ明るい、湖畔の山上に座してゐた。誠實な群はそんな風に快活に諸所を彷徨ひながら、見當つた花の裡にも師の感興を拾ひつつ歩いて行つた。無邪氣な疑、軽い懷疑の間が、時として起ることがあつた。イエスは微笑をもつて、或は目つきで、人々の異議を沈黙させた。一步毎に、過ぎ行く雲、芽を出した種、黄色くなつた穂の中にも、人々は近く來らんとする王國の象徴を見た。人々は神を見、世界の主となるべき前日に在るものと信じてゐた。涙は歡びに變つた。それこそ普き慰めが地上に到來したのであつた。師は、

『幸福なるかな、心の貧しき者、天國はその人のものなり。』

幸福なるかな、悲しむ者。その人は慰められん。

幸福なるかな、柔和なる者。その人は地を嗣がん。

幸福なるかな、義に飢ゑ渦く者。その人は飽くことを得ん。

幸福なるかな、憐憫ある者。その人は憐憫を得ん。

幸福なるかな、心の清き者。その人は神を見ん。

幸福なるかな、平和ならしむる者。その人は神の子と稱へられん。

幸福なるかな、義のために責められたる者。天國はその人のものなり。』(マテ)

と言つた。

彼の説教は、自然と野の匂ひとに充ちた爽かな温かみのあるものであつた。彼は花を好んで、それから最も魅力のある教訓を取り出した。空の鳥、海、山、子供の遊戯は、代る／＼彼の教訓に出た。彼の言ひかたには、希臘風の句切は無く、希伯來の譬喩家の言ひ廻しかた、とりわけ『ビルケ、アボト』の中にある如き當時の猶太の博士達の格言に、ずつと多く接近してゐた。その敷衍は短いものであつて、コオラン風の章節の如きものとなつて居り、それを一緒に繋いだものが、後にマタイによつて書かれた長い説話となつたのである。その種々の断片を連絡させるために、何等中間のものがあつたのでは無い。しかしながら、概して同一の感興が、それらを貫いて統一してゐる。この師の勝れてゐたのは、特に譬喩に於てであつた。猶太教の中に、一つとして、彼にこの面白い形式のモデルを與へたものは無い。彼こそそれを創造したのである。もつとも、佛典の中に、福音書の譬喩と全く同じ調子の、また同じ要素の譬喩がある。しかしながら、佛教の影響が此處迄及んでゐるとは認めがたい。發生期の基督教と佛教とを同じやうに活かしてゐる、溫和の精神と感情の深刻とが、恐らくこれらの類似を説明

するに十分なものであらう。

われわれの暗い國でこそ、必要のものになつてゐる衣服家具に關しての、無駄な贅澤や外的の事物に對して、彼等が全く冷淡なのは、ガリラヤに於て人々の營んでゐる單純溫和な生活から來た結果である。寒い風土では、外部に抵抗して不斷の戦を強ひられるので、人々をして安穩を追求することに多大の價値を置かせることになる。之に反して、僅少の要求のみを喚起する國々は、理想主義と詩歌の國である。其處では生活の從屬物が、生活の享樂に比すると、物の數にも足りない。さういふ地では、家屋を美しくすることはくだらぬことである。人々では、きるだけ家の中にゐない。恩澤の乏しい風土の確りした規則正しい食物は、却て重苦しい不愉快なものと思はれるであらう。だから、衣服の贅澤といふことでは、神が地上に於て、空の鳥に與へてゐるものと、何うしても拮抗することができない。かやうな風土の所では、労働は無用の觀がある。労働の與へてくれるものは、労働しただけの價値の無いものである。野の動物は、最も富裕な人間よりも美服を着けてゐる。しかも、動物は何一つしてゐるのでは無い。怠惰が原因で無い時には大に精神的向上に効果のあるこの侮蔑が、イエスに興味のある寓話を

一四〇
想ひつかせてゐる。『汝等、蟲及び鏽の喰ひ、盗人の見つけ盗まん財寶を、地に匿す勿れ、蟲も鏽も盗人も無き天に財寶を蓄ふべし。汝の財寶のある所には、汝の心もあるべし。人は二人の主
に兼ね事ふること能はず、或はこれを憎み、かれを愛し、或はこれに親しみ、かれを輕しむべ
ければなり。汝等神と富の神とに兼ね事ふること能はず。この故にわれ汝等に告ぐ、何を食ひ
何を飲まんを生命のことを思ひ煩ひ、何を蓄へんと體のことを思ひ煩ふな。空の鳥を見よ、播か
ず、刈らず、倉に收めず、然るに汝等の天の父はこれを養ひたまふ。汝等は之よりも遙に優れ
る者ならずや。汝等の中誰か思ひ煩ひて身の長一尺を加へ得んや。また何故衣のことを思ひ煩
ふや。野の百合は如何にして育つかを思へ、勞せず紡がざるなり。されどわれ汝等に告ぐ、榮華
を極めたるソロモンだに、その服裝この花の一つにも如かざりき。今日ありて明日爐に投げ入
れらるる野の草をも、神はかく装ひ給へば、まして汝等をや、ああ信仰うすき者よ。さらば
何を食ひ、何を飲み、何を著んと思ひ煩ふな。これ皆異邦人の切に求むるところなり。汝等の
天の父は、すべてこれらの物の汝等に必要なるを知り給ふなり。まづ神の國と神の義とを求め
よ、さらば凡てこれらの物は汝等に附加へらるべし。この故に明日のことを思ひ煩ふな、明日

は明日みづから思ひ煩はん。一日の苦勞は一日にて足れり。』(3)

全くガリラヤ風のこの感情は、發生期のこの宗派の運命の上に、決定的の影響があつた。幸
福なこの群は、その必要物の満足に要したすべてのものに就いては、天の父に依頼し、生活の
煩をもつて、あらゆる善の萌芽を打消す害悪と看做すことをその第一の法則とした。その日そ
の日に、この群は神に向つて翌日の食を乞うた。蓄財が何の役に立つ。神の國は將さに來らん
としてゐる。『汝等の所有を賣りて施しをなせ。舊びぬ財布を天につくり、盡きぬ財寶を天に貯
へよ』(3)と師は言つてゐる。到底會ひもしない相續人の爲に蓄財をすることくらゐ愚なこと
は無い。倉を擴張し、永い將來の爲めに貯藏した男が、それを樂しまない中に死んだことを、
人間の愚かな例としてイエスは好んで引用した。ガリラヤに深い根をもつてゐた劫盜のあつた
ことも、斯様な見かたに多大の力を與へたのである。その憂の無かつた貧民は、自己を神の寵
兒と看做したに相違無く、之に反して、富者は不安な所有を持つてゐたので、眞に相續人の無
い者であつた。所有權に就いて、極めて嚴重な觀念の上に築かれてゐるわれらの社會では、貧
民の位置は怖るべきものである。それは文字通りに日の目を見ないのである。地を所有してゐ

る者で無ければ、花も、草も、樹蔭も無いのである。東洋に於ては、そこに何人の所有でも無い神の賜物がある。所有者は、僅に些細な特権を有つてゐるばかりであり、自然は衆人の所領である。

しかし、發生期の基督教は、この點に就いては、僅に、隱遁生活を實行してゐた猶太宗派の進んだ跡を辿つたに過ぎなかつた。共產主義の原則は、同様に異邦人やサドカイ人等から嫌はれてゐた、エツセネ派、テラプウト派などの宗派の精神であつた。正統の猶太人達にとつては全く政治的のものであつたメシヤ精神が、これらの宗派では全く社會的のものとなつてゐた。平穩で、規則のある、冥想的の生活からして、その部分を個人の自由に放任してゐたこれらの小教會——新ピタゴラス派を幾分摸倣したものと想像しても恐らく誤では無いやうである——は地上で天國を創設するつもりであつた。人類博愛と眞の神を清く禮拜することの上に築きあげられた幸福生活の夢想郷が、敬虔な人々の専ら念頭にかけて事柄で、諸所に大膽眞摯な、しかし將來の少い試みを生じてゐた。(4)

エツセネ派との交渉を明かにすることは極めて困難であるが(歴史では類似といふこと

は必ずしも交渉のあつたこととはならぬ)、イエスは上述の點に於て、慥に彼等の同胞であつた。財産共有といふことが、暫くこの新社會に於ける規定であつた。貪欲は重い罪であつた。ところで、注意しなければならぬことは、基督教の道德であつた貪欲の罪といふのは、當時は單に財産に對する執着の意味であつたことである。完全なイエスの弟子となる第一の條件は、自己の財産を投げ出して、それを以て貧民の用に立てることであつた。この極端なことに對して、逡巡する者は團體に加入することができなかつた。神の國を認めた者は自己の財産全部をつくしてそれを購ふべきこと、及びさうしても尙徳のある取引をしたことになるのだといふことを、毎度イエスは繰返して言つた。「畑に財寶の在ることを見出したる者は、一刻をも猶豫せず、有てるものを賣りてその畑を買ふなり。價いと高き眞珠を見出したる商人は、すべてを金に代へてその眞珠を買ふなり。」と言つてゐる。遺憾ながら、この制度の不便なことが、やがて感ぜられるやうになつた。そこで會計掛を一人要することになつた。人々はケリオトのユダをその掛に選んだのである。理か非か、共有の金を盗んだといつて、人々は彼を咎めた。さうして反感の重荷が彼の上に積まれるやうになつたのである。

地上の事よりも、天上の事に多く氣を取られてゐた師は、時として尙一層不思議な經濟學を教へることがあつた。ある變な警諭談の中で、一人の番頭が、主人に迷惑をかけて貧困の者の間に友人を作つたことで賞められてゐる。それは、貧困の者がその代りに彼を天國に導き入れるやうにといふ目的からであつた。實際、貧民は天國の施與者に相違無いのであつて、その貧民達は自分達に施しをしてくれた者だけを天國に迎へるであらう。將來を思慮する聰明な者は、だから、貧民の歡心を得ようとつとめる筈である。福音書の記者は、『食欲であつた異邦人等は、これを聞いて、彼を嘲つた』といつてゐる。彼等はまた次のやうな怖しい警諭談を聞いたのである。『或富める人あり、緋色の衣と細布とを着て、日々美食してありき。又ラザロといふ貧しき者あり、腫物にて腫れたゞれ、富める人の戸口に寝ね、その食卓より落つる物にて飽かと思ふ。而して犬ども來りて其腫物を舐れり。遂にこの貧しきもの死せしに、御使達に携へられてアブラハムの懷に入れり。富める人もまた死して葬られしが、黄泉にて苦惱の中より目を擧げて遙にアブラハムと其懷にあるラザロとを見たり。乃ち呼びて言ふ。父アブラハムよ、我を憫みてラザロを遣し、その指の先を水に浸してわが舌を冷させ給へ、われはこの焔の中に悶

ゆるなり。されどアブラハム言ふ。子よ憶へ、汝生ける間、汝の善き物を受け、ラザロは惡しき物を受けたり。今ここにて彼は慰められ、汝は悶ゆるなり。……(5)』これ以上正しいことがあるであらうか。後に、人々はこれを『惡しき富者』の警諭と呼んだ。しかしながら、これは單純に『富者』の警諭談である。富んでゐるといふ理由からして、また財産を貧者に頒たないからといふ理由で、更に戸に立つてゐる者が不味い食事をしてゐるにも拘らず美食してゐるといふ理由からして、その人は地獄に墮ちたのである。最後に誇張を少くして、財産を賣りそれを貧者に頒すべき義務を、唯完全の人となるための忠告として出してゐる時にも、イエスは猶且つ怖しいこんな宣言をしてゐる。『富める者の神の國に入るは、駱駝の針の孔を通るよりも難し。』(6)

讚嘆するに値する深遠な或感情が、すべてこれらの點に於て、イエス、並びに彼に同行した愉快な人達を支配して居り、且彼をもつて、以後永久に心の平和の眞の創始者、生活の大なる慰安者とした。『この世の煩ひ』と彼の稱するものから人々を解脱させる時、イエスは極端に馳せ、人間社會の根本的條件を害したところもあらう。しかしながら、彼はこの涙の谷を通し

て、幾世紀の間、人々の胸に歡びを充たす高遠な精神主義を作りあげたのである。彼は人間の不注意、哲學及び道德の缺如は、屢々何心無く耽る娛樂、文明が際限無く増加する周囲の心勞に起因するものであることを完く正しく認めてゐた。かくて福音書は、俗生活の倦怠に對する、最高の醫藥、不斷の精進、地上のあはれむべき煩累には力強い慰藉となり、マルタの耳に囁いたイエスの、「マルタよ、マルタよ、汝は多くの事柄に心づかひせり。されど唯一つのことこそ必要なれ」のその如き優しい言葉となつたのである。イエスのお蔭で、忌まはしいか、さも無ければ恥づべき務めに、全く勞せられてゐる最も暗い生活が、天の一隅にその遁れ路を得たのである。われらの忙しい文明の中にあつてガリラヤの自由生活の記憶は、天上の句の如く、或は早魃と卑俗とを妨げて全く神の野を犯すことを得させなかつた「ヘルモンの露」の如きものであつた。(5)

第十一章

貧者の天下としての神の王國

光と空氣とで生活に事を缺かない國にとつてこそ適當であるこれらの格言、或はまた、父の胸に信賴して生活する神の子の群の、そのデリケートな共產主義は、始終そのユトピアが實現されやうとしてゐると信じてゐる無邪氣な宗派には、適當なものであつたらう。けれども、かやうな原理が社會全體を結合させることのできないものであつたことは明白である。事實イエスは、公けの世界が、毫も己の王國を承諾してくれらるもので無いことを速かに悟つたのである。そこで、彼は非常な大膽をもつて決心をした。すべてこれらの乾からびた心と狭い偏見に囚へられてゐる人々を其處に置去りにして、彼は單純な人々の方に向つたのである。大仕掛な身分の入替が行はれる筈になつた。神の王國は、第一には、小兒及び小兒に似てゐる人達のために、

第二には、社会的に行倒れた犠牲者、善良なしかし謙遜な人々を排斥するこの世からして虐待される人達のために、第三には、異端者、離教者、税吏、サマリヤ人、ツロ及びシドンの異教徒等の爲に作られたものである。力の籠つた譬喩を以て、彼は此民衆に對する叫びを説明し、それを正常なものとしてしてゐる。ある王が婚筵を設け、客を迎へに從僕を遣つた。或者は斷りを言ひ、或者は使者を虐待した。そこで王は大なる決心をした。身分ある者はその招きに應じようとしなかつた。さうなると、行き會つた誰でも、廣場なり、露路なりで拾ひ集められる人達、貧民、乞食、跛者でも構はぬ、部屋を一杯にしなければならぬ。さうして王は言つた。

『われ汝等に告ぐ、かの招きおきたる者のうち一人だに、わが夕餐を味ひ得る者無し』と。

この純粹のエピオニズムの主義、即ち貧者のみが救はれ、貧者の世が來るといふ學説が、即ちイエスの學説であつた。『禍なるかな、富む者よ、汝等は既にその慰めを受けたり。禍なるかな、今飽く者よ、汝等は飢ゑん。禍なるかな、今笑ふ者よ、汝等は悲み泣かん。』彼は尙かう言つてゐる。『汝饗宴を設くる時、朋友、兄弟、親族、富める隣人などを招くなかれ。彼等も亦汝等を招きて報をなさん。饗宴を設くる時は、貧しき者、不具、跛者、盲人などを招け、彼等も

報ゆること能はぬ故に、汝一層幸福なるべし。正しき者の復活の時すべて報いらるるなり。』彼が毎度、『善き金貨となれ』換言すれば、『貧しき者に與ふるは、そは神に貸したるなり』といふ舊い語によつて、貧者に汝等の財産を施し、神の王國の爲に好き投資をなせと、繰返し言つたのも、恐らく同様の意味である。

しかしながら、其處に新発見があつたのでは無い。人類の記憶してゐる中で、最も高尚な（純觀念の世界に限られた唯一のものであるから、また成功した唯一のものである）民主的運動はずつと以前から猶太民族を焦慮させてゐたのである。富者強者に對して、神が貧者弱者の復讐者であるといふ思想は、舊約聖書の記録中の各頁に見出される。イスラエルの歴史は、あらゆる歴史中で、最も民衆的精神が常に支配してゐる歴史である。眞の保民官で、しかも最も大膽な保民官であつた豫言者達は、絶えず、強者に反抗して怒號し、一方では、『富、不信、兇暴、惡虐』の言葉の間に、他方では、『貧困、溫和、謙遜、敬虔』の言葉の間に、密接な關係を設けた。セルウクス朝の時代に、貴族が殆ど全部國教に背いて希臘精神に化したので、これらの觀念聯合は益々強まるばかりであつた。エノク書には、一般社會、富者、強者に對して、福音書の

それよりも一層亂暴な呪咀の言葉が含まれてゐる。それには、奢侈を罪惡として示されてゐる。この奇怪な黙示録の中で、『人の子』は諸王を王座より引下し、彼等の逸樂の生活を奪ひ、彼等を地獄に突き墮してゐる。猶太が俗生活に赴いたこと、近く極めて俗的要素の奢侈安樂の入口て來たことが、怖しい反動を惹起して、淳朴質素の讚美となつてゐた。『汝等の祖先の貧しき住居と遺産とをさげすむ者は禍なるかな、他人の汗をもつて王宮を建つる汝等は禍なるかな、それを築ける一々の石と煉瓦とは一々の罪なり。』エビオン(貧者)の名は、以前から聖者、神の友の同義語となつてゐた。それをガリラヤのイエスの弟子達が好んで自己のものとしやのである。それは永い間、イエスの最初の教訓及び言葉を忠實に守り、自分達の中にイエスの家の子孫があると自慢してゐたバタニヤ及びハランの猶太教的基督教徒(ナザレ人、ヘブライ人)の名であつた。二世紀の末に、其他の諸教會を凌つた大潮流以外に残つてゐたこれらの善良な宗派の人達は、エビオニスト(異端者)^{エビオニスト}として取扱はれ、人はその名を説明するために所謂エビオンといふ邪教の開祖を捏造することになつた。(一)

貧困を誇張する趣味が、さう永續的であり得なかつたことは容易に認められる。大建設には常に混入するしかも時日がそれを正しきものとする種類の、ユトピヤの一要素がその裡にあつたのである。人類社會の眞只中に移された基督教は、その起原に於て全く修道者のものであつた佛教が、改宗歸依する者の増加とともに、俗人をも加算するやうになつたと同様に、他日容易くその中に富者を有することを承諾しなければならなくなつた。しかしながら、人は常にその起原の證跡を保存するものである。速かに過去のものとなつて忘れられたにも拘らず、貧者主義は、基督教の制度史の中に亡びざる酵母を残した。ロギヤ即ちイエスの言説集は、バタニヤのエビオニイト教會の中で出來たか、尠くも完成されたものである。『貧困』は、イエスの直系者にとつては最早棄てることのできない一つの理想となつた。即ち何一つ所有せぬことが眞の福音的状态となつた。乞食をすることは、一つの美德、一個の神聖な状態となつた。あらゆる宗教的建設の中で、最もガリラヤの運動と類似してゐる、十三世紀のウムブリヤ教徒の大運動は、全部貧困の名に於て成されたものである。その優れた慈心、微妙精緻柔和な宇宙の生命との交通によつて、最もイエスに似てゐたこの世の人、アツシジオのフランシスコは貧しい人であつた。中世の乞食宗派、無數の共產宗派(リオンのポオウル、ベガアル、ボンゾム、

フラトリセル、ユミリエ、ボオヴルゼヴァンジェリク、「永久福音」の宗派の人々は、イエスの眞の弟子であることを主張し、且實際眞の弟子であつた。しかしながら、此時も尙新宗教の最も不可能の空想が澤山にあつた。現代の産業的行政的社會に對して甚しき焦燥の原因となる宗教的乞食も、それに適した時代と土地とにあつては興味の饒かなるものであつた。それは冥想的な溫和な多くの人々に唯心に叶ふ一状態を提供したのである。貧困を以て愛と欲望との對象としたこと、乞食を祭壇に上せて貧者の衣を尊崇したことは、經濟學の甚だ感心することのできない疎腕であるが、眞の道德家は之に對して無頓着であることはできない。人類はその重荷を運ぶためには、俸給によつて完全に支拂を受け得られるもので無いことを信ずる必要がある。人がそれに對して成し得る最大の奉仕は、人類は單に麵麩のみにて生きるもので無いといふことを屢々反覆していふことである。

あらゆる偉大なる人と同様に、イエスは民衆に對して興味を有ち、彼等と一緒に在ることを心安く感じてゐた。彼の思想中の福音書は貧者のために作られた物である。彼が救済の好き音信を齎したのは彼等に對してである。正統の猶太教から侮蔑せられた者は、すべて彼の好む者

であつた。民衆愛、その無力に對する憐憫、自己の裡に群衆の精神を生活するかの如く感じ、自己をその本來の代辯者と認める民主的元首の感情が、彼の行爲及び彼の言説の中に常に發露してゐる。

選ばれたる群は、實際、嚴格な人々の甚だ驚くに違ひ無い、極めて雑多な性質を示してゐた。その中には、自重する猶太人の交際しさうにも無かつた人々があつた。恐らく物識りで、形式主義の、自己の表面の道德に自惚れてゐる有産階級に於けるよりも、普通の尺度以外にあつたこの社會に、イエスは多くの優れたところと、情味とを見出してゐたのであらう。パリサイ人は、モオゼの掟を誇張して、自分達よりも嚴格で無い人々と接觸することを、汚れることであるやうに信じてゐた。食事の時、その人は、殆ど印度のそれにひとしい兒戲のやうな階級的差別に達してゐた。これらの宗教的感情のあはれな迷夢を侮蔑して、進んでその犠牲となつてゐる人々の宅に出掛けてイエスは食事をした。彼の傍には、所謂宜しからぬ生活の人々が居るのを見かけることがあつた。その宜しからぬ生活だけはあつても、恐らくその人々には、慥に僞信心の滑稽さは無かつたことであらう。しかしパリサイ人及び博士達は眉をひそめて叫んだ。

「見よ、何たる人々と彼は食事せるならん！」と。その時イエスは、偽善者等を憤らせる鋭い婉曲な返事をした。「健康の者は醫者を要せず」とか「百足の中一匹の羊を失ひたる牧人は、失せたる羊を尋ね求めむがため、餘の九十九匹を遺し置かん。さてそを見出したる時、喜びてこれを肩にかけ持歸らん」とか、或は、「人の子は失せたる者を尋ねて救はんために來れり」とか、或は、「われは正しき者を招かんとにはあらで、罪人を招かんとて來れり」とか、尙最後に、放蕩息子の面白い譬喩をあげてゐる。それには、墮落した者が、常に正しかつた者以上に一種の愛の特權を有つてゐるものとして示されてゐる。夥しき魅力に驚き、又始めて徳に心のひかる接觸を味つた弱き或は罪ある婦人達は、自由に彼に近づいて來た。彼がそれを斥けないのを人々は不思議におもつてゐた。厳格な人達は、心中に「この人は豫言者にあらず、若し然らんに、彼に觸れし女の罪ある者なることを悟ること必定なればなり」とおもつた。イエスは、同額の負債で無い二人の債務者を赦した債權者の譬喩によつて之に應酬した。さうして、彼は最も重き債務を赦された者の運命を選ぶことを憚らなかつた。彼は、その中に混つてゐる愛に比例してのみ、その精神状態を評價した。涙に濡れた心もち、己の過失によつて謙る心

持になつた婦人の方が、墮落しなかつたからといつても、一向その田斐の無い凡庸人より、彼の王國に近い者であつた。また一方からは、これらの可憐な人々が、此宗派に歸依することによつて、容易に舊の位置に復し得る方法のあることを知り、燃えるやうな心を抱いて彼に愛着したことが想像される。

當時の社會的感情を彼が一向顧みなかつたことから起つた不滿の聲を、彼は緩和する態度に出なかつたばかりで無く、彼は一層面白がつてそれを激せようとさへする觀があつた。この「世俗」蔑視——これは偉業と大なる獨創の條件である——を、彼以上に堂々と公言したものは嘗て無かつた。或偏見のために社會から虐げられた時の外は、彼は富める者を赦さなかつた。正統の有力者よりも、怪しい生活をして輕んじられてゐる人達の方を、彼は憚るところ無く採擇した。「税吏と遊女とは汝等に先だちて神の國に入らん。ヨハネ來りしに、税吏と遊女とは信じたり。然るに汝等は猶悔改めざりき」と彼は彼等に告げてゐる。歡樂の女が示した善き例に彼等の従はなかつたことに對する詰責は、嚴格と堅固な道德とを賣物にしてゐる人達に對して、どんなに手酷いものであつたかが了解される。

彼は何等外形を装ふことも、壯嚴を見せかけることも無かつた。彼は歡樂を避けることをしなかつた。彼は喜んで婚禮の餘興に列なつた。小さな町のある婚禮に興を添へるために、彼は一つ奇蹟を示したとも傳へられてゐる。東洋に於ては、婚禮は夕方に催される。誰も彼も燈火を携へる。その往つたり來たりする光は極めて面白い觀物である。イエスはこの楽しい生々した光景を愛して、幾つと無く譬喩をそれから引き出してゐる。かやうな行爲を、バプテズマのヨハネのそれと較べて人々は眉をひそめた。ある日、ヨハネの弟子達とパリサイ人等が斷食を行つてゐた時、人々は彼に向つて、「ヨハネの弟子とパリサイ人とは斷食し祈禱するに、汝の弟子達は食ひ且飲むは何故なるか」と尋ねた。イエスは答へて、「彼等をしてあるが儘に委し置け、新郎の友だち新郎と偕にあるうちは、彼等に斷食せしめ得んや。されど日來りて新郎をとられん、その日には斷食せん」と言つた。彼の溫和な快活さは、絶えず活々した反省や愛嬌のある冗談になつて現はれた。「われ今の代の人を何に比へん。彼等は誰に似たるか。彼等はわらべ廣場に坐し、たがひに呼びて、

われら誦ふに、

なれは踊らす。

われら歎くに、

なれは泣かず。

といふに似たり。それバプテズマのヨハネ來りて、パンをも食はず、葡萄酒をも飲まぬ時、「狂人なり」と汝等言ひ、人の子來りて飲食すれば「視よ、食を食り、酒を好む人、また稅吏罪人の友なり」と汝等言ふなり。されど大なる知慧はその成せることによりて正しとせられたり。」(2)

かやうに、彼はガリラヤを廻り歩いて、常に饗宴の中にあつた。彼は驃馬を用ひた。それは東洋に於ける、甚だ良い、甚だ安全な乗物で、その長い眉毛の蔭にある大きな黒い眼は非常に柔和である。彼の弟子達は、時に彼の周圍に、田舎風の裝飾を施すことがあつた。その時彼等の衣服は敷物の代りになり、しかも、それが主なるものであつた。彼等は、それをイエスの乗つてゐる驃馬の上に掛け、或はそれをイエスの通る地上に展げた。何處の家に彼が入る時も歡喜と祝福とがあつた。彼は町めいた所、或は大きな百姓家のあるところに足を止め、其處で熱心な待遇を受けた。近東地方では、外人の宿泊する家が直ちに公會の場所となり、村中學つて

來り集るのである。小兒等もそこに侵入して來る。召使等がそれを逐つても逐つても歸つて來る。そんな無邪氣な聽衆を手荒く扱ふことは、イエスには耐へられなかつた。彼は彼等を近づかせて接吻した。さういふ態度に勵まされた母親達は、彼に觸つて貰ひたさに、各乳呑兒を彼の許に伴れて來た。女だちは來て、彼の頭に膏油を塗り、彼の足に香水を注いだ。時としては五月蠅さに、彼の弟子がその女だちを斥けることがあつた。しかしながら、昔ながらの習慣と心の純眞を示すことであれば、何事でも好んだイエスは、熱心すぎる己の友人の成した罪を償つてやつた。彼は彼を崇めようとする者を庇つてやつた。それ故婦人や小兒が彼を崇め敬つた。常に誘惑されやすいこれらの敏感な者どもを、家庭から浚つて行くといふのが、毎度彼に對して敵の放つ一つの批難であつた。(3)

かやうに、發生期の宗教は、多くの點からして婦人小兒の運動であつた。後者はイエスの周圍にあつて、彼の清淨な王權創立のための少年近衛隊の如きものであつて、彼に對して、彼等は可愛しい歡聲を發した。彼を『ダビデの子』と呼び、ホザナと叫んで、彼を取圍みながら椰子の葉を捧げるその態を、彼は非常に喜んだのであつた。イエスはサヴォナロオラの如く、彼

等を用ひて恐らく聖き使命の機關としたのであらう。彼は、これらの若き使徒が、彼を危からしめず、前に立つて突進し、自ら取ることを憚つてゐた稱號を己に與へるのを見て、大に満足であつた。彼は彼等をいふが儘に放任し、人がそれを聞いたかと尋ねることがあると、幼き唇から出る讚美は、神にとつて最も快いものであるといふ遁辭のやうな返事をした。(4)

彼は機會ある毎に、幼き者は神聖な者であるといふこと、神の王國は小兒のものであること、其處に入るには子供にならねばならぬこと、子供の心になつてそれを受けねばならぬこと、天の父は賢い者には秘密を匿し、子供にはそれを洩すものだといふことを繰返して言つた。彼の弟子の觀念は殆ど小兒のそれと混同されてゐる。彼等が稀しくも無い席次争ひをしてゐたこと、イエスは一人の子供を取つて、それを彼等の眞中に置き、さうして彼等に向つて、處に最も偉い者がゐる。この子供の如く己を卑うする者が天國では最も偉い者である』と教へた。(5)

事實、この地を所有する者は、神のやうな自然と歡びに目の眩む無邪氣さとを有つてゐた。年であつた。何れも非常に憧憬されてゐる王國が近く現出するものと常に信じてゐた。何れ

早主と並んでその王座に座してゐる姿を夢みてゐた。誰も彼も互に王國の座を頌ち、皆その日を指折り算へてゐた。それが『好き音信』と呼ばれるものであつて、その教義に別の名は無かつたのである。すべての近東語と同様に、希伯來語も波斯から藉り、最初はアケミヌス王家の庭園の意義であつた舊い言葉の樂園が、諸人の空想を一言で盡してゐた。それは、人々がこの世で營んでゐる面白い生活を永久に続けられる楽しい園であつた。この陶醉の繼續したのは、幾許くらゐであつたか知ることはできない。魔法のやうな出現の續くかぎり、人が夢の時間を測定しないと同じやうに、時間の測定は無いであらう。とにかく、その繼續は中止されたのである。その一週は一世紀の如くであつた。しかしながら、それが僅に數年乃至數個月を充たしたものであつたにしても、その夢は非常に美しかつたのであつて、その爲めに人類は爾來生き存へたのであり、その微かな匂ひを収めることすら、猶われらに慰安となるくらゐである。これ程多くの歡びが人の胸を膨らせた例は嘗て無かつた。人類は、その遊星から上に飛び上らうとした最も力のこもつた努力をした瞬間に、地上に縛りつけてゐる鉛のやうな重みと、この世の生の悲哀とを忘れてゐたのである。己の眼をもつて此神聖な顯現を見、それが唯の一日であ

つたにしても、無比の此幻影に参加した者は幸福なことであつた。しかしながら、あらゆる幻影から解脱して、自己の裡に天國の出現を描き、千年期説の夢をもたず、架空の樂園を描かず、天に象徴をも認めずして、心の正しさと靈の詩歌とによつて、胸中に眞の神の王國を創りうる者は、更に一層幸福な者であるとイエスはわれらに語ることであらう。

第十一章

囚はれ人ヨハネよりイエスへの使　ヨハネの死　兩派の關係

歡喜のガリラヤが、戀人の來たのをお祭り騒ぎをして祝つてゐた間に、マケロの牢獄の中では憂鬱のヨハネが、期待と渴仰とで憔悴してゐた。數個月前に、自派の中で會つた若い師の成功したといふ報知が、彼の許に達した。豫言者達の豫言したメシヤ、イズラエル王國を復興すべき者の來たといふこと、及び不可思議の業績によつて、ガリラヤにその顯現を證明しつゝあるといふことが傳へられた。ヨハネはその噂の真相を尋ねたいとおもつた。彼は自由に弟子達と交通してゐたので、ガリラヤのイエスの許へ遣るためにその中から二人の者を選んだ。

二人の弟子は評判の絶頂にあつたイエスに會つた。彼の周圍に漂つてゐたお祭り氣分に二人の者は驚いた。斷食と、執拗な祈禱と、憧憬のみの生活とに慣れてゐた二人は、突然歡迎の喜びの

中に入り込んだのを見て喫驚した。彼等は使の趣をイエスに通じた。「來るべき者は汝なるかわれらは別の者を待つべきか」と尋ねたのである。その頃から最早自己の救世主たる任務について、疑惑をもつてゐたかつたイエスは、神の王國の到來を證明するものとされる病者の治愈、貧しき者に告げられた來るべき救ひの好き音信などの事柄を二人のために列擧した。彼はすべてそれらの業績を成しつゝあつたのである。彼は附け足して、「されば我を疑はざる者は幸福なるかな」と言つた。この返事がヨハネの生在中に耳に入つたか、それともこの返事が嚴肅なこの禁欲者に、どんな心持を起させたか全く解らない。彼の豫告した者が既に世に生きてゐるものと信じて、安心して死んだか、それともイエスの使命について疑惑を存してゐたか。毫もわれわれにはそれが知れない。けれども、彼の派が基督教の教會と並行して繼續してゐたところを見ると、イエスに對して尊敬はしてゐたが、イエスを以て神の約束を實現する者とはヨハネは認めてゐなかつたと信じた方がいやうである。それに死が來て彼の困惑を解決してしまつた。この行者の左右することのできない自由が、それに相應しい最後によつて、その不安な苦みの生涯を飾らなければならなかつたのである。

最初アンチパスがヨハネに對して示した寛大な心持ちは、長く續くわけには行かなかつた。基督教の傳説によると、ヨハネは封主との會談の際に、封主の結婚は不法のものであるといふこと、及びヘロデヤを放逐すべきであるといふことを始終繰返して言つたとのことである。ヘロデ大王の女孫が、この蒼蠅い忠告者に對して、憎惡の念を抱くべきであつたことは、容易く想像されることである。彼女は彼を亡き者にする機會を只管待つてゐたのである。

彼女の最初の結婚から生れた娘のサロメもやはり野心家であり、淫奔であつたから、彼女の謀に加擔した。この年（恐らく紀元三十年）アンチパスはその誕生日にマケロにゐた。以前にヘロデ大王が、城砦の内部に立派な宮殿を建造させてゐたので、封主は毎度其處に來て住つてゐた。彼は其處で盛な宴會を催し、その時サロメが、シリヤでは身分の高い者に不似合のものとおもはれる性質の舞踊を行つた。興に入つたアンチパスが踊手に向つて、所望は何かと尋ねた時、女は母親の教唆によつて、「この盆の上にヨハネの首を」と答へた。アンチパスは喜ばなかつた。しかし、彼は拒むことをも欲しなかつた。一人の衛兵が盆を持つて囚人の首を斬りに行つた。そしてそれを持つて來た。

洗禮者の弟子達は、その死骸を貰つて墓に入れた。人民は甚だ不平であつた。それから六年の後、ハレトが、マケロを奪り還し、娘の不名譽の復讐をする爲めに、アンチパスを攻撃した。

アンチパスは敗北した。一般に彼の敗北はヨハネを殺した罰と看做された。

その殺された報知が、ヨハネの弟子達によつてイエスの許に達した。ヨハネがイエスに對して採つた最後の態度が、全く兩派の間に密接な關係を作るやうになつた。アンチパスの方から惡意の加はることを虞れたイエスは、多少の注意を拂つて沙漠に隱遁した。多くの人々が彼の跡を趁うた。聖い群は極端に質素な生活を其處で行つた。人々は、無論それにも奇蹟が見えたと信じた。この時から、ヨハネの事といへば、イエスは必ず倍にも讚美して語つた。彼が豫言者以上であつたこと、律法や昔の豫言者等は、彼に至る迄の力に過ぎなかつたこと、彼が彼等を無用な者にしたが、次いで天國が來つて彼をも無用にするのであるといふことを、イエスは遲疑するところ無く宣言した。尙最後に彼はヨハネのために基督教の奇蹟史の中に格別の一位を與へ、彼を以て舊約の世と新約の世とを繋ぐ連鎖とした。

この點について、その意見を極力引證せられる豫言者のマラキは、最後の革新の爲めに人々

に用意をさせ、神に選ばれた者より前に來つて、道を平坦にすべき筈の使者として、救世主の一先驅者のあることを大に力説してゐた。その使者といふのは豫言者エリヤその人のことであつて、非常に普及してゐた信仰によると、彼が運び上げられてゐる天から、間もなく降臨して、改悛によつて人々を大なる世の爲めに準備させ、神と人民とを和解させる爲に來るといふのであつた。時としては、エリヤに對して、一二世紀以前から高い聖位を與へられてゐた教父エノクを、或は一種の人民保護の天才を有つてゐて、常に神の玉座の前で人民の爲めに祈禱に耽つてゐると考へられてゐたエレミヤを結びつけて考へてゐた。メシヤの先驅者として復活すべき二人の豫言者のあるといふ觀念は、波斯から來たものと固く信ぜられてゐる。これはバルシイの教義中にも著しく認められる(二)。それは何れにしても、イエスの時代に、この觀念がメシヤに關する猶太教理の一要素であつた。悔悟の衣をつけた「二人の誠實な證人」の出現が、宇宙を恍惚とさせ、大戯曲の展開する序幕であると信ぜられてゐた。

かういふ思想からして、イエス及びその弟子が、バプテズマのヨハネの使命に關して躊躇するところの無かつたわけが解る。エリヤはまだ來ないのであるから、メシヤの事は問題になら

ぬといふ異議を學者等がすると、彼等は、エリヤは來た、ヨハネが復活したエリヤであつたのであると答へた。その生活の状態から、また既成の政權に反抗したことからして、ヨハネは實際舊いイスラエル史中のあの奇異な姿を聯想させたのである。イエスは彼の先驅者の優秀であつたことと、その功績とについて彼を偲ばぬ日とは無かつた。人間の子の中でヨハネ以上に偉大な者は生れてゐないとイエスは言つて居た。彼は、パリサイ人や博士等がヨハネの洗禮を受けなかつたこと、及び彼の聲によつて改宗しなかつたことを力強く批難した。

イエスの弟子達は、師のこれらの教理に忠實であつた。ヨハネを尊敬することは、基督教の初期の間に變らぬ傳統であつた。彼をもつてイエスの親族であると想像する者もあつた。彼の洗禮は、第一の事實と看做され、殆ど全福音史中の必須の序文と考へられた。ヨセフの子の使命を、何人も承認することのできる證據の上に築き上げようとして、ヨハネがイエスを一見するや否や彼をメシヤと宣言したと語られてゐる。また彼がその靴の紐を解くにも値しないものと自己を認めたこと、彼が最初イエスに洗禮を施すことを拒み、彼こそイエスの受くべきものと主張したといふことを語つてゐる。それに誇張のあることは、ヨハネの

使節の疑を挿んだ質問の形式が十分證明してゐる。しかしながら、もつと廣い意味に於て、ヨハネは基督教の傳説の中で、實際に嚴肅な準備者、花婿の來る喜びの前に悔悛の説教をする沈黙の人、神の王國を豫言し、それを見ずして死ぬ豫言者であつたものとして残つたのである。基督教の起源の巨人であつた、この蝗と野の蜜とを養つた、あの邪曲を直うする秋霜の如き人こそ、神の王國の甘味に唇を準備させる苦味であつた。ヘロデヤの爲めに首を斬られたこの人が基督教殉教者の開祖である。彼は新しい信仰の第一の證人であつた。眞の敵を彼に認められた人は、彼の生存することを許すことができなかった。基督教の門出に横はつたその兩斷せられた屍は、多くの他の者が彼の後から通らねばならぬ血腥い道を記しづけたのである。

ヨハネ派はその創立者と俱に亡びなかつた。それはイエスの派とは別に、そして最初は親交の間柄で、暫らくの間存在した師の二人が死んでから數年の後にも、人々はヨハネの洗禮によつて洗禮を受けてゐた。若干の人は同時に兩派に屬してゐた。例へば聖パウロの拮抗者（紀元五十四年の頃）であつた名高いアポロ、及びエペソの基督教徒であつたかなりの人數があつた。ヨゼフスは、ヨハネと非常に類似のある、多分その派の人であつたバヌウといふ或禁欲者の派

にゐたことがある（紀元五十三年）。このバヌウは木の葉を著、沙漠の中に住つてゐた。彼は植物や野生の果物などばかりで身を養つて、日も夜も、屢身を清めるために冷水の洗禮を受けた。

「主の兄弟」と呼ばれたヤコブも、同じやうな禁欲主義を守つた。更に後れて、一世紀の終頃洗禮教は基督教と就中小亞細亞で葛藤を惹起してゐた。福音書の記者ヨハネのものとしてされる記録の作者が、的の外れた攻撃をそれに浴びせてゐるやうである。二世紀にシリヤ、パレスチナ、バビロニアに満ちてゐて、その名残が今日もマングダイトとが「聖ヨハネの基督教徒」とかいふ名の下に残つてゐる。ヘメロバプチスト、バプチスト、エルカザイト（アラビヤの作家のいふサビエンス、モグタジラ）などはといふと、それらはヨハネの正統の後人であるといふよりも、寧ろバプテスマのヨハネの運動と同じ起源を有つてゐたもののやうである。後者の眞の派は、半ば基督教に融合し、基督教の小異端の状態に移つて、それから不明になつて消失した。ヨハネは將來の豫感の如きものを有つてゐた。若し彼がつまらぬ競争心に負けたとしたら、彼は當時の諸宗派の中に埋れて今日忘れられてゐることであらう。自負心以上の人であつた爲めに、彼は、人類の宗教的パンテオンの中に唯一の位置を占め、光榮の地位に達したの

である。(2)

第十三章

最初のエルサレム攻撃

イエスは、殆ど毎年、逾越節の祭禮のためにエルサレムに赴いた。その一々の旅行の詳細な事は殆ど解らない。それといふのは、共観福音書がその事を語つてゐないのと、第四福音書がこの事については甚だ筋の通らぬことを記してゐるからである(1)。惟ふに、紀元三十一年に、さうして、慥にヨハネの死後に、首都に於けるイエスの最も重要な滞在があつたやうである。若干の弟子が彼に随つて行つた。その頃からイエスは巡禮することを價値の乏しいこととしてゐたけれども、彼がまだ縁を絶つてゐなかつた猶太の輿論を害さないために、それを行つてゐたのである。のみならず、その旅行は彼の計畫には大切なものであつた。それは、第一位の役目を演ずるためには、ガリラヤを出て猶太教をエルサレムの要地に於て攻撃する必要のあるこ

とを、既に彼は感じてゐたからである。

ガリラヤのこの小さな團體は、此處では甚だ他郷人の感じがした。當時のエルサレムは、略今日のその如く、街學、苛酷、論争、憎惡、狹量の都であつた。其處は極端な狂信の地であつて、毎日宗教上の騒動が生れてゐた。有力者はパリサイ人であつて、極めてつまらない些細なことに墮ちて疑義問答のやうになつてゐた律法研究が其唯一の學問であつた。この全く神學的宗規的の修養は精神を磨くことには毫も役に立たなかつた。それは幾分回教の行者の無味乾燥な教義のやうなもので、回教寺院の周圍に漂つてゐる時間費しの、良い精神的訓練を以てしてもそれを利用することのできない、全く何の役にも立たない辯證的空虚な學問のやうなものであつた。近代聖職者の神學的教育は極めて没趣味のものではあるが、それでも、これとは全然似もつかぬものである。それといふのは、文藝復興の運動が、最も頑固なものに至るまで、すべてのわれわれの教育の中に、一部の文學と立派な方法とを取り入れた爲めに、煩瑣哲學にも多少の情味を添へることになつたからである。猶太の博士やソフェル即ち學者等の學問は、全く野蠻不條理なもので、道德的要素の全く無いものであつた(2)。尙不幸な事には、我慢して

それを修得した者に滑稽な高慢を獲させたことである。多大の骨折を費させた、所謂その知識なるものに得意になつた猶太の學者は、今日回教の學者が歐州文明に對すると同様の、また舊派の加特力の神學者が俗人の知識に對すると同様の侮蔑を希臘文化に對して有つてゐた。そのスコラスチックな修養の特色は、すべて微妙なものに對して頭腦を鎖さし、自己の生涯を徒費し嚴肅を職業とする者の當然の仕事と看做す、難しい兒戯に對してのみ尊敬を拂ふことである。

この惡むべき人々が、北部のイズラエル人の優しい心と眞直な良心とを甚しく壓迫しないではゐなかつた。ガリラヤ人に對するエルサレム人の輕蔑は、尙一層彼等の離反を甚しくしたのである。彼等の憧憬の對象であつたその美しい殿堂の中で、彼等は屢侮辱に會ふばかりであつた。順禮の讚歌の一節、「われはむしろわが神の家の一戸に立たむ」は特に彼等のために作られた感があつた。人を馬鹿にしたやうな祭司等は、昔伊太利の聖職者が參拜者に慣れてしまつて、遠くから來た順禮の熱心を冷淡に殆ど嘲笑的に遇したと同じやうに、彼等の無邪氣な敬神の態度を笑つた。ガリラヤ人は随分變な訛のある言葉であつた。彼等の發音は不正確であつた。彼等は種々の有聲者を混同した。その爲に穿き違ひが起つて、人々は大にそれを笑つた。宗教に

關しては、彼等は無知で正統を離れた者とされた。「愚なガリラヤ人」といふ言葉は諺のやうになつてゐた。人々は彼等の猶太の血液を甚しい混血であると信じてゐた（理由の無いことでは無い）。さうして、ガリラヤは豫言者を生むことのできない土地と定められてゐた。かやうに、猶太教の隅の、殆ど外と言つていい地位に置かれてゐた、あはれなガリラヤ人は、彼等の希望を支へるために、かなり變な解釋を加へたイザヤ書の一節「ゼブロン地、ナフタリの地、海の道、異邦人のガリラヤ、暗に坐する民は大なる光を見、闇に座したる者に日はのぼれり」を僅に有つてゐるに過ぎなかつた。イエスの生れた町の評判は殊に悪かつたものと見える。「ナザレより何の善き者か出づべき」といふ言葉は、誰も知つてゐた諺であつたといふことである。

エルサレム近郊の自然の酷く荒れてゐたことは、イエスの不快に更に加ふところがあつたに相違無い。その谷間には水が無かつた。地は不毛で石だらけであつた。瞳を死海の低地に放つと、景色が幾分好かつたが、その他は單調であつた。僅にイズラエルの最も古い歴史の追憶があるので、ミズバの丘が眼を引き止めるだけである。イエス時代のこの都は略今日と同じ地相を呈してゐた。そこには舊い記念物は殆ど無かつた。それは、アスモニヤ朝に至るまで、猶太

人があらゆる藝術と概して没交渉であつたからである。ヨハネス・ヒルカヌスになつて、市街の裝飾に着手した。さうして、ヘロデ大王が立派な都市にしたのである。ヘロデの建築は、その偉大な趣と、技巧の完全と、材料の美麗なことからして、古代の最も完成したものと覇を争ふものであつた。獨創の趣味をもつた澤山の墓が、同じ頃エルサレムの郊外に建てられた。その記念物の様式は、希臘式であつて、猶太人の用途に適合させたものであり、その原則に従つて重要な變更を加へられた物であつた。ヘロデ家の進んで作らせた生氣のある彫刻の裝飾は、嚴肅主義者の大不平からして取除かれ、唐草模様の裝飾をもつて代へられた。フェニキヤ及びパレスチナの住民の、天然の巖の上に刻んだ一本石の記念建築の趣味が、岩石に切込んだ奇怪な墓碑——希臘式の手法が洞窟建築に非常に調和を缺いて應用されてゐる——に復活された觀があつた。藝術品をもつて、虚榮の華美な陳列を考へてゐたイエスは、すべてこれらの記念物を厭な眼つきをもつて眺めた。彼の絶對的精神主義と、舊い世界の姿が今や過ぎ去らうとしてゐるとする彼の確信とは、心の物に對してで無ければ彼に興味を與へなかつたのである。

イエス時代の殿堂は極新しいものであつた。それに外部の工事がまだ完全には終つてゐな

つた。他の建築との統一を保たすために、紀元前の二十年か二十一年に、ヘロデが改築を始めさせたのである。殿堂の内部は十八個月、廻廊は八年を費して完成した。けれども、附屬の部分は徐々に繼續されて、イエスのエルサレム占領に先だつ少し前に漸く工事を終つたばかりであつた。恐らくイエスは、密かに多少不快な心持をいだいて、その工事は行はれてゐるのを見たことであらう。それが永い將來の希望を繋いでゐたことは、彼の近く即位することに對する一種の侮辱であつた。無信仰の者や狂信者達よりも洞察の明のあつた彼は、その奇麗な建築も短日月にして終滅するのであるといふことを推定してゐた。

尙その殿堂は、美しいにも拘らず現在の回教寺院が想像させない程の(○)非常に堂々たる一體を成してゐた。中庭と周圍の廻廊とは、毎日夥しい群衆の集會所であつた。それ故その廣い場所は、殿堂、議場、法廷、大學を兼ねてゐた。猶太教のあらゆる宗教上の論争、儀式上の教育、訴訟及び民事の事件、一言でいへば、國民の全活動が其處に集注されてゐたのである。それは、不斷の議論の喧騒、詭辯と些細な問題とについての騒がしい論争場であつた。かやうに、その殿堂は回教の寺院と非常に類似してゐた。此時代、異宗教に對して尊敬の念をもつてゐた

羅馬人は、その宗教がそれ自身の範圍に止まつてゐる間は、聖堂の入口から中に足を踏入れなかつた。希臘語及び拉丁語の掲示があつて、猶太人以外の者の進入して差支無い限界を記してあつた。しかしながら、羅馬軍隊の司令部であつたアントニア塔が、殿堂の境内を全部見下し、其處で起つてゐる事柄の窺へるやうになつてゐた。殿堂内の警察は猶太人の手にあつた。殿堂の長がその管理を行ひ、出入口の開閉を命じ、包みを携へ、或は手に棒を持ち、塵埃に塗みられた穿物のまま、近道をするために堂内を通過せしめないやうにしてゐた。人が掟通りの不淨の姿で這入らぬやう、殊に細心の注意を拂つて看張つてゐた。婦人には、第一中庭の中央に木柵をもつて圍まれた特別の場所があつた。

イエスがエルサレムに滞在してゐる間、その日その日を過したのは此處である。お祭の頃は、この町に非常な人出があつた。十人二十人宛部屋部屋に集つてゐる順禮が、所嫌はず出入して、東洋趣味の混雜の裡に生活してゐた。イエスはその群衆の中に立ち混つた。彼を取巻いてゐたあはれなガリラヤ人の影は薄くおもはれた。多分彼は、輕蔑した待遇で無ければ與へない敵の世界にあるやうに感じたことであらう。彼の見るものは悉く彼を不快にした。一般に參

詣の多い靈場のやうに、この殿堂も有難味の乏しい光景を呈してゐた。儀式は、随分反感を催させる澤山の些末な事柄、殊に商賣的の手續を伴つてゐた。従つて、聖域の中に眞正の店舗が並んでゐた。其處には犠牲用の動物を賣つてゐた。兩替の爲めの臺もあつた。時には、市場にゐるやうな心持がしたことであらう。殿堂の下役人は、何時の時代の堂守も同じやうに、非宗教的な下劣な態度で、その務めを果してゐた。神聖な物を扱ふに、その俗な氣の無い様子が、イエスの宗教的感情を傷け、時には不安の心持にさせることがあつた。彼は祈禱の家を人々が盜賊の巢窟としてゐると言つた。ある日のこと、憤りのあまり、彼は鞭を以て破廉恥な商人を擲きつけ、その卓を顛覆させたと傳へられてゐる。概していへば、彼はこの殿堂を好んではゐなかつた。彼が『父』のために考へてゐた儀式は、少しも屠殺の光景と關係のあるものでは無かつた。これらの舊い猶太の制度は、一つとして彼の意に適ふもので無かつた。彼は餘儀無くそれと一致して行かねばならぬことを苦痛に感じてゐた。それ故、殿堂やその敷地は、基督教の中に於ても、猶太化した基督教徒に對してで無ければ敬虔の感情を起させなかつた。眞の新人はこの古い聖場を排斥した。コンスタンチヌス並びに初代基督教の皇帝は、ハドリアヌスの建

てた異教の建築物を其處に残存させて置いた。ユリアヌスのやうな、基督教の敵が却て此處を念頭に置いてゐた。オマルがエルサレムに入つた時、猶太人を憎んで故らにこの殿堂の敷地を潰したくらゐであつた。猶太教が甚だセミチツクのものであつたといふ點からして、猶太教の一種の復活と見るべき回教の方が、却てこの聖場に敬意を拂つたのである。この場所は常に反基督教的の場所であつた。

猶太人の傲慢は、全くイエスに不満を抱かせることになり、エルサレムの滞在を彼にとつて苦痛なものとした。イズラエルの大思想が熟するにつれて、祭司等の地位は低下してゐた。猶太教會の組織が、律法の解釋者、即ち博士達に祭職以上の高い地位を與へたのである。祭職者はエルサレムにゐるだけであり、其處に於ても、全く儀式の執務をするばかりであつて、略佛蘭西の説教を許されない教區の祭職者のやうであつた。教會の辯士、教學者、ソフェル即ち學者——尤も後者は全く俗人であつたが——の方が、彼等よりも優勝の地位を占めることになつた。タルムツドの中の知名の人々は、祭職者では無く、當時の思想によれば、それは學者達であつた。もつとも、エルサレムの高級祭職者は、民族中の極めて高い地位を占めてゐた。しか

しながら、毫も宗教運動の先頭に立つてゐたのでは無い。ヘロデによつて既に低い地位に下されてゐた最高の祭司は、漸次に羅馬の一官吏に化した。さうして、多くの人に有利なその職務を興へる目的から、頻繁にその更迭が行はれた。俗人でありながら極めて熱心な宗派を成してゐたパリサイ人に對立して、祭職者は殆ど全部サドカイ人であつた。それは殿堂の周圍に集り、祭壇によつて衣食し、しかも、そのことの空虚を認めてゐる信仰の無い貴族階級の人達であつた。かやうに民族的感情と離れ、民衆を率ゐてゐた宗教上の大潮流から離れ、最初は單にサドクの祭職家の人々を意味してゐたサドカイ人といふ名が、物質主義者或は享樂主義者の類語となつたのである。

更に一層悪い要素がヘロデ大王時代から高級祭職者を墮落させるやうになつた。ヘロデは、アレキサンドリヤのポエツスの子シモンといふ者の娘、マリアンヌと戀に陥ち、これと結婚しようとおもつた(紀元前二十八頃)のであるが、その義父を貴族にして彼と同等にするには、彼を祭司長とするより他に方法が無かつたのである。この計略からして出来た家柄が、三十五年の間、殆ど間斷無く最高祭司の主人となつた。主權者の家柄と近親であつたこの家は、アル

ケラウスの廢立の後に始めてその位を失つたが、ヘロデアグリツバがヘロデ大王の事業を暫時回復した後に、再び(紀元四十二年)その地位を回收した。ポエツシムの名の下に(中)かやうに極めて俗的な、極めて信仰の乏しい、新しい聖職貴族が出来、それが殆どサドカイ人と混合した。ポエツシム家は、タルムツド及びラビの記録中に、無信仰の者で常にサドカイ人と接近してゐるものとして記されてゐる。かういふことからして、殿堂の周圍に、過度の熱心に趨らず、寧ろそれを怖れて、政策によつて生活し、既成の慣習に利益を受けてゐるために、聖者のことも革新者のことも耳にすることを欲しない、一種の羅馬の宮廷の如きものが生れたのである。享樂主義者のその祭職者等には、パリサイ人のやうな亂暴なところは無かつた。彼等は唯苟安を欲したのである。その道德的無反省とその冷淡な非宗教とが、イエスをして憤慨させる種であつた。祭職者とパリサイ人とは非常に異なるところがありながら、さういふ理由からイエスの反感中に入つたのである。けれども、異郷人であり、且信用の無かつた彼は、久しくその不満を胸中に藏めて、僅にその感情を同行の彼の親近者だけに傳へたのであつた。彼がエルサレムに滞在した、最も長期の、さうして彼の死によつて終局を告げた最後の滞在

以前にも、イエスは公衆に自己の所信を聴かせようと試みた。彼は説教をした。人々は彼の噂をした。世間から奇蹟とおもはれた若干の行爲についても、人々は語り合つた。しかしながら、エルサレムに基礎を置く一教會も、エルサレム人の弟子の群も、それが爲めに出来たのではなかつた。彼を愛しさへすれば、誰をも赦すといふ愛嬌に富んだこの博士は、無用の論争と舊くなつた犠牲とのこの聖堂の中で、多くの反響を得ることができなかつた。僅にそれからして若干の良い交際を得、後になつてその結果を彼は收めることができた。最後の數個月の試練の間に、多大の慰安を齎してくれたベタニヤの家族を、その頃から彼が識つてゐたとは想はれない。けれども、恐らくマルコの母のあのマリア及びマルコとは交渉があつたやうである。その人の家は數年の後に、使徒の集合所となつた。また、猶太教議會議員の一人で、エルサレムに於て非常に名望のあつた、ニコデモといふ富裕なパリサイ人の注意をも早くから惹いた。眞面目な信仰のあつたらしいこの人は、若きガリラヤ人に心を惹かれたのである。危難の身に及ぶのを怖れた彼は、夜中に彼に會ひに来て長く談話をしたと傳へられてゐる。無論彼は好い印象を得たのである。何故かといふと、後になつて、彼は同僚の偏見に對してイエスを辯護し、またイ

エスの死の時、主の死骸を鄭重に扱つてゐるのを見るからである。ニコデモは基督教徒にはならなかつた。まだ知名の加擔者の無い革命運動に入ることは、彼の地位からして當を得ぬものと彼は信じたのである。けれども、イエスに對しては多大の力を示し、今われらの述べてゐる時期には、既にその決定が記されたものとなつてゐたので、その死から救ふことは無かつたが、彼の爲めに種々世話をしたのである。

イエスは當時の名高い博士達と關係を結んでゐなかつたやうである。ヒレルとシャンマイとは既に故人であつた。當時の最大權威はヒレルの孫ガリエルであつた。自由主義者であり、社交的であつて、宗教以外の研究に志し、上流社會との交際から寛容に傾いてゐた人である。面を覆うて、或は瞑目して歩行してゐた、極めて嚴格なパリサイ人とは對照をして、彼は婦人をも、また異教の婦人をも眺めた。宮廷に出入し、希臘語を知つてゐた彼には、それも赦されることになつてゐた。イエスの死後、彼はこの新しい宗派について甚だ穩健な見解を發表したと傳へられてゐる。聖パウロはこの派から出た。けれども、イエスは一度もこの派に入つたことは無かつたやうである。

しかしながら、イエスがエルサレムから持つて歸つた思想で、この時から彼の胸に根を張つたものは、昔の猶太信仰との一致は、到底、思ふべきもので無いといふことであつた。彼に多大の嫌惡を起させた犠牲を廢止すること、傲慢無信仰の祭職者を廢止すること、廣い意味では、律法其物を破棄することが絶對的必要のことと彼には映じたのである。此時から、最早猶太の改革者としてでは無く、彼は猶太教の破壊者として立つたのである。メシヤ思想を抱いてゐる或者は、メシヤはあらゆる地に共通の新法を齎し來るものであるといふことを既に認めてゐた。殆ど猶太人で無かつたエツセネ派の人も、殿堂やモオゼの掟に冷淡であつたやうである。けれども、それは孤立した大膽の者か、或は口外せぬ人達かであつた。イエスは、第一に、彼以後、寧ろヨハネ以後律法は既に存在せぬものであると敢て公言した。時に、彼がもつと穩かな言葉を用ひることがあつたとしても、それはあまり酷く先入の偏見を害すまいとの配慮からであつた。彼を極端に押詰めると、彼はあらゆる假面を棄てて、律法は最早無力のものであると宣言した。彼はこのことに就いて、力のこもつた比喻を用ひた。「誰も新しき布の裂を舊き衣につぐことは爲じ、また新しき酒をふるき革囊に入ることは爲じ」と言つた。それこそ實行に

於ける師として、また創始者としての彼の行爲である。殿堂には輕蔑したやうな揭示があつて、その地域から猶太人以外の者を排斥した。イエスはそれを欲しない。窮屈な、酷しい、無慈悲な律法は、アブラハムの子孫に對してのみ作られたものである。イエスは心がけのよきすべての人、彼を迎へ、彼を愛するすべての人、さういふ人々は悉くアブラハムの子であると主張する。血統自慢こそ、彼は退治すべき第一の敵であると信じたのである。別の言葉でいへば、イエスは最早猶太人では無かつた。彼は最高級の革命家であつた。何人も神の子であるといふ唯一の條件の上に築いた信仰に、彼はすべての人と呼ば集めたのである。彼は人の權利を宣言し、猶太人の權利を宣言するのでは無い。人間の宗教で、猶太人の宗教では無い。人間の救済で、猶太人の救済では無い。律法を楯にして革命を説いたゴオロニチのユダやマチアス・マルガロトの類とは、彼は何といふ距離であらう。血の上に建てられたので無く、心の上に建てられた人類の宗教が、今や建設されたのである。モオゼは過去のものとなつた。殿堂は最早存在の理由を失ひ、取消されること無く罪せられたのである。

第十四章

一八六

イエスと異教徒及びサマリヤ人との關係

これらの原則と照應して、彼は心の宗教で無いものを悉く侮蔑した。信者のくだらない勤行、救済を願つて見せかけで安心してゐる形式的の嚴肅主義を、彼は一生の敵とした。彼は斷食を殆ど念頭にかけなかつた。彼は犠牲よりも惡罵を忘れることを重要視した。神を愛すること、慈悲、互に赦すこと、それがすべての彼の掟である。これ以上祭職者と趣を異にするものは全くあるまい。祭職に在る者は、その當事者たるところから、職務上常に公けの犠牲を強ひた。また自己を俟つまでも無い方法となる私的の祈禱を排斥した。福音書の中に、イエスの推奨する宗教的儀式は探しても見當らないであらう。洗禮も彼にとつては第二義の意義しか無い。祈禱のことは、心から成すべきものとする以外に、別の規定を示してゐない。何時の時にも常にさ

るやうに、多くの者は、弱者の善心によつて善に對する眞實の愛の代りができるものと信じ、またラビよラビよといへば、天國に行けるものと想つてゐた。彼はさういふ人々を斥けて、彼の宗教は、取りも直さず善をなすことであると宣言した。屢、「この人々は唇もてわれを敬へどもその心はわれを遠ざかれり」といふイザヤの一節を彼は引用してゐる。

安息日は、パリサイ風の懸念と穿鑿との建物を載せてゐる主要點であつた。この古い優れた制度は、教義學者のつまらぬ議論の口實と、幾多の迷信の泉となつてゐた。人々は天地自然もこれを遵守してゐるものと信じてゐた。すべて間歇泉には、安息日が有るものと信ぜられてゐた。これも亦イエスが最も好んで敵を攻撃する點であつた。彼は公然安息日を破つて、他人の浴びせる批難に對しては、巧妙な嘲笑をもつて答へるのみであつた。況んや歴史が律法に附加した、それだけで信者に最も親みのあつた、多くの新しい遵奉個條に至つては尙更輕蔑した。洗淨、淨不淨の微を穿ちすぎた差別に對しても、彼は容赦をしなかつた。「汝等は汝等の靈を洗ひ得るや。人は食するものによつて汚るるにあらず、心より出づるものによつて汚るなり。」この虚禮の宣傳者たるパリサイ人はすべて彼の攻撃の標的であつた。彼は、人に罪の機會を作るために、

一八七

不可能の教訓を發明し、それを律法に附加することを彼等に責めた。「盲人を手引する盲人よ、穴に落ちざる様氣をつくべし」と彼は言つた。また密かに附け足して、「あゝ蝮の裔よ、彼等は善を口にするのみにて、内心彼等は悪しき者なり。彼等は、「口は心に満ち足れるもののみを出すなり」との諺を偽れり。」と語つてゐる。(一)

異邦人を改宗させ、幾分確固たるものを附加し與へるには、彼は彼等に對する理解が十分で無かつた。ガラリヤには夥しい異教徒があつた。しかしながら、公けに組織せられた似而非なる神々の祭祀は無かつたやうである。イエスはその祭祀がツロ、シドンの地方、ピリピのカイザリヤ、デカポリスに於て盛に行はれてゐるのを見ることがあつた。けれども、彼はそれに殆ど注意を拂はなかつた。彼には、當時の猶太人の飽々する術學や、アレキサンドル以後彼の同信者に屢認められる偶像崇拜批難の、例へば「箴言」中にあるやうな誇張の言葉を認められない。異教徒中で、彼の注意を惹いたものは、異教徒の偶像崇拜では無く、彼等の屈從的精神であつた。この若き猶太の民主主義者は、この點に於てはゴオロニチの兄弟であつて、神以外に主を認めなかつた。従つて、彼は主權者の人物や、これに呈する往々虚偽の稱號に對する尊敬を見

て甚だ不快に感じた。「その他には、異教徒と遭遇する多くの場合、彼は大に寛容の態度を彼等に示し、時には猶太人よりも彼等に多くの希望を繋ぐ風を裝つた。神の王國は彼等に傳へられるであらう。『葡萄酒の主人、その畑を借りたる者をよしとおもはぬ時、彼は何をか爲さん。彼は善き果を持ち來る者にそれを貸し與ふべし。』イエスはこの思想を重要視する必要があつた。何となれば、猶太思想によると、異邦人の歸依は、メシヤ降臨の最も確實な證據の一つであつたからである。彼の神の王國には、王國の正統の相續者は斥けられるに反して、天の四方から來る人々をアブラハム、イザク、ヤコブと同列に饗宴の席に座せしめるのである。往々、彼がその弟子に對して、全然反對の方向を示したことも事實である。救濟を唯正系の猶太人のみ説くべしと獎めたらしいところもあり、また猶太人の偏見に符合するやうな言ひかたを異教徒についてしてゐることもある。しかしながら、弟子達の狭い頭では、アブラハムの子といふ資格に對する意味の深い冷淡を解しかねて、師の教訓を自分達の考へ通りに撓めたといふことも、随分あり得ないことでは無いといふことを想はなければならぬ。此外、恰もマホメットがコオラシの中に猶太人を論じて、或は非常に敬意を拂つてゐたり、或は極端な酷評をしたりして、彼

等を味方にしたい希望のあると否とに従ひ言葉を異にしてゐると同様に、イエスも此點に就いて、異つた言葉を示したといふことは極めてありさうなものである。實際、傳統は正反對の、しかも交互にそれを實行したものとおもはれる改宗勸誘の二つの法則をイエスに與へてゐる。即ち、「汝に逆はざる者は汝の味方なり」と「われと俱ならざる者はわれの敵なり」とである。熱情的の奮闘は殆ど必然的に此種の矛盾を伴ふものである。

唯確實なることは、彼の弟子の中に、猶太人がヘレエヌと呼んでゐた多くの者のゐたことである。(c)此言葉は、パレスチナでは、極めて多様の意味を有つてゐた。ある時は異教徒を意味し、ある時は異教徒の間に住んで希臘語を話す猶太人を指し、ある時は猶太教に改宗した異教徒の人々を指してゐた。イエスが同情したのは、恐らくこの最後の部類にあつた者である。猶太教に加入するには種々の階段があつた。しかしながら、改宗者は常に生來の猶太人に比すると低い位置にあつた。茲で問題となつたのは、「入口の改宗者」とか「神を怖るる人々」と呼ばれ、モオゼの教訓に服した者で無く、ノアの教訓に服する者のことであつた。この位置の低いといふことそれ自身が、疑も無く彼等をイエスに接近させ、彼等に彼の寵のあつた所以であつた。

彼はサマリヤ人にも同様の態度をとつた。猶太教の二大州、ユダヤとガリラヤとの間に、小島のやうに挿まれてゐたサマリヤは、パレスチナに於て一種の飛地になつて居り、其處にはエルサレムのそれと兄弟のやうに競争してゐたガリジムといふ昔からの祭祀が保存されてゐた。所謂猶太教の、天才も賢明な組織も無かつたこのあはれな宗派は、エルサレム人から残酷極まる待遇を受けてゐた。人々はこの宗派を異教と同列に置いて、しかも更に一層の憎惡を加へてゐた。イエスは一種の反抗心から此宗派に好感を寄せてゐた。往々、彼は正系の猶太人よりもサマリヤ人の方を推賞した。また別のところで、彼の福音は純イスラエル人に限られ、サマリヤ人のために説教を行ふ勿れと弟子に禁じてゐるやうであるが、其場合にも、使徒等が臨機應變であつたその教訓に極端過ぎる意味を附加したのであらう。事實、時にサマリヤ人は、イエスをその同胞の偏見に染んでゐるものと想像して、彼を虐待したことがある。恰も今日自由思想家の歐洲人が、頭から歐洲人を狂熱的基督教徒と常に信じてゐる回教徒によつて、敵の如くに視られるのと同じやうなものであつた。イエスはこれらの誤解以上に身を置くことを知つてゐた。彼はシケムに若干の弟子があつたと見えて、其處で少くも二日を過してゐる。或場合に

は、サマリヤ人の所でのみ、彼は感謝と眞の敬虔とに遭遇したことがある。彼の最も美しい譬喩の一つは、エリコの途上の傷ついた人に關する譬喩である。一人の祭司が通りかかつて、その男を見ながら、其儘道を續けて行つた。またレビ族の一人が通つたが、これも足を停めなかつた。一人のサマリヤ人が、彼を憐んでその傍に寄り、その傷に油を塗り、それを繻帯してやつた。眞の博愛は、宗派の信仰によつては無く、慈悲によつて人間の間に出来るものであるといふことを、イエスはこれから結論したのである。猶太教では、殊に同信者の義であつた「隣人」といふ言葉が、彼にあつては宗派の別無く同胞を憐む人のことであつた。最も廣い意味の人間の博愛が、あらゆる彼の教訓から溢れ出てゐる。

エルサレムを立ち出た時、イエスを包んでゐたこれらの思想は、彼の歸路に遺された逸話の中に生々とした表現となつて現れた。エルサレムからガリラヤへの道はシケムから半時間の距離のところ、エバルとガリジムの山々に見下されてゐる谷間の入口の前を通つてゐる。この道は一般に猶太の順禮が避ける道であつた。人々はサマリヤ人の侮辱に會つたり、彼等に物を乞うたりする破目に陥るよりも、すつと迂回してペレアを通つて旅をする方を好んでゐた。彼

等と飲食を俱にすることは禁じられてゐた。「サマリヤ人の麵包の一片は豚の肉である」といふのが、ある教學者の格言であつた。だから、此道を通る時、人々は豫め食料を用意した。尙爭論と虐待とを免かれ得ることは稀ならぬであつた。イエスにはそんな懸念も恐怖も無かつた。その道を通つて、左手にシケムの谷の始まる所に着いたイエスは、疲れて、とある井戸の傍に立ち止まつた。サマリヤ人は、當時も今日の如く、谷の何處にも長老を追憶する意味の名をつける慣習であつた。彼等はその井戸を「ヤコブの井戸」と名づけてゐた。それは、多分今日ピルイヤクブと稱せられてゐるものことであらう。弟子達は谷に下りて、町に食物を買ひに行つた。イエスは、ガリジムの山を正面に仰いで、井戸の邊に座つてゐた。

それはかれこれ正午であつた。シケムの一人の婦人が水を汲みに來た。イエスは女に水を請うた。猶太人は普通サマリヤ人と全然交際をしないのであるから、そのことは甚く女を驚かした。イエスの話に魅せられて、女は彼を豫言者と見て取つた。さうして、自分の宗教に對して批難のあることを豫期したので、女は先を越して、「主よ、われらの父祖は山の上にて禮拜したり、然るは汝等は皆エルサレムに於てこそ禮拜すべきなれといへり。」と言つた。イエスはそれ

一九四
に答へて、「婦よ、われを信ぜよ、この山にもエルサレムにもあらで、されど眞の禮拜者の靈と眞とをもて父を拜すべき時來れり。」(3)と言つた。

彼がこの言葉をいつたその日、彼はまことに神の子であつた。彼は永遠の宗教の建物の礎たるべき言葉を始めて口にしたのである。清淨であつて時を超越して居り、祖國の無い貴い心の人々が時の盡きる迄實行する信仰を彼は築いたのである。その日の彼の宗教は、人類の爲めに善き宗教であつたばかりで無く、それは絶対の宗教であつた。若し他の遊星に、理性と道徳とを具へた人民があるとしても、その宗教は、ヤコブの井戸の傍でイエスの宣べたものと異つたものではあり得ない。彼すらそれを何時までも把持してゐることはできなかつた。それといふのは、人は理想に一瞬の間しか達しられないものであるからである。イエスのこの言葉は、闇夜の電光であつた。人類の——否、人類の非常な一小部分の——眼がそれに慣れるまでには千八百年を必要としたのである。しかしながら、その電光が眞晝の光となるであらう。さうして、あらゆる誤謬の輪をめぐつた後に、自己の信念と希望との不滅の表現として、人類は再びこの言葉に歸り來るであらう。

第十五章

耶穌傳説の起源 彼の超自然的任務に對する觀念

イエスは、全く猶太教の信仰を失ひ、革命の焰に燃えてガリラヤに歸つて來た。彼の思想は今全く明瞭に現れるやうになつた。彼の最初の豫言者時代の、一部は前時代のラビから藉りた無邪氣な訓言や、第二期の立派な道徳的説教は、結局斷乎たる一個の政策となつた。律法は廢せられるであらう。彼こそそれを廢するのである。メシヤは降臨した。彼こそそのメシヤである。神の王國は將さに啓示されやうとしてゐる。彼によつて始めてそれが啓示されるのである。彼はその大膽の犠牲となることを十分知つてゐる。しかしながら、神の王國は無理をしないで獲られるものではない。不安と苦惱とによつて始めて打ち立てらるべきものである。人の子はその死の後、天使の群を率ゐ、榮光につつまれて來るのである。彼を斥けた者どもは狼狽する

ことになるであらう。

この考の大膽さはわれらを驚かす程のものでは無い。イエスは夙くから、己を神に對して父子の立場にあるものと見てゐた。他人にあつては、耐へられないその憧憬も、彼にあつては僭越と目すべきものでは無かつた。

「ダビデの子」といふ稱號は彼の受けた最初のものであつた。人々が彼に當然の權利あるものとしようとした可憐の欺瞞に、彼は恐らく關係が無かつたのである。ダビデ家は夙くに消滅してゐたもののやうである(1)。祭職の家柄であつたアスモニア家も、ヘロデも、羅馬人も、彼等の周圍に昔の王家の權利を代表する家があるなどは、一時も考へたことは無かつたのである。しかしながら、アスモニア朝の末から、昔の王の名も無き子孫が、その敵に對して國民の復讐をするだらうといふ空想が、あらゆる人々の頭に働いてゐた。一般の信仰では、メシヤはダビデの子孫であつて、彼と同様ベツレヘムに生れるといふのであつた。イエスの最初の感情は同様にそれでは無かつた。彼の天國は、猶太人の大部が念つてゐたダビデの追憶とは全く無關係であつた。彼の王國と、彼の想つてゐた救済とは全く別のものであつた。けれども、茲で與

論は彼に對し一種の不合理を敢てした。「イエスはメシヤである」といふ命題の直接の結果が、「イエスはダビデの子である」といふ別の命題となつてゐた。彼は、それが無くては何等の成功をも希望することのできなかつた稱號を、自己に與へられることを辭しなかつた。終には、それを愉快におもふやうになつたものやうであつた。といふのは、彼をさう呼んで奇蹟を所望すると、彼は非常な上機嫌でそれに應じてゐるからである。茲にも彼一生の多くの他の場合に於けると同様に、明かに自己の思想と異つてゐても、彼は當時の思潮と妥協することを敢てしてゐる。彼は、自己の「神の王國」の教義に、人々の感情及び想像を咬るものをすべて結びつけたのである。さういふ理由からして、彼には大して必要でも無かつたヨハネの洗禮をも、敢て採用したのである。

さて一つの重大な故障が生じてゐた。それは一般に評判になつてゐた彼のナザレに生れたことであつた。イエスがこの故障に對して奮闘したか否かは解らぬ。ダビデの子はベツレヘム生れの者で無ければならぬといふ思想は、さう普及してゐなかつたから、その故障が多分ガラヤでは起らなかつた。しかしながら、理想主義のこのガラヤ人たる彼には、その名を授け

られた者が、その民族の名譽を擧げ、イスラエルの榮華の日を齎しさへすれば、『ダビデの子』といふ肩書も十分是認せられるべきものであつた。彼の味方の者が、王家の後裔だといふ證明の爲めに案出した架空の系圖を、彼が沈黙によつて認容したか。彼をベツレヘム生れにする爲めに發明される或傳説、殊にクイリニウスといふ羅馬帝國の總督の命によつて行はれた戸口調査に、彼のベツレヘム出であることを附會した計略を彼は知つてゐたか。それは全く解らぬことである。系圖の不精確と矛盾とは、それが種々の點からして民間の細工の結果であり、何れもイエスによつて公正のものとされたもので無いといふことを信じさせるやうである。一度も彼自身の口から、ダビデの子と自稱した言葉は出てゐない。無論、彼よりも頭腦の低級な弟子達が、時には彼が自己について言つたことを更に附加誇張した。彼は大概その誇張すら知らなかつた。尙始めの三世記の間、基督教の夥しい分派が、イエスの王系であること並びに系圖の公正なことを強く否認してゐる。

彼の聖傳は、かやうに極めて自然に發した大陰謀の結果であつて、生前彼の周圍で造られつつあつたのである。史上の大事件は何れも一群の説話を生ぜずには過ぎぬものである。イエス

が、若し欲したにしても、俗間の説話創造を防止することはできなかつたであらう。古代に於て普及してゐた説で、異常の者は兩性の尋常な關係から生れ得るもので無いといふ思想から、或は、メシヤは處女から生れるものと判讀した、イザヤ書の一章を誤讀したことに照應させる爲めに、或は神の本質からして「神の呼吸」が妊娠の一原理であるといふ思想によつて、彼を必ず超自然の出生のものとする物語の萌芽を、恐らく明敏な彼の眼はその頃から觀破してゐたであらう。メシヤ理想の成就、或はもつと適切にいへば、當時の譬喩的解釋がメシヤのものとしてゐた豫言の成就を彼の傳記中に示す目的で、恐らく既に幾多の逸話をイエスの少年時代に關聯して流布させてゐたであらう。一般に認められてゐた一思想は、メシヤは星によつて告げられ、遠き國々の使者がその誕生とともに敬意を表しに來て捧物を呈するといふのであつた。所謂カルデヤの星學者で當時エルサレムに來た者によつて、神託が成されたと言ふことは想像した。また人々は、搖籠時代からイエスには、バプテスマのヨハネ、ヘロデ大王、高聖の記憶を遺したシメオン、アンヌの二老人などの、知名の人々と交際があつたといふことにした。大部分は假想事實を基礎として、隨分疎漏な年代でこの組合せを取纏めてある。しかしながら、

不思議に溫和慈愛の精神や、何處までも民衆的な感情が、どの寓話にも浸潤してゐて、それが説教の補ひとなつてゐる。就中イエスの死後になつて、これらの物語が著しく發達した。けれども、それが既に彼の生前から、偏に篤い信心と清い讚嘆とを受けて、言ひ傳へられてゐたものと信ずることが出来る。

決して、イエスが自己を神其物の化身と信ぜしめようとしたものでないといふことは、誰も疑ふことのできないことである。かういふ思想は、猶太精神と全く縁の無いものであつた。共觀福音書の中には、その痕跡が少しも無い。イエスの思想の反映としては、最も承認しがたい第四福音書の或部分に、僅にそれが指示されてゐるばかりである。ややもすると、イエスはさういふ教義を排斥する注意をさへしてゐるやうに見える。自己を神としたり、神と同等のものとするといふ批難は、第四福音書の中にも、猶太人の中傷としてある。この第四福音書の中で、イエスは自己を「父」より劣つた者と宣言してゐる。他の個所で、「父」は彼にすべてを啓示してくれなかつたと告白してゐる。彼は自己を常人以上ではあるが、神とは非常な距離のある者と信じてゐる。彼は神の子である。けれども、何人も種々程度の差はあつても、神であり、神

となり得るものである。何人も毎日神を父と呼ばなければならぬ。すべて魅つた者は神の子となるのである。舊約書の中には、神の系統は全く神と同等などと主張しない者に歸するとしてある。「子」といふ言葉は、セミチックの言葉に於ても新約書の、言葉に於ても、⁽³⁾最も廣い譬喩的の意味を有つてゐる。尙イエスが「人」に對して有つてゐた觀念は、冷かな天啓否定論か輸入した低い觀念では無かつた。彼の自然に對する詩的の考へかたでは、唯一回の呼吸も、宇宙を貫くものである。人の呼吸は神の呼吸である。人が神の中に住み、神によつて生ける如く、神は人の中に住み、人によつて生きるものである。イエスの超理想主義は、彼自身の人格について明白な概念を有つことを決して彼に許してゐない。彼は、彼の父であり、彼の父は彼である。彼は、その弟子の裡に生き、彼は何處に於ても彼等と一緒にである。彼及び彼の父が一である如く、彼の弟子達も一である。彼にとつては、思想が全部である。人人を區別する肉體は何物でも無い。(4)

「神の子」といふ肩書、或は單に「子」といふ肩書は、イエスにとつては、かやうに「人」の子と同じ肩書となつた。さうして、後者の如くメシヤの類語となつた。唯その差は、彼が己を

「人の子」と呼んで、「神の子」といふ言葉を同じやうに使用しなかつたらしいことである。人の子といふ肩書は、審判者としての彼の身分を現し、神の子といふ方は、彼が最高計畫に參與すること、彼の権力を言ひ現したのである。その権力には制限が無い。彼の父が、すべての権力を彼に與へたのである。彼は安息日をも變更する権利を有つてゐる。何人も彼によらなければ神を知ることができない。父は彼に審判の権利を譲つたのである。自然は彼に服従する。しかしながら、また信じ祈禱する者にも服従する。信仰は全能である。自然法の觀念は、一つも彼及び彼の聴衆の頭の中に入つて、不可能の限界を記さうとしたことの無かつたことを記憶すべきである。彼の奇蹟を見た者は、「人にかくの如き力を與へ給ひしこと」について神に感謝する。彼は罪を赦す。彼は、ダビデよりも、アブラハムよりも、ソロモンよりも、豫言者達よりも以上である。われらは如何なる形式から、また如何なる程度に於て、これらの斷言が生じたかを知らない。イエスは、われらの小さな慣用法によつて、判斷さるべきものではない。彼の弟子達の讚美は、彼を包み彼を運び去つた。最初彼の満足してゐたラビといふ呼びかたが、最早彼に不十分であつたことは明かである。豫言者とか、神より遣はされたる者といふ呼びかた

も、最早彼の思想に相應しいもので無かつた。彼が自己に與へてゐた位置は、超人のそれであつて、他人以上の高い關係を神に對して有つてゐるものと人々に看られる事を彼は欲してゐた。しかしながら、われらの詰らぬ神學から借用した「超人」とか「超自然」といふ言葉は、イエスの高い宗教心には意味の無い言葉であつた。彼から見れば、自然も、人類の發達も、神以外の限られた世界のものでは無く、嚴密な絶望の法則に服した貧弱な現實のものでも無かつた。彼にとつては、自然は存在せぬのであるから、超自然といふことも無かつた。無限の愛に酔うた彼は、精神を囚にしてゐる重い鎖を忘れたのである。凡庸な人間の能力が神人の間に穿つてゐる、さうして大多數の者の越え得ない淵を、彼は一跳びに飛び越えたのである。

イエスのこれらの斷定の中に、後年、イエスを神の本質を有せるものとし、彼をロゴスと同視し、或は第二の神、或は神の長子、或は猶太の神學が別の方向から造つてゐた天使メタトロノス(5)と同一視するやうな教義の萌芽のあることを何人も否認することはできないであらう。神の傍に一人の助手——永遠の神がこれに宇宙の政治を委ねるものと看做されてゐる——を置きて、古く一神教の過度の嚴肅を匡正するために、一種の要求からこの神學が齎らされたので

あつた。或種の人々には、神聖なはたらき或ばちからの化身であるといふ信仰が擴まりかけてゐた。サマリヤ人は、その頃、「神の大能」と同じものと目された一人の神通力者を有つてゐた。約二世紀前から猶太教の思索家は、神的屬性、若しくは要するに神性の意味となる表現をもつて、傑れた人を作る傾向に捲込まれてゐた。だからして、毎度舊約書で問題になる「神の呼吸」は、特殊の存在「聖靈」の如きものと看做されるのである。同様に、「神の知慧」「神の言葉」はそれ自身が實在人物となる。これが、カバラ教のセフィロト、ノスチツク教のエオン、基督教の本質論、すべてこれらの人格抽象——一神教が神に複雑の性質を加へようと欲する時餘儀無く依頼しなければならぬ方法——によつて成立つ乾燥無味な神を胚胎する方法の萌芽であつた。

イエスは、間も無く無意味な論争で世を騒がすことになる神學上の穿鑿とは、没交渉であつたやうである。當時の人フィロンの著述の中に、またカルデヤのタルグムの中に、乃至既に「箴言」中にあるやうな、ロゴスの哲學的理論は、マタイのロギヤの中にも、一般に共觀福音書即ちイエスの言葉の公正な解釋中にも見當らない。實際、ロゴスの教義は、救世主説と何等交渉のあるものでは無かつた。フィロンやタルグムのロゴスは少しもメシヤでは無い。人がイエスと

ロゴスとを同一視するやうになつたのは、後年のことであり、また此原理から出發して神の玉國について非常に異つた全然新しい神學を作つたのも後のことである。ロゴスの本務は、創造と攝理との職務である。しかるに、イエスは、一度も世界を創造したとも、それを支配するとも主張したことは無い。その任務は世界を審判し、それを革新することである。人類最後の法廷に於ての裁判長の資格、それがイエスの己のものとする役目であり、あらゆる初期基督教徒が彼に附與した職務である。大なる日の來るまで、彼は神の右に、メタトロノスとして、宰相として、また將來の復讐者として座するのである。ピザンチン教會の奥殿にある超人基督は、唯奉仕陪席の天使よりも上で、彼と類似の使徒の中央にあつて、世界審判の座に着いて居り、疾くにダニエル書の中に最初の姿を十分指示してある「人の子」の、その概念を極めて精確に描寫してある。

要するに、熟慮を加へた煩瑣哲學の嚴密は、毫もかういふ世界のものでは無かつた。前述の思想全體は、弟子達の頭の中にあつて甚だ明確を缺いた神學體系となつてゐて、神の分身ともいふべき神の子を、彼等は單に人として行動させてゐる位である。彼は誘惑され、彼は多くの

事柄を知らず、彼は反省し、彼は變説をし、彼は落膽沮喪し、彼は父に試みを加へられざらむことを請うた。彼は子として父に服従した。世界を審判すべき彼は、審判の日を知らない。彼は自己の安全を謀つて注意をした。生れてから幾程も経たぬ中に、彼を殺さうとした権力者から免かれしめるために、彼をして姿をかくさせる必要があつた。悪魔抜ひをする時、悪魔は彼をからかつて立ちには去らなかつた。彼の奇蹟の時、人々は何物か彼より出たかの如くに、苦痛の努力と疲労とを感じた。すべてこれは、單に神より遣はされたる者、神の保護寵愛する者の事實である。茲では、論理も結論をも要求すべきものではない。イエスが信用を得ようとする要求と、弟子の熱心とが矛盾の觀念を多くした。千年期説の救世主を信する者、或はダニエル書エノク書の熱心な讀者達には、彼は人の子であつた。普通の信仰を有つてゐる猶太人や、イザヤ、ミカの讀者達にとつては、彼は神の子若しくは單に子であつた。更に他の者は、メシヤ降臨の準備の爲めに古き豫言者が甦るといふ俗間の信仰と一致して、彼をエレミヤと見、エリヤと見、蘇つたヨハネと見てゐた。

絶對的確信、若しくは適切にいへば、一疑の可能までも彼に無からしめた熱心が、すべてこれらの大膽を蔽うてゐた。われらは、冷かな氣の小さい性質であるから、自己を使徒とするやうな觀念の囚となる事情を殆ど了解しない。非常に眞面目なわれらにとつては、確信といふことは、自己に對して誠實であるといふことを意味する。しかしながら、自己に對して誠實といふことは、細緻な批評的精神に慣れてゐない東方諸民族の間にあつては、多く意味のあることでは無い。善信と欺瞞とは、窮屈なわれらの心に於ては、妥協の出来ない二つの言葉として、反對のものである。東方に於ては、甲より乙に移る間に幾多の紆餘曲折がある。例へばダニエル書エノク書の如き信を置きがたい作の著者で、非常に熱心な人々は、その立場から、しかも何等不安の暗い影無くしてわれらが虚偽と稱する行爲を敢てしてゐる。物的眞實は、東洋人にとつては全く價値の乏しいものである。彼等は偏見興味情熱を通じてすべてを見るのである。若し、誠實といふことに種々程度のあることを十分認めないとしたら、歴史は不可能である。信念といふものは、それが眞實であると認めるものに對する興味以外に他の法則を知らぬものである。その追究する目的は、それ自身にとつて絶對的に神聖のものであるから、善人が成功しない時、その所論に對して厭ふべき議論を生ずるなどといふ何等の懸念をも有つてゐない。

某の證據が確固たるもので無いとしても、他の多くの證據は確實でありうるとするのである。某の不可思議が事實で無いとしても、他に多くの不可思議が事實であつたとするのである。自己の宗教の眞理であることを信じて、幾多の敬虔な人々が、十分自己の手段の薄弱を知りながら、その手段によつて幾多の人々を執念く征服しようとする力めることがある。修道院の幾多の聖痕のある女性、痙攣性の婦人、物の怪に憑かれた女達が、その住つてゐた社會の影響を受け、他の者以下でありたくないところから、或は危険な立場を支持する爲めに、自己の虚偽の行爲を信じてそれに引込まれて行くことがあつた。すべて、大事は民衆によつて成されるものである。ところが、人々は民衆の思想に投じなければ、民衆を指導することはできない。その事を知りながら、孤立して貴い位を守つてゐる哲學者は、大に賞讃に値する。しかしながら、自己の幻想をもつて民衆に對し、民衆の上に、また民衆と俱に行爲をしようとする者も、批難さるべきものでは無い。カイザルは自己がヴェヌスの子で無いことを十分知つてゐた。若し人々がランスの聖油の壺を信仰しなかつたら、佛蘭西は今日の如くで無かつたかも知れない。無力なわれらが、それを欺瞞だと言ふのは容易なことである。また、われらの小さな正直を誇つて、別の條

件の下に奮闘生活を行つた英雄を虐待することも容易である。彼等が欺瞞をもつて成就したことを、われらが翼翼たる小心をもつて成就した際に、われらは始めて彼等に對して苛酷となりうる権利を得るのである。尠くもわれらの社會のやうな、萬事が反省の日中に行はれる社會と、幾世紀をも支配した信仰の生れた無邪氣輕信の社會とは、十分その間に差別を設けなければならぬ。傳説の上に築かれてゐない大なる建設といふものは無い。かういふ場合に、唯一の罪人は、取りも直さず欺瞞されることを欲する人類である。

第十六章

奇蹟

イエスの同時代の見解によると、奇蹟と豫言成就との、證明の二つの方法のみが超自然的使命を決定し得るものであつた。イエス及びその弟子達は、完全な信念をもつて此二つの證明法を使用した。諸の豫言者は、唯イエスの爲めにのみ筆を執つたに過ぎないものであつたと、彼は以前から信じてゐた。彼は豫言者の神託中に自己の姿を認めた。あらゆるイズラエルの豫言者が、未來をその中に讀んだ鏡であると、彼は自己を考へたのである。基督教は恐らくその教祖の生前から、メシヤに關して豫言者等の告げたところに、イエスが完全に照應してゐることを證明しようとしてとめたやうである。多くの場合に於て、その比較は極めて外的のもので、われらには殆ど捕捉し難いものである。詩篇及び豫言者書中の數節を弟子に聯想させたものは、

屢、師の生活中の偶然か、さも無ければ詰まらない事情のものであつた。それでも、平素彼等が氣を配つてゐるので、目前起つた事柄から、彼等はいろいろの姿を見たのである。當時の聖書解釋は技巧的な隨意の引證で、殆ど全部言葉の遊戯であつた。猶太教の會堂は、來るべき御世に關する章節について、公定の表を所有してゐなかつた。メシヤを適用するしかたは自由であつて、嚴密な論議といふよりも、寧ろ技巧の文章を作製したものであつた。

奇蹟はといふと、この時代には、それは神性に必須な記號、豫言者の天職を現すものとして受取られてゐた。エリヤ、エリジャの傳説にはそれが澤山あつた。メシヤは夥しく奇蹟をすることであらうと認められてゐた。イエスの許から數里を距てたサマリヤに、シモンといふ魔術師が不可思議の事を行ひ、殆ど神のやうな役目を現してゐた。後にチャナのアポロニウスの名を擴め、且彼をもつて一生涯或神が地上旅行をしたのであつたと、人々が證明しようとして欲した時、その牽強附會の説を成功せしめるには、彼の爲めに莫大な奇蹟を發明しなければならぬものと誰も信じた。アレキサンドリヤの哲學者、プロチヌス等も奇蹟を行つたと看做されてゐた。それ故イエスも、自己の使命を放棄するか、さも無ければ魔術師となるかの、二つの道の何れ

かを選ばねばならなかつた。希臘の大科學派と羅馬の後進とを除くと、古代は全部奇蹟を認めてゐたことを記憶しなければならぬ。昔にイエスがそれを信じてゐたばかりで無く、法則によつて規定されてゐる自然界の觀念を微塵も有つてゐなかつたことを記憶しなければならぬ。この點について、彼の知識は、毫も當時の人のそれ以上では無かつた。更に尙、彼の最も深く根を下してゐた見解の一として、信仰と祈禱とをもつてすれば、人は全く自然を左右し得るものだといふのがあつた。奇蹟をする能力は、當時神によつて人間に授けられた特權と認められ、一向驚くべきもので無かつた。

時代の變遷は、偉大な教祖の能力であつたものを、われらに甚だ不快なものとしてしまつた。それで、萬一イエス崇拜が人類間に薄くなるとしたら、それは正に彼を信じさせた行爲其物からであらう。批評はこの種の史的現象に對して一向當惑を感じない。獨逸の聖痕を持つたある女性等の間にあつたやうな、極端な稚氣のもので無い限り、現代の魔術師は怖るべきものである。何となれば、彼は奇蹟を信ぜずして奇蹟を行ふからであり、それは一個の妖術者であるからである。しかしながら、アツシジョのフランシスコの如きものを取ると、問題は既に全く別

である。聖フランシスコ派の發生時の奇蹟の類は、われらを不快にするどころで無く、われらに眞の興味を起させるものである。基督教の創始者等は、少くも聖クララや三信友と全く同じやうな詩的無智の状態の裡に生活してゐたのである。彼等は、師がモオゼやエリヤと會談したり、彼が元素を左右したり、病人を治すことは、何でも無いことと想つてゐた。しかしながら、すべての思想が實現を希ふやうになると、幾分純潔で無くなるものであるといふことを想はなければならぬ。靈の敏感が幾分か毀損されないで、人は決して成功し得るものではない。最善の動機が普通悪い理由によつて、始めて勝利を得るといふところに、人間の精神の弱いところがある。基督教の原始的顯證家の證明は、極めて貧弱な論據の上に立つてゐる。モオゼ、コロンブス、マホメットは、常に眞理の眞の理由を與へることはしないで、毎日人間の弱點を顧慮して、始めて障礙に打勝つたのである。イエスの周囲の人々が、非常に神聖な彼の説教よりも、彼の奇蹟に感じたことの方が多といふことはさもあるべきことである。尙イエスの死の前後に、俗間の評判がこの種の事實の數を非常に誇張したことも疑の無いことである。福音書の奇蹟の様式は、事實多くの變化があるものではない。それは互に反覆されてゐて、極めて少

數の型から摸倣して作り、その土地の趣味に適するやうにしたものであらう。

福音書が、飽きる程列挙してゐる奇蹟の物語の中から、生前或は死後に、輿論がイエスに歸した奇蹟と、彼が進んでそれに當ることを承知した奇蹟との區別を立てることは不可能である。殊に努力、迷惑、戦慄の不快な境遇、及び魔術の匂のある其他の特色とが慥かに歴史的のものであるか、それとも、それは非常に妖術に心を奪はれ、この點に於ては現今の心靈主義者のそれと類似した世界に住んでゐた編纂者の信仰の結果であるかを知らうとすることは不可能である。一般の世間は、神の力が人間の中に癲癇性痙攣性の原理として在ることを實際希望してゐたのである。イエスが行つたと信ぜられてゐる殆どすべての奇蹟は、病氣を治す奇蹟であつた観がある。醫藥は當時猶太に於て、今日尙近東に於けるものの如く、即ち絶對に個人的靈感に委したもので、少しも科學的のもので無かつた。五世紀以前から希臘によつて創められた科學的の醫藥は、イエス時代のパレスチナの猶太人に殆ど知られてゐなかつた。さういふ知識状態の裡に、病者を優しく労はり、感じやすい何かの暗示によつて、回復の保證を與へる傑れた人か傍にあることは、往々決定的の救済となるものである。多くの場合に於て、全く特殊の

傷害で無い時に、優秀な人の接觸が藥劑の力に値しないと敢て誰がいふであらうか。その人に會ふといふ歡喜がそれを治すのである。その人は、成し得るもの、微笑、希望を與へる。さうしてそれは無益なものでは無い。

イエスが同國人の大多數以上に、合理的醫學の觀念を有つてゐたのでは無い。彼は世間並に、治療は主として宗教的勤行によつて行はるべきものと信じてゐた。ところで、さういふ信仰は全く矛盾の無いものであつた。人が病氣を罪の罰とか、惡魔の所業と看做し、毫も肉體的原因の結果と看做さない時に、最良の醫者は、超自然界に權力を持つてゐる聖人であつた。治療は精神的の事柄と考へられた。己の精神力を信じてゐたイエスは、當然治療に對して特殊の能力があつたと信すべきであつた。己の衣に觸れること、手を置くこと、唾液を應用することが病人に對して効驗のあることと信じてゐる彼が、若し自己の力で與へ得る慰藉を惱める者に拒むとしたら、彼、残酷であつたであらう。病人の治ることは、神の王國の一象徴と目せられ、常に貧者の解放と聯想せられてゐた。兩者とも大革命の前兆であつて、それは結局すべての不具者の再興となるべき革命のそれであつた。イエスと多くの關聯のあるエッセネ派も、極めて有

力な精神醫師と想はれてゐた。

イエスが最も履行つた治療の一種類は、御修法即ち悪魔祓ひである。容易く悪魔を信する奇怪な風が、あらゆる人々の間に普及してゐた。悪魔が、ある人々の體を占領して、その人の意志に反した行爲をさせるといふのは、單に猶太ばかりで無く、全世界にある普遍的の考であつた。アヴェスタ經の中に毎度出て来る波斯の悪魔で、それをアスモデウスといふ名に變へて猶太人が探つて來た淫慾の悪魔エシュマダエヴは、婦人のヒステリイ症の原因となつてゐた。患者の自己が最早自己で無く、癲疖、神經精神病、聾啞、瘖のやうな、原因の目に見えない不具等も前と同様に説明されてゐた。紀元前四世紀半に、此問題に關して醫學上の眞の原則を提出した、ヒツボクラテスの『神聖病について』といふ立派な論文も、かやうな誤謬を毫も社會から驅逐してゐなかつた。人々は悪魔を拂ふ多少有效な方法があるものと想像してゐた。加持祈禱の職が、醫者のやうに正規の職業であつた。イエスが生前、その法の最後の秘密を握つてゐたといふ評判のあつたことは疑はしいことでは無い。當時猶太に於ては、人々が非常に興奮した結果、多くの狂人があつた。今日に於ても、同地方で行はれてゐるやうに、徘徊するが儘

に放任してあつたこれらの狂人は、普通浮浪者の隠れ場となつて居た荒れた墓窟に住つてゐた。イエスは、これらの不幸な人々の上に、多大の勢力を有つてゐた。彼の治療に就いて多くの奇怪な物語を人々が話した。それには當時の輕信が恣に跋扈してゐたのである。しかしながら、茲にも困難は誇張さるべきものではない。人々か悪魔の所爲として説明する精神の錯亂なるものは、極めて輕微なものであることが屢であつた。今日シリヤに於て、唯多少變調のある人々を、狂人とか悪魔に憑かれた者（この二つの觀念は唯一語の *medjoun* (1) となる）と目してゐる。こんなものがイエスによつて用ひられた手段であつたに相違無い。また悪魔を祓ふ人としての彼の名聲が、彼の知らぬ間に擴つたもので無いとも限らない。近東に居住する人々が、暫くの時日の後に、醫者、魔法師、財寶發見者といふ大評判を得てゐることを知つて、時に驚かされることがある。しかも、その人々はさういふ想像を生ぜしめた事實を十分詳かにすることができないのである。(2)

それに、多くの事情から見ても、イエスは、晩くしかも不本意ながら、通力のある人となつたやうである。往々彼は一種不機嫌な様子で、彼に請ふ者に對してその粗野な心を責め、祈禱をし

た後で無ければ奇蹟を行はなかつたことがある。表面解しがたき一特色は、彼が密かに奇蹟を行はうとした注意と、彼が治してやつた者に向つて、誰にも一切口外せぬやうにと頼んだことである。悪魔が彼を神の子と宣言しようとした時、彼は口を開くことを悪魔に禁じてゐる。それは、彼等のさう認めることが、彼の本意とするところで無いからであつた。これらの趣は、奇蹟及び悪魔祓の福音書として第一であるマルコ傳中に特に記されてゐる。この福音書の基礎資料を供給した弟子は、靈驗に對する讚嘆がイエスを煩さく感じさせ、また壓迫して來る名聲に迷惑したイエスは、彼に向つて、『それに就き決して語るなかれ』と毎度いつてゐるやうである。意思の弱い人々の不斷の請求が原因で、イエスも倦怠を生じ、我慢しかねて、ある時意志の懸隔から妙に甚く爆發したことがあつた。いはば折々、通力者の職務が彼にとつて不愉快となり、殆ど一足毎に生れる不可思議をできるだけ公開すまいと欲したのであらう。彼の敵が、奇蹟の中でも、天の奇蹟空中現象を要求した時に、彼は頑強に拒絶してゐる。それ故通力者の評判は他人が彼に強ひたのであつて、彼が大にそれに反對しなかつたまでも、それに協力したことは全然無かつたと信ずることができる。また、要するに、その事についての輿論の空虚で

あることを、彼は感じてゐたものと信ずることができる。

茲で、あまりわれらの嫌惡するところに耳を傾けては、善良な歴史的方法に缺けるところがあるかも知れない。眞正な批評の第一の條件は、時代の差異を理解することと、純理教育の弊たる本能的慣習から解脱することである。イエスの性格に反對して異議を挟みたくなることから免れようとして、われらは、當時の人の目に第一位に置かれてゐた事實を打消すべきものは無い。其處には師よりも随分低級な弟子達が、師の眞の偉大を想像することができない爲めに、彼に不相應な威信を附加して、彼を祭り上げようとした附加物のあつた事をいへば適當であらう。けれども、四人のイエス傳の説話者は、揃つて彼の奇蹟を誇つてゐる。その中の一人、使徒ペテロの代辯者であつたマルコは、この點に關して非常に重きを置いてゐる。若し、全くその福音書によつて、イエスの性格を描くとすれば、珍しい效驗のある魅力を有つた修驗者として、しかも非常に通力のある怖しい、願くはその手から免かれたい程の魔術師として、イエスを誰も想像するであらう。それ故、今日でこそ幻想とか狂的のものとか考へられる行爲も、イエスの生涯にあつては、重要な地位を占めてゐたものとわれらは十分認めるのである。あのや

うな生活中に、この詰まらない一面があるからと言つて、立派な方面を犠牲にすべきであらうか。われらはそれを差控へねばならぬ。單なる魔術師であつたら、イエスが行つたやうな精神的革命を齎すことは無かつたであらう。若しイエスの一面としての通力者たるものが、道徳家宗教改革者たることを打消したとしたら、イエスから妖術の一派が生れて、基督教は生れなかつたであらう。

尙この問題は、あらゆる聖者及びあらゆる宗教の開祖に對しても、同様に提出せられるのである。癲癇、幻覺の如き、今日は病的視される事實も、昔は力と偉大との原理であつた。醫學は、マホメットの好運を作つた病名をいふことができる。殆ど今日に至る迄、同胞の幸福の爲めに最も働いた人々（あの傑れたヴァンサン・ド・ボオルも）は、彼等かそれを願つたと否とに拘らず、通力の人であつた。十九世紀のわれらが馬鹿げたこと香具師のすることと目する行爲をした史的人物は、悉く狂人或は香具師であつたといふ原則から出發すれば、あらゆる批評は虚偽のものである。アレキサンドリヤ派は高尚な學派であつた。それにも拘らず、荒唐無稽な幻術を行ふことに耽つてゐた。ソクラテスもパスカルも錯覺を免れてゐない。事實は、彼等に相

應する原因によつて、解釋されなければならぬ。人知の弱點は弱點のみを生むものである。大事は、往々皮相觀察者から見れば、偉大を殺す貧弱な周圍を伴つて生ずるものであるが、しかしながら、常に人性の裡に大なる原因を有つてゐるものである。

だから、廣い意味に於て、實に不本意ながら、イエスは通力の人であり、魔術師であつたといふのは誤の無いことである。偉大な神の如き境涯の者には常にある通りに、彼は奇蹟を行つたことは行つたのであるが、彼は輿論の要求する奇蹟を受け容れたのである。奇蹟は普通公衆の事業であつて、本尊とされる人の所行では無い。イエスは頑固に不可思議を行ふことを拒んだ。群衆がそれを彼の爲めに行つたのであらう。彼がそれを行はなかつたことこそ、最大の奇蹟であつたらう。その時には、歴史及び民衆心理學の法則が嘗てそれ以上の抵觸を受けることは無いことになつたであらう。群衆及び弟子の不可思議に對する欲望を和げることについては、彼は聖ベルナルやアッシジの聖フランシスコより自由では無かつた。イエスの奇蹟は、その世紀が彼に加へた暴行であり、一時の必要が彼に強要した妥協であつた。それ故、魔術師通力の人としての方は亡び、之に反して、宗教改革者としては永久に生きるのである。

三三三
彼を信じなかつた者も、これらの行爲には感動してその證人とならうとした。異教徒及び宗教の門に遠い人々は、ある恐怖の感情を抱いて、彼をその地から去らしめようとした。恐らく或者は、一揆の騷亂のために彼の名を亂用しようとしたやうである。しかしながら、イエスの性格が全く精神的で、毫も政治的で無い傾向であつたことが、さういふ誘惑に陥らしめな
いで済んだのである。彼の所謂王國は、同じやうな想像の若々しさと、同じやうな天の豫感とから、彼の周圍に集まり止まつてゐた若き々々の圍中にあつたのである。

第十七章

神の王國に關するイエスの思想の決定的形式

われらは、イエスの活動のその最後の局面が、紀元三十一年の逾越節の順禮の歸りから三年の結茅節の時の旅行迄、約十八個月繼續したと想像する。この時期の間に、イエスの思想は何等新要素を加へることは無かつた。けれども、既に彼の中にあつたすべてのものは、常に力と大膽とを加へながら發展し發現した。

イエスの根本的思想は、最初の日から神の王國を建設することであつた。しかしながら、既に述べたやうな神の王國を、イエスは極めて種々の意味に解釋してゐたやうである。時として、彼を單に貧者及び無相續者の世を希望する民主的首領と、人々は解するであらう。またある時は、神の王國はメシヤに關する默示録にあるやうな姿を、文字通りに成就するものやうであ

る。尙神の王國は靈の王國であり、來るべき救済は屢精神による救済であることもある。して見ると、イエスの希望した運命は、實際に行はれたもので、モオゼのそれよりも純粹な新宗教の確立である。すべてこれらの思想は、同時にイエスの意識中に存してゐたもののやうである。けれども、一時的革命のそれである第一の思想が、彼をさう引止めたものとは想はれない。イエスは、決して地も地の富も物質的権力も、それを顧慮する勞に値するものとは見てゐなかつた。彼は一向外的野心を有つてゐなかつた。時として、自然の結果から、彼の偉大な宗教的意義が、社會的意義に變化しやうとしたことがあつた。或時彼に利害問題の裁判官仲裁人たらんことを乞ひに來た者があつた。イエスは昂然として、殆ど誹謗であるかのやうにその申出を斥けた。天國の理想に没頭してゐる彼は、決して自己の輕蔑してゐる貧困を脱しようとしなかつた。尙神の王國に就いて別に二通りの考をも、イエスは常に同時に懷抱してゐたやうである。若し、彼が民衆の想像を養つてゐる天啓説に迷つた一個の熱心家たるに過ぎなかつたら、その思想の先達であつた人々よりも、彼は劣つた無名の宗派の一人であつたかも知れない。彼が一個の清教徒、一種のチャンニング或はサヴァアの牧師のやうなものに過ぎなかつたら、彼は、い

ふまでも無く、何等の成功をも贏ち得なかつたであらう。彼の體系の二つの部分、もつと清かにいへば、神の王國についての彼の二つの考へは、互に相輔け、その互に相輔けたことが無比の成功を成したのである。初期基督教徒は、われらが冥想とする思想の範圍内に彷徨する幻想家であつた。けれども、同時に、それは信仰の解放となり、教祖の告げた純粹の禮拜が竟に生れるやうになつたその宗教の建設を招徠する社會戦争の勇者達であつた。

イエスの默示的思想は、最も完全なる形に於て次の如く約めることができる。

人類の現状はその終局に達しようとしてゐる。その終局は非常な革命であり、出産の悩みに似た苦惱である。暗澹たる災厄の後を受け、奇怪な現象によつて豫告せられる再生或は新生である。眞晝に、天に人の子の證徴が現れるであらう。それは、シナイのそのやうな輝き響きわたる幻であらう。雲を裂く大嵐、東より西に一瞬の間に迸る焔の流れであらう。メシヤは榮光と壯嚴とに包まれ、天使に圍まれ、喇叭の響につれて、雲とともに來るであらう。彼の弟子達は彼と並んで王の座に着いてゐるであらう。その時死者は蘇り、さうしてメシヤは審判をなすであらう。

此審判に臨んで、人々はその所行に従つて、二つの種類に分たれるであらう。天使は宣告の執行者となるであらう。選ばれた者は、世界の始まりから準備してあつた樂園に入れられる。其處でその人達は光の衣をつけて、アブラハム、長老、豫言者等の主客となつてゐる饗宴に列なるであらう。それは少數である。他の者はゲヘナの中に行くであらう。ゲヘナはエルサレムの西の谷であつた。其處は種々の時代に火の儀式が行はれたところで、その場所は一種不淨な窟になつてゐた。だからゲヘナは、イエスの考では暗い猥らな谷で、焔の満ちてゐる地下の洞窟である。王國から逐ひ出された者は、其處で焼かれ、蟲に食はれ、サタンや叛いた天使等と一緒にゐるのである。其處には涙と齒ぎしりとがあるであらう。神の王國は閉された部屋の如く、内部は光り輝いて居り、闇黒と苦悶とのこの世の中央にあるのである。

この新しきものは永久にあるであらう。樂園もゲヘナの地獄も終りは無いであらう。越えることのできない深い淵が兩者を距てる。神の右に座した人の子は、この世界と人類との決定的状態を司る者となるであらう。

以上のすべてが、弟子達によつて、また時には師自身によつても文字通りに解釋されてゐた

ことは、當時の記録に極めて明白に現れてゐる。基督教の初期に深い不斷の信仰があつたといふのは、世界が終局に臨んで居り、基督の大なる啓示が間もなく現れやうとしてゐたからである。「時は近づけり」といふ黙示録の始めと終りとにある熱烈な宣告、「耳ある者は聞くべし」といふ始終繰返されたあの叫びは、使徒時代を通じて希望と親睦との叫びである。シリヤの言葉のマランアタ、「わが主來れり」は、信者が互に信仰を強め希望に活きる一種の合言葉となつた。紀元六十八年に書かれた黙示録は、その期を三年半と定めてゐる。「イザヤの昇天」はこれと非常に近い計算を採用してゐる。

イエスは決してこれ程明晰には言つてゐない。人が彼に天國の來る時期を尋ねると、何時も彼は返答を拒んでゐた。ある時には、その大なる日の時期は、父以外に知られてゐるもので無く、天使にもその子にも洩さなかつたと公言してゐる。彼は、人々が不安の好奇心をもつて神の王國を窺ふ時は、正にその日の來ない時であると言つた。彼は絶えず繰返して、それは、ノア、ロトの時の如く不意である、警戒してゐなければならぬ、常に出發の用意をしてゐなければならぬ、不意に起る婚禮の行列に對する如く、何人も目を覺して、ランプを點けてゐなければ

ばならぬ、人の子は盗人と同じやうに、想ひ設けない時に來るものである、見渡す空の一方から、他の一方に走る電光の如く、彼は姿を現すであらうと言つた。しかしながら、大變事の近きことを言つた彼の言葉は、一つも曖昧なところは無い。『これらの事ごとく成るまで今の代は過ぎゆくまじ。ここに立つ者のうちに、人の子のその國をもて來るを見るまでは死を味はぬ者どもあり』と言つてゐる。彼を信ぜざる者に對して、來世の前兆を讀み得ぬことを責めて『汝等夕のあかきを見て晴ならんことを豫め知る、汝等朝のあかきを見て暴風雨ならんといふ、汝等空の氣景を見分くることを知りて、何故時の徴を見分くること能はざるや』と言つてゐる。あらゆる大改革者に共通な幻想によつて、イエスは、實際よりも目的がずつと近いものと想像してゐた。彼は人類の運動の遅々たることを明かにしてゐなかつた。彼は千八百年の後に至つて未だ成就されなかつたことを、一日にして實現されるものと想像してゐたのである。

これらの甚だ正式な宣言が、約七十年間基督の群の心を領してゐた。弟子のある者は、死ぬこと無くして最後の天啓の日に會ふだらうと認められてゐた。殊にヨハネは、その數の中の人に相違無いとされてゐた。多くの者は、彼は竟に死ぬことの無い人であると信じてゐた。恐

らく、それはヨハネが到達した高齡——その高齡が、イエスの言葉を實現するために、その大な日迄神が彼をあく迄も残さうとするのだと信ぜしめる機縁となつた——からして一世紀の末頃に生じた後年の輿論であつた。次いで彼が死んだ時に、多くの者の信仰は動搖した。そこで、彼の弟子がもつと溫和な意味で基督の豫言を説くやうになつたのである。(一)

猶太の偽經にあるやうな默示の信仰を、イエスが十分認めてゐたと同時に、彼はその補足であり、寧ろその條件たる死者の復活といふ教理をも認めてゐた。この教義は既に記したやうに、イズラエルに於ては、かなり新しいものであつた。民衆の多くはそれを知らなかつた。或はそれを信じてゐなかつた。それは、パリサイ人の爲めの信仰であり、またメシヤの信仰を熱心に信ずる門人達の爲めのものであつた。イエスは、留保無しにそれを採用したが、それは相變らず最も理想主義的の意味に於てであつた。多くの者は、復活者の世界に於ても、飲食婚姻のあるものと想像してゐた。イエスは、彼の王國に新しい逾越節と食卓と新しい酒のあることを十分認めてゐるが、婚姻は正式に除外してゐる。サドカイ人は此事について、表面野卑な議論をしてゐるが、それは根柢に於て、かなり舊神學に一致してゐる。古聖人に従へば、人はその子供の

裡にのみ生残る者である事を記憶してゐる筈である。モオゼの法は、この長老風の理論を、寡婦再婚の妙な制度によつて神聖なものにしてゐた。サドカイ人は復活に反對して、それから妙な結論を取出してゐる。イエスは、永久の生には最早性の差別は存せぬこと、人は天使の如くであると、正式に宣言してその鋒を避けてゐる。時には、不敬な者は刑罰によつて全然死んで虚無の中に止まらしめられるので、正しき者にのみ復活を許してあつたやうである。しかしながら、更にイエスは、永久困惑せしめるために、復活を悪人にも適用することを毎度希望してゐる。

すべてこれらの理論の中に、絶対に新しいものは一つも無いことが認められる。福音書及び使徒行傳中にある默示的教義について見ると、既にダニエル書、エノク書、神託書、モオゼ昇天記などの猶太系統のものの中にあるもの以外に殆ど何物をも含んでゐない。イエスは、當時の人の間に一般に普及してゐたこれらの思想を承認したのである。彼はそれをもつて彼の行爲の根據とした。若しくはもつと適切に曰へば、彼の根據の一つとしたのである。といふのは、彼の眞の事業を、さう脆弱な、また事實から恐るべき反駁を受ける危険のある原理の上のみ

置くにしては、あまりに深刻な感情を自己の眞事業に對して彼が有つてゐたからである。

事實、斯様な教義を文字通りに解釋しては、何等未來の無いものであること明白である。世界の飽くまでも繼續することは、その教義を缺點のあるものにした。それ故たかだか人の一生くらの壽命が、それに與へられてゐたのである。基督教の初代の信仰はそれで説明もつく。けれども、次代の信仰は最早説明がつかない。ヨハネの死後、もしくは師と會つたことのある群の中の誰かの最後の生存者が死んだ後に、師の言葉は、虚偽のものと信ぜられたであらう。若し、イエスの教義が唯世界が近く終を告げるといふことを信するだけのものであつたら、慥に今日それは忘却の淵に沈んでゐるであらう。では、それを救つたものは何であらうか。それは福音書の思想の偉大な内容である。それは同一信條の下に、極めて種々の知的階級の者に、適當な思想を發見することを得しめたものである。イエスが豫言したやうに、彼の弟子が信じたやうに、世界は終を告げなかつた。しかしながら、その世界は新たになつた。さうして、或意味に於ては、イエスの希望した通りに革新せられたのである。彼の思想が豊富であつたのは、彼の思想が二重の面を有つてゐたからである。彼の空想は人の頭を通過した幾多の他のも

のやうな運命を有たなかつた。何となれば、それは寓話のやうな包装のお蔭で人類の中に入り、其處に永遠の實を結ぶ生命の種を藏してゐたからである。

しかしながら、それは現實によつて彼の空想に蒙らされた残酷な否定から、われらの偉大な師の名譽を清くするために發明した好意の解釋であるといふべきでは無い。否、否、決してさうでは無い。その眞の神の王國、各自を王とし司祭とする精神の其王國、芥子種のやうに世界を覆ふ樹木となり、その枝には鳥が巢を作るやうになるその王國を、イエスは理解し、希望し建設したのである。見せびらかしの降臨などといふ、不可能の、冷かな虚偽思想の傍に、現實の神の都、眞の新生、山上の説教、弱者崇拜、民衆愛、貧者趣味、謙讓素朴なすべてのものの復権といふことを彼は考へたのである。彼は永久に繼續する特色によつて、無比の藝術家としてこの復権を描いたのである。われらの中、何人も自己の裡に最良のものを有つてゐることに就いては、彼に負ふところがある。空虚な天啓、天の雲に乗つて凱旋して來るといふ彼の希望などは、見遁して置かなければならぬ。恐らく、其處には彼よりも他の者の誤謬があつたのであらう。また彼が衆人の幻想を有つてゐたにしたところで關するところでは無い。彼の空想

は、彼を死に抗して強くしたのであり、それが無かつたら敗けたかも知れぬ戦ひに彼を支持したからである。

だからして、イエスの想像した神の都には、種々の意味をもたせなければならぬ。時の終りが近く、それに準備すべしといふのが、彼の唯一の思想であつたら、彼はバプテスマのヨハネを超えなかつたかも知れぬ。崩壊に近い世界を見捨て、除々に現生活を解脱し、來らんとする世に憧憬れるといふのが、彼の説教の最後の言葉であつたらう。イエスの教訓は、常にもつと廣い意味があつた。イエスは、人類の新生面を開くことが目的であつて、單に現状の終局に準備をするばかりでは無かつた。エリヤ或はエレミヤが最大の危機に人々を用意させる爲めに現れるとしたら、彼のやうな説教をしなかつたであらう。最後の日のあの道德なるものが、永久の道德、人類を救済したものとつたことは甚だ明かである。イエス自身は、多くの場合に、默示的理論に少しも陥らない言ひかたをしてゐる。神の王國は既に始まつてゐる、何人も己の裡にそれを持つてゐて、それに相應しき者はそれを味ふことができ、その王國を、何人も神の心の歸依によつて音をも立てず造りうるものであるといふ事を屢公言してゐる。従つて、神の王

國は、善きもの、現存のそれよりも優れた秩序に過ぎないので、忠實な者は、分に應じて建設に盡すべきものであり、或は更に、佛教の解脱、即ち超越の結果に類したもので、靈の自由といふことに他ならぬのである。われらにとつては、純粹抽象のものであるところのこれらの眞理が、イエスにとつては、活きた實在であつた。彼の思想内では、一切が具體的實體的である。イエスは、最も力強く理想の現實性を信じた人である。

當時の彼と同人種の有つてゐたユトピヤを受け容れて、イエスは、かやうに實質のある誤解によつて、高遠な眞理を作り出すことができた。彼の神の王國は、疑も無く、やがて天上に展開しようとしてゐる默示であつた。けれども、尙恐らくは、有徳の人が彼の父の胸に感得する、父子の感と自由とによつて創造せられた靈の王國であつた。それは、勤行殿堂祭司の無い純粹の宗教であつた。それは正しき人の良心に、また民衆の腕に委ねられた世界の精神的審判であつた。それは生存する爲めに作られたものであり、それが生存したものである。一世紀を徒らに待つた後に、やがて世界が終を告げるといふ物質主義的の希望が失はれてから、眞の神の王國が現れた。幾多の勝手な説明は、現實的の王國——それは來ることを欲しない——の上に被

膜を投じた。パピアスのやうに、イエスの言葉を字義通りに固執する強情な人々は、見識の狭い時勢遅れの者として扱はれた。實は新約の第一書たるべきヨハネ默示録は、早速大變動が來るといふ思想をあまり正式に記してゐるところから、第二列に排斥せられ、不可能のもの、幾通りにも撓められてしかも殆ど排斥されるものとなつた。少くも、その成就は何時のことか解らない將來に延期された。尙反省時代の最中に、相變らず最初の弟子達の希望を守つてゐた、若干のあはれな時代遅れの人々は、基督教の低地に迷ひこんだ異端者（エピオン派、千年期説の信者）となるやうになつた。人類は既に別個の神の王國に遷つてゐたのである。イエスの思想中に含まれてゐた眞理の部分が、晦澁の因をなしてゐた空想に既に打勝つてゐたのである。けれども、それかと言つて、生きてゐた神聖な、球根の粗雑な外皮と見るべきその空想を侮蔑してはならぬ。あの幻のやうな天國、基督教を永い間何時も悩ました神の都を何處までも追求したことは、あらゆる改革者、フロラのヨアキムから今日の新教徒に至るまでの、默示録を執念く信じた弟子達を活かした大なる未來本能の原理であつた。完全な社會を築くには力の足りなかつたその努力も、常に眞の基督教をして、現在に抗する力士たらしめた異常な緊張の

泉源であつた。「神の王國」の觀念と、その完全な表象たる黙示録とは、だから或意味に於て、人類進歩の最も高尚な、また最も詩的な表現である。慥に、また大なる迷ひもそれから出るべきものであつた。世界が終るといふ人類の上に不斷の脅威のやうに懸かつてゐた思想は、幾世紀間それが惹起した週期的の恐怖の情から、非宗教的のあらゆる發達を大に阻害した(10)。「社會が自己の存在について安んじなかつたところから、一種の戰慄と屈從の習慣とから離れることができないで、その爲めに、中世を古代及び近世より非常に劣つたものとしたのである。要するに大變化は基督の出現に對する見解そのものの中で行はれたのである。最初人類に對して、地球が將に終を告げやうとしてゐると告げた時に、微笑をもつて死を迎へる小兒のやうに、人類は嘗て感じたことの無い最も強烈な歡喜を感じたのである。老境に入つてから、この世界は生に執着した。久しい間、ガリラヤの至純な人々の非常に待ち焦れた惡みの日は、囚はれの幾世紀かにとつては怒の日(怒の日、その日)と化した。しかしながら、野蠻の裡にあつても、神の王國といふ觀念は充實したものであつた。「この世の夕近ければ……」の句によつて始つた、中世前半の行爲のあるものは解放の憲章であつた。封建的の教會(法皇廳)のあつたにも拘ら

ず、宗門、宗派、聖者等は、福音書を稱として、世界の不公平に抗議を續けた。イエスの繼承者としては、最早彼を嫌つてゐるかのやうに見える者以外に、公正な繼承者の無い今日に於ても、社會を理想的に組織しようとする空想——それは原始の基督教諸派の希望と類似の多い——は、或意味で同一の思想の發露したもので、あらゆる未來思想の芽を持ち「神の王國」が永久に幹となり根となる巨大な樹木の一枝に過ぎないものである。人類のあらゆる社會革命は、この言葉に接穂つぼされるのであらう。しかしながら、粗野な物質主義の色彩を帯び、不可能を望み、即ち政治經濟の所置の上に世界の幸福を築かうとする現代社會主義者の試みは、イエスの眞精神、自分のいふ絶對理想主義、地を領せんとするには、地を棄つべしといふこの原理を法則としない限り效果の無いものであらう。

「神の王國」といふ言葉は、一面に於て、現生活に對する償ひとして、また運命的の補ひとして靈の感ずる要求を非常に巧妙に言ひ現したものである。人間を二個の本質から成つたものと考へることを拒む者、靈魂不滅の自然教的教義を生理學と矛盾するものと想ふ者は、何かの形で人の心の要求を満足させる最後の償ひがあるといふ希望に憩ひたくなる。幾百萬世紀の後に

進歩の最後が宇宙の絶對的意識と、その意識の中に嘗て生存したすべてのものの覺醒する事實とを齎すもので無いとも限らない。百萬年の睡眠は一時間の夢よりも必ずしも長いものではない。この假定からすれば、聖パウロが瞬く間にといつたのも尙理由のあることかも知れない。精神的で徳のある人類の復讐をするといふことが事實ある筈である。また、眞面目なあれな人達が、他日世界を審判することがあるに相違無い。さうして、その日にはイエスの理想的の姿が、徳を信じなかつた小心者や、徳に達することのできなかつた利己主義者の狼狽を惹き起すことであらう。イエスの好んだ言葉が、だから、永久の美を湛へて残るのである。一種の偉大な洞察力が無比の師を指導し、諸の眞理を同時に抱擁する捕捉しがたい崇高の裡に彼を支持した觀がある。

第十八章

イエスの制度

しかしながら、全然黙示録の思想にイエスが没頭してゐたもので無いことを十分證明するのも、彼がそれに最も耽つてゐた時にも、極めて確かな見解から永續的教會の基礎を残しつつあつたことである。彼が自ら自己の弟子の中から、「使徒」或は「十二人」と特に稱せられる者を選んでゐたことは、殆ど疑の餘地の無いことである。といふのは彼の死後、彼等が一體を成し、彼等の間に生じた空隙は選舉によつて充たすことにしてゐるのが認められるからである。それはヨナの二子、ゼベダイの二子、アルバイの子ヤコブ、ピリポ、ナタナエル、バルトロマイ、トマス、訓戒遵奉者シモン、タッドイ或はレツバイといふ者、イスカリオテのユダであつた。イスラエルの十二族の觀念が、これだけの數を選んだことと無縁のもので無かつたことは

當然のことである。要するに、十二人は特権のある弟子の一團を形成し、ペテロが距ての無い首位を占めて居り、さうして、イエスはこの團體に彼の事業を宣傳することを委任したのである。規則的に組織された祭職階級といふ感じは少しも無い。われらに傳へられてゐるこの十二人の表には甚だ不確實と矛盾とがある。その中の二三者は全く名が現れなかつた。尙少くもペテロとピリポの二人は妻帯し數人の子供を有つてゐた。

イエスは明かにこの十二人に對して、誰にも話してはならぬ秘密を残してゐた。彼の計畫といふのは、或不可思議をもつてわが身を取圍むこと、彼の死後大なる證をやめること、世界に明かにすることは弟子に委任して後のこととし、唯弟子だけに自己を完全に啓示するに止めて置くことであつたやうに想はれる節がある。「暗黒にてわが告ぐることを光明にて言へ、耳をあてて聽くことを屋根の上にて宣べよ。」かやうに彼はあまり明晰な宣言を避けて、世間と彼との間に一種の仲介を設けた。事實、彼は使徒に對して特別の教訓を與へ、俗人には意味の不明な幾多の譬喩を弟子達に述べた。謎のやうな言ひ廻しかたと觀念聯合に多少變なところのあることが、博士達の教訓に流行したものであつて、ビルケアボトの訓言中に、その例を見受けられる。

イエスは親しい弟子達に彼の格言寓話の特別の意味を説明し、往々晦澁の原因となる豊麗な比喩を棄てて、彼等の爲めに教訓を授けたことがある。この説明の多くは注意して保存されたもののやうである。

イエスの生前から、使徒は説教をした。しかしながら、決して彼から離れることは無かつた。猶彼等の説教は神の王國の近づけることをいふに止まつてゐた。彼等は町々へ行つて好遇を受けてゐた。適切に曰へば、慣習に従つて自分達から好遇を強ひたのである。近東に於ては、客は多大の權威を有つてゐる。客は一家の主人以上である。主人は客を非常に信用する。その家庭的説教は、新しい教義を宣傳する上に好都合であつた。人々は隠してゐる寶物をも客に見せる。かくして與へられた物に對して禮を返すのである。慇懃と親睦とが手傳つて、一家は感動し改宗する。近東風の款待の風を除外しては、基督教の宣傳は説明不可能であらう。善い舊習を重要視したイエスは、恐らく既に旅館のある大都市では、廢せられてゐたこの昔風の公權を遠慮無く弟子達に利用させたことであらう。「勞働人のその食物を得るは相應しきなり」と彼は言つてゐる。一度誰かの家に入つた以上、彼等は使命の續くかぎり、捧げられる物を飲み食ひ

して滞在すべきものであつた。

好き音信の使者が、イエスの例に倣つて、親切と慇懃との態度をもつて、その説教を快いものにするやう彼は希望してゐた。家に入る時に、彼等がセラム、即ち幸福の慶賀をすることを彼は希望した。當時も今日の如く、セラムは近東に於ては、不確實な信仰の人に對しては差控へる宗教的同信の符徴であつたから、或者は躊躇したのである。「恐るる勿れ、その家の人若し汝等の祈る平安に相應しからずば、その平安は汝等に歸らん」とイエスは告げてゐる。事實、往々神の王國の使徒が冷遇せられ、イエスに訴へに来ることがあつた。普通、イエスは彼等を和めようとした。師の全能を信じてゐた或者は、この勘忍をもどかしいことと思つた。ゼベダイの子等は、冷遇する都市に、彼が天の火を招かんことを望んだ。イエスは、彼等の憤りを巧妙な諷刺をもつて迎へ、「われらは人々を滅ぼさんとて來れるにあらず、彼等を救はんとて來れるなり」といふ言葉で彼等を遮り止めた。

彼の使徒が取も直さず彼自身であることを原理として定めようとして、彼はあらゆる方法をつくした。人々は、彼等に對して、イエスが不可思議の力を傳へてゐると信じてゐた。彼等は、

時に己の力以上であつたにも拘らず、悪魔を拂ひ、豫言をし、名高い神通力のある人々となつてゐた。また、彼等は手を觸れ或は油を塗ること——近東醫術の根本的方法の——によつて病氣を治した。尙、彼等は蛇使ひの如く、蛇を扱ひ、平氣で毒を飲むことをもした。イエスを遠ざかるにつれて、この妖術は次第に不快なものに化した。しかしながら、それが原始基督教會に於て普通のものであり、當時の人の注意を第一に集めてゐたことは疑の無いことである。香具師が民衆の信じやすいこの運動を利用したことを、誰も容易く想像するであらう。イエスの生前から、既に彼の弟子で無い者が幾人も、イエスの名を藉りて悪魔祓ひをしてゐた。眞の弟子は、それに尠からず立腹して彼等を妨げようとした。イエスは、それも彼の評判を高くするものと認めて、さういふ連中にあまり酷な態度を示さなかつた。尙この超人的能力が、いはば職業化してゐたことを觀取すべきである。不條理な論理を極端迄押詰めて、ある者は魔王ベルゼブブによつて悪魔を拂ひ落してゐた。この地獄の王は、その眷族に對して全權を握つてゐるに相違無く、従つて彼によつて働けば侵入してゐる悪靈を逃走せしめうることを必定であると人々は想像したのである。中にはイエスの弟子から、その授かつてゐる奇蹟能力の秘密を購はう

とした者さへあつた。

教會の萌芽は、その時から現れかけてゐた。結合した人々（エクレシヤ）の力が有力なものだといふ觀念は、慥にイエスの觀念であると見られる。人々を相集まらしめるものは、即ち愛による結合であるといふ全く理想主義的教義から、彼は人々が彼の名によつて集る度毎に、已は人々の中央にあるべしと告げた。彼は教會に、束縛と解放（或事柄を適法不法とする）、罪を赦すこと、所罰すること、權威をもつて警戒すること、確實に聽かれる祈禱をする權利を委任した。これらの言葉の多くは、團體の權威——後にはこれをイエスの權威に代へようとした——に基礎を與へるために、師の言葉として發明されたものであるかも知れない。要するに、彼の死後になつて、始めて個々の教會が構成されるやうになつたのである。尙その最初の構成は單純に猶太教の會堂を模範としたものであつた。アリマチヤのヨセフ、マグダラのマリヤ、ニコデモのやうに、イエスを非常に愛してゐて、彼に大なる希望を繋いでゐた多くの人々は、多分これらの教會に入らないで、彼に對して抱いてゐた優しい度ましい追憶に執着してゐたもののやうである。

けれども、イエスの教訓の中には、應用倫理の痕跡も、極めて臍げな教會法規の痕跡も全く無い。唯一回、結婚に關して明確に宣言し、離婚を禁じてゐる。一つも神學も無ければ、信仰個條も無い。僅に、父と子と聖靈とに關する多少の見解があつて、それから後に三位一體論、化身論を作り出したが、それもまだ不決定の信仰状態に止まつてゐた。猶太教典の最後篇には既に、知慧としてのロゴスと、時に同視せられる神的實在と見るべき聖靈なるものが見えてゐる。イエスはこの點に固執して、ヨハネのそれよりも遙に勝つてゐる、父と靈とによる洗禮を弟子達に與へることを主張した。イエスにとつては、この聖靈は絶えず父なる神から發する呼吸に外ならぬものであつた。次いでそれが穿鑿に陥つた。イエスがその弟子達に、死後彼の代りに何もかも教へてくれ、彼の宣べた眞理の證明をしてくれる聖靈を、彼等に送ると約束したものと人々は想像した。他日使徒は大風と焔の束との形で聖靈から洗禮を受けるものと信ぜられた。この聖靈を言ひ現すために、シリヤ・カルデヤの言葉が希臘語から藉りたペラクリトといふ、さうして此場合には、辯護士顧問、或は天理代辯者、或はまだ隠れてゐる不可思議を人に啓示する任務を帯びてゐる博士といふ意味のあるらしい言葉を用ひてゐた。イエスがこの言

葉を用ひたといふのは甚だ疑はしいことである。それは、猶太教の神學及び基督教の神學が數世紀に亘つて繼承し、メタトロノス、シナデルス、サンダルフォンといふ種々の神の助手や、傳説説明のあらゆる人格を生すべき適用方法の一であつた。唯猶太教に於ては、これらの人格創造は、個人の自由な思索として止まつてゐたが、基督教の方では、四世紀以後、正統派及び一般教義の生命となるべきものであつた。

宗法と信仰個條とを含んでゐる宗教書中の觀念と、イエスの思想とが、どれほど距離のあるものであつたかを云々する必要はあるまい。嘗に彼が書くことをしなかつたばかりで無く、聖書を作る發生期の宗派の精神に、彼は反對であつた。彼は最後の 大變動が明日にも起ることと信じてゐた。メシヤは新法を宣布する爲めで無く、律法と豫言者とを終らしめるために來たのである。それ故、或意味で原始基督教の唯一の天啓書である黙示録を除外すると、使徒時代の記録は、完全な教義の體を與へようとする意志の全く無い偶然の作品である。福音書も、最初は極非公式の性質のもので、傳統に比すると極めて微小の權威を有つてゐたのである。けれども、この宗派は何かの秘蹟なり儀式なり入信の證なりを有つてゐなかつたかといふ

に、唯一つ、あらゆる傳統が其起源をイエスに發してゐるものとしてゐるものを有つてゐる。師の特に喜んでゐた思想の一つは、それは彼自身が、マナよりも遙に優秀な、人類が今後これによつて生活する新しい麵麩であるといふ思想であつた。聖餐の基礎となつた此思想は、時に彼の口から、非常に具體的な形となつて現れた。殊にある時カペナウムの會堂で、彼は多くの弟子を失ふ程の大膽な調子に出たことがあつた。「まことに誠に汝等に告ぐ、モオゼは天よりのパンを汝等に與へしにあらす。」次いで附言して「われこそ生命のパンなれ。われに來たる者は飢えず、われを信する者はいつまでも渴くことなからん」と言つた。この言葉は烈しい吐きを惹起した。人々は互に呷いて、「われは生命のパンなりとの言葉にて彼は何をいはんとするものにや。これはヨセフの子イエスならずや、われらはその父母を知る、何ぞ今われは天より降りたりと言ふか」と言つた。そこで、イエスは更に力をこめて、「われは生命のパンなり、汝等の先祖は荒野にてマナを食ひしが死にたり、食ふ者の死ぬることなからしめんが爲めに、天より降りるパン此處にあり、われは天より降りし活けるパンなり、人このパンを食はば永遠に活くべし、わが與ふるパンはこれ世のためのわが肉なり」と告げた。憤慨は極度に達した。「此人はいか

で己が肉をわれらに與へて食はしむることを得ん。」イエスは更に誇張して述べた。「然り、然り、汝等人の子の肉を食はず、その血を飲まずば、汝等に生命無し、わが肉をくらひ、わが血を飲む者は永遠の生命をもつ、それわが肉は眞の食物、わが血は眞の飲料なり、わが肉を食ひわが血を飲む者はわれに居り、われもまた彼に居る、われを遣したる父によりてわれ生けるごとく、われを食ふ者はわれによりて生く。」パラドックスの言葉をもつて、かやうに頑強であつたことから、多くの弟子が離反し、彼と往來することをやめるやうになつた。イエスは取消しをせず、唯附け足して、「活かすものは靈なり、肉は益する所なし、わが汝等に語りし言は、靈なり生命なり」と告げた。十二の弟子はこの奇怪な説教にも拘らず、依然として忠實であつた。特にケバスの爲めには、それが絶対的誠實を示し再び「汝は神の子基督なり」と言ふ機會であつた。

この時から、此宗派の人々が食事を俱にする際に、カペナウムの人々に歓迎されなかつた言葉と關聯のある或習慣が出来上つたものやうである。しかしながら、この事に關する使徒の傳説は幾通りもあつて、また恐らく態と、不完全に作つてあるやうである。聖パウロによつて、

物語の確認せられた共觀福音書は、神秘的儀式の基礎となつてゐる唯一の秘蹟行事を想像し、さうしてこれを最後の晩餐にあつたこととしてゐる。カペナウムの事件を、正しくわれらに傳へてゐる福音書は、最後の晩餐について非常に詰しく述べてゐるにも招らず、さういふ行事のことについては語つてゐない。其他のところ、イエスが割かれた麵麩に自己を認め、恰もその態度が、彼と往來してゐた者にとつては、イエス自身の最も特色を語るものであるかのやうに見えてゐる。彼が死んだ時、弟子達の最も敬虔な記憶の中に出て來る姿は、手に麵麩を持ち、それを祝福し、割いてそれを列席者に示してゐる神秘的饗宴の主人としての姿であつた。それは彼の習慣の一つであつて、その時、彼は殊に愛嬌よく感に入つたものと信ずることができ、外的の事情、卓上に魚(2)のあること(チベリア湖畔で儀式の出来たことを證する著しい例)は、それ自身で殆ど秘蹟であつて、聖餐の光景を描くに必要な一部分となつた。(2)

食事は發生期のこの團體に於て、最も和氣霽々たる時の一となつてゐた。この時には人々が相會した。師は各人に談話をし、快活な魅力のある談話をした。イエスは、この瞬間を愛し、自己の周圍にかやうに集つてゐる精神的の彼の家族を見ることを喜んだ。猶太の習慣では、食

事の始まりに、家長が麵麩を取り、それを祈禱によつて祝福し、それを割いて一々の空に呈するのであつた。葡萄酒も同じやうな聖化の對象物であつた。エッセネ教徒、テラプウト教徒の中では、聖餐は既に儀式的意義と、後に基督教の晩餐が取ることになる發達とを有つてゐた。同一の麵麩を受けることは、一種の同信一種の相互的連鎖と看做されてゐた。イエスはこの事に非常に力強い言葉を用ひ、それが後に甚しく文字通りに受取られるやうになつた。イエスは、その考に於て甚だ理想主義であり、同時にその表現に於て甚だ物質主義であつた。信者は彼によつてで無ければ生きるもので無いこと、全部——肉と血と靈——彼が眞の信者の生命であるといふ思想を表現するために、彼は弟子達に向つて、『われは汝等の食物なり』と言つた。この句は譬喩的文章に變じて、『わが肉は汝等のパンなり、わが血は汝等の飲料なり』となつた。常に著しく物其物を想はせるイエスの慣用語は更にその度を遙に進めた。食卓で食物を指して、『われ此處にあり』と言ひ、麵麩を持つて、『これわが肉なり』葡萄酒を手にして、『これわが血なり』と言つた。何れも『われは汝等の糧なり』と同値の言ひかたである。

この神秘的儀式は、イエスの生前から重要な意義を有つた。それは多分最後のエルサレム旅行より、かなり以前のことであつて、一定の行爲よりも、^{すつと}一般的教義の結果であつた。

イエスの死後、それは基督教同信の大なる信條となり、さうして、人々はその確立を、救世主の生活中最も崇高な時に結びつけたのである。麵麩と葡萄酒とを神化する際に、イエスの生を棄てた時弟子達に遺した告別の記憶を人々は認めようとしたのである。人々はこの秘蹟の中にイエス自身を認めた。靈の存在といふ極めて精神的、且師に最も親みのある一であつた觀念——それは例へば、イエスの名によつて集つた時には彼が親ら弟子達の中央にあるといはしめたやうな——が容易にそれを當然なこととしたのである。前にも述べたやうに、イエスは個性を成してゐるものについては、畫然とした觀念を決して有つてゐなかつた。彼の到達した興奮の程度では、肉體は物の數で無いといふ程度に、彼のこの觀念が悉くの他よりも卓絶してゐた。人々が互に愛し、甲乙相依つて生きてゐれば、その人々は一體である。彼と彼の弟子とが、何うして一で無かつたと言へやう。彼の弟子達は同一の言葉を採用した。幾年か彼によつて生きてゐた者は、常に麵麩を持ち、次に『聖き貴き御手に』盃を保ち彼等のために自己を捧げた彼の姿を見たのである。人々が食ひ、人々が飲んだのは彼自身であつた。彼は眞の逾越節となつ

た。昔のそれは彼の血によつて廢せられたからである。譬喩、もつと適切に曰へば、概念に十分現實性を盛るのが特色となつてゐる言葉の癖を、根本的に決定されてゐて本義と譬喩とに嚴密な差別を設けなければならないわれらの言葉に翻譯し出さうとするのは不可能なことである。

第十九章

熱心昂奮の増進

主として神の王國を期待することを基礎としてゐる、かやうな宗教的社會は、それ自身として視て甚だ不完全なものであるべきは明かである。基督教の初代は、全然期待と空想とで生きてゐたのである。明日にも世の終りを見るといふので、世界の繼續のみに用ひられる事柄は、すべて無益なものであると人々は看做してゐた。財産の趣味は、缺陷のあるものと看做されてゐた。地上に人を執着せしめるもの、天より人を外らすものは、悉く回避すべきものであつた。多數の弟子が結婚してゐたにも拘らず、一旦此宗派に加入するや否や、人々は最早結婚の約をしなかつたやうである。獨身(一)であることの方が非常に憚られてゐた。イエスは神の王國の爲めに、不具者となる者を賞讃したこともあるやうである。それに就いて、彼は彼の原則と一致し

てゐた。「若し汝の手、または足、汝を躓かせば、切りに棄てよ。不具または蹇跛にて生命に入るは、兩手兩足あり永遠の火に投げ入れらるるよりも勝れり。若し汝の眼、汝を躓かさば抜き棄てよ。片眼にて生命に入るは、兩眼ありて火のゲヘナに投げ入れらるるよりも勝れり。」子孫の無くなることは、神の王國の徵候條件と屢考へられてゐた。

イエスによつてその教訓中に加へられた種子が、多種多様で無かつたとしたら、此原始教會は繼續的の一社會を作ることが到底無かつたであらう。世界を改宗させる眞の基督教會が、「最後の日の聖者等」のあの小さな宗派から解説し、人類社會全體に適用のできる輪廓のものとなる迄には、尙一世紀以上を必要とするのである。しかしながら、同一の事柄は、最初僧侶のみを目的として建設された佛教に於ても生じてゐる。若し聖フランシスコ派が、自派を人類社會全體の法則とするといふ主張に成功したとしたら、同様の事實がこの派にも起つたことであらう。ユトピヤの状態に生れ、誇張其物によつて成功した前述のやうな大建設は、深刻な變化を受け、過度の弊を拂ひ棄てた後に、始めて世界に地歩を占めたのである。イエスは容易く不可成を企て得る者と信ぜられ、それは全く修道者の第一期を過ぎたもので無かつた。彼は必要に對し

て何の讓歩をもしなかつた。彼は大膽に自然に對する戰爭、血縁と全然斷絶することを説いた。「われ誠に汝等に告ぐ、神の國のために、或は家、或は妻、或は兄弟、或は兩親、或は子を棄つる者は、誰にても今の時の數倍を受け、また後の世にて永遠の生命を受けぬは無し。」

イエスが弟子に與へたものと認められる教訓にも同じ昂奮の趣がある。外部の者に對しては甚だ寛大で、時には中途半端の入信で満足する彼も、弟子達に對しては非常に酷しかつた。彼は「殆ど」を欲しなかつた。従つて最も嚴格な規定で作られた宗派といふべきものであつた。生活の煩累が人を迷はせ卑くするものだといふ自己の思想に忠實なイエスは、地上から全く解脱し、彼の事業に絶對的献身をすることをその弟子達に要求した。彼等は、金錢を携帯すること、途中の食糧を準備すること、乃至小囊、衣更の服を持つて行くことをもしてはならなかつた。彼等はこの上無い貧困を實行し、施物と欸待とで生活しなければならなかつた。「價無しに受けたるものは價無しにそれを與へよ」と彼は立派な言葉でいつてゐる。捕へられて審判者の前に引出される時のために、辯解の準備をする勿れとも言つてゐる。それは天の辯護人がいふべきことを彼等に囁いてくれるからである。父は天から靈を彼等に授けるのである。その靈

はあらゆる彼等の行爲の原則となり、思想の指導者となり、世界を通じて案内者となるものである。町より逐はれた時は靴の塵を町の上に拂へ、けれどもその町が無知であつたと辯解のできないやうに、神の王國の近づけることを教へよといひ、更に附言して、「汝等イスラエルを巡りつくさざるに人の子は現るべし」と告げてゐる。

稀有な情熱が、すべてこれらの言葉に生氣を與へ、それが一部分弟子達の熱心を成すことになつてゐる。けれども、その場合にも、その熱心は彼の事業であつたのであるから、間接にイエスから出てゐる譯である。イエスは、彼に従はんとする者に、大なる迫害と人類の憎惡の來ることを告げてゐる。彼は仔羊の如く彼等を狼の群の中に送つた。彼等は會堂で擲たれることもあり、牢獄に引ずりこまれることもあるだらう。兄弟は兄弟によつて渡されることもあり、子は父によつて渡されることもあるであらう。若し人彼等を或國で迫害する時には、他の國へ逃げよといつてゐる。「弟子はその師より優らず、僕はその主人より勝らず。身を殺して靈魂をいささかも奪ひ得ぬ者を懼るる勿れ。二羽の雀は一錢にて得べし。然るに汝等の父の許し無くば、その一羽も地に落つること無からん。汝等の頭の髪までも皆がぞへらる。怖るるなかれ、汝

等は多くの雀よりも優れり。人の前にてわれを言ひあらはす者は何人と雖もわれわが父の前にて言ひ顯さん。されど人の前にてわれを否む者は何人と雖も、天にゐますわが父の光榮に包まれ、われ來る時、そを天の使の前にて拒まん。」

これらの嚴肅から進んで、彼は肉を否定する迄に到つた。彼の要求は、最早際限が無かつた。人性の健全な制約を蔑視して、人は唯彼の爲めにのみ存在し、彼一人だけを愛することを彼は欲した。「人もしわれに來りて、その父母妻子兄弟姉妹己が生命までも憎まずば、わが弟子となるを得ず。」⁽²⁾「汝等の中その一切の所有を退くる者ならでは、わが弟子となるを得ず。」人間の奇異な或物が、その時彼の言葉に混つてゐた。それは根こそぎ生命を喰ひ、すべてを怖しい荒野に化する焔のやうなものであつた。基督教的至善の特色といはれる、厭世、極端な没我の苦い悲しい感情のその始祖は、初期の氣の利いた愉快な道德家で無く、一種の壯大な豫感から漸次に人類以外に逸した沈鬱な巨人であつた。心の最も正當な要求に反對して戦つてゐたその時に、彼は生活、戀愛、視覚感覺の快感を忘れてしまつたのであるとも言へよう。あらゆる度を越えて、「人もしわが弟子たらんとおもはば、己を棄てわれに従へ。己よりその父その母を愛

する者は、われに相應しからず。己よりその子その娘を愛する者は、われに相應しからず。己が生命を救はんと思ふ者は、これを失ひ、わが爲めに、また好き音信の爲めに、己が生命を失ふ者は、之を得べし。人、全世界を贏くとも己が生命を損せば何の益かあらん」と敢て彼は言つてゐる。史實と承認すべきものでは無いが、誇長することで特色の一を示さうとする類の二つの逸話が、よくこの對自然の挑戦を表現してゐる。彼はある男に向つて、「われに従へ」と言つた。するとその男は答へた。「主よ、まづ行きてわが父を葬むることを許させたまへ、汝は行きて神の國を告げたまへ」と言つた。更に今一人の男は、「主よ、汝に従はん、されど先づ往きてわが家の務めを命じ置かんことを許させたまへ」と言つた。イエスはそれに答へて、「手を鋤に置きて後を顧みる者は神の國の人にあらざ」と告げてゐる。異常な保證と稀有な柔和さとして、われらのあらゆる者が翻つて、これらの誇張を成程と想はせることがあつた。「すべて勞する者、重荷を負ふ者、われに來れ、われ汝等を休ません。われは柔和にして心卑ければ、わが軛を負ひてわれに學べ、さらば靈魂に休息を得ん。わが軛は易く、わが荷は輕ければなり。」

、誇張の言葉でしかも怖るべき力のこもつた言葉で言ひあらはされたこの昂奮的の道德の將來

にとつて、一つの大きな危険が生じつゝあつた。人を地上から解脱させることで、人々は生活を破壊しつゝあつたのである。基督教徒は、悪い子、非愛國者でも、それが基督のために、父に逆ひ、祖國を否定するのであつたら、賞讃されるのである。すべての人の母たる古代都市、共和國、すべての人に共通な法律、これらは神の王國とは敵對關係で組織されてゐる。神教政治の宿命的萌芽がそこで世界に導き入れられることになつたのである。

また別個の結果が、この時から生まれることになつた。独自の繼續に安んじてゐる社會の中に於いて、平穩な状態に移されると、一時の危機の爲めに出來上つたこの道德は不可能の觀を生ずべきものであつた。そこで福音書は、基督教徒にとつてエトピアとなるべき運命のものであり、極めて少數の者のみが實現を志すやうになるべきであつた。この雷のやうな訓言は、大多數にとつては深い忘却の淵に眠ることとなり、聖職者のみによつて保たれるものとなるべきであつた。福音書的人物は危険人物となつた。人類の中で、最も利己驕慢無情淺趣味の、例へばルイ十四世の如き者すら、福音書の如何に拘らず、自己を基督教徒なりと説いてくれる聖職者に遭遇することになつた。けれども、また、常にイエスの崇高な逆説を文字通りに解釋す

る聖者にも遭遇すべきものであつた。至善は社會の普通状態以外にあるものであるから、また完全な福音書的生活は、世界の外に於てのみ營まらべきものであるから、禁欲主義及び修道院の原則が提出された。基督教の社會は二個の道德法則をもつことになる。一は普通人の爲めの平凡な仰ぐべきもの、他は完全人の爲めの過度迄に達した昂奮的のものである。完全人は取も直さず福音書の理想を實現する主張の法則に服する僧侶のことである。此理想は、唯獨身と貧困との義務があるだけのものにして、誰にも得られるもので無かつたことは明白である。かういふ有様で、僧侶だけが幾分眞の基督教徒であつた。通俗の常識は、この極端に對して反抗の心を起こすべきである。それによると、不可能は弱點と誤謬との證據である。しかしながら、通俗の常識は、大事に對する時に限つて、悪い批判者である。人類から些少を獲ようとする時には、大にそれに依頼することができる。福音書に負ふやうな莫大な道德的進歩は、誇張其物から來るのである。基督教は、ストア主義のやうな、しかし、もつと内容の豊かなところがあつて、人間の中にある神の如き力の活きた論證であり、意志の力に捧げた一個の記念物であつたといふのは、右のやうな理由からである。

現に述べてゐるところでは、神の王國で無いものは、悉くイエスから全く消え去つてゐたと容易く想像することができる。いはば彼は徹頭徹尾自然の外にあつたのである。家庭、友情、祖國は彼にとつて何等意義の無いものであつた。疑も無く彼はその頃から生命を犠牲にしてゐたのである。彼自身の死に、王國建設の手段のあることを見て、彼が熱慮の上自殺の計畫を想ひついたのであるとすら信じたことがある。または（かういふ考は後になつて始めて教理に作り上げられたものではなるが）死は、父を宥め人間を救ふための目的で、彼にとつては犠牲であるともされる。不思議に迫害刑罰の趣味は人々に浸みこんでゐるものであつた。彼の血は、彼が浴びなければならぬ第三回の洗禮の水と彼は想つたのである。さうして、彼は渴を醫する唯一の方法であつたこの洗禮の前に、不思議にも急いで行きたい念に囚はれてゐたやうである。

未來を見る彼の明の博大なことは、時に驚かれるものがあつた。世界に彼が惹起す大暴風雨を、彼に知らずにはゐなかつた。彼は大膽に且美しくかう言つてゐる。「汝等恐らくわれ地に平和を與へんために來るとおもへるならん。然らず、われは劍を投ぜんが爲めに來れり。今より

後、一家に五人あらば、三人は二人に、二人は三人に分れ争はん。それわが來れるは、人をその父より、娘をその母より、嫁をその姑舅より分たためなり。人の仇はその家の者なるべし。』——「われは火を地に投ぜんとて來れり。この火すでに燃えたらんには、われまた何をか望まん。』——「人汝等を會堂より逐ひ出さん、されど汝等を殺す者皆自ら神に事ふと思ふ時來らん。世若し汝等を憎まば、汝等より先にわれを憎みたることを知れ。わが汝等に、「僕はその主人より大ならず」と告げし言葉をおぼえよ。人若しわれを責むとせば彼等汝等をも責むるならん。』

この怖るべき熱心の進みかたに引きずられ、益々昂奮せる説教の必要に左右せられて、イエスは最早わが身も自由で無かつた。彼はその任務に隸屬してゐた。或意味では、彼は人類の所有となつてゐた。往々、彼の理性が紊れたともいへばいへるやうであつた。彼は苦悶の如きもの、内部の煩累を持つてゐた。絶えず彼の目前に輝いてゐる神の王國の大なる幻は、彼に眩暈を與へた。彼の傍の者が、彼を狂人と信じたこと、彼の敵が彼を憑かれたる者と言つたことなどを想ふべきである。過度に情熱化した彼の性格は、刻々に彼を人間性の限界以外に運んで行

つた。彼の事業は理性の事業で無く、人間精神のあらゆる法則を輕んずるもので、彼が最も強く要求したものは、取も直さず「信仰」であつた。この言葉は最も頻繁にこの小團體の中で繰返されたものであつた。それはあらゆる民衆的運動の言葉である。その運動の何れも、それを煽動する者が、十分論理的に演繹された證明によつて、漸次に弟子を加へて行くことを要するものであつたら、一として成功しないことは明瞭である。反省は疑惑に導くだけである。例へば佛蘭西革命の指導者が、若し豫め十分の長い冥想によつて確信を得る必要を有してゐたら、彼等は無爲にして老境に及んだであらう。イエスも同様に、誘惑を主として、規則正しい確信の方を重要視しなかつた。強壓的、命令的であつた彼は、何等の反對を受けなかつた。歸依しなければならぬ。彼は待つてゐるのである。彼の生れつきの柔和は、今や無くなつたやうであつた。彼は時に荒々しく異常であつた。時に彼の弟子達も、最早彼を理解しないことがあつた。さうして彼の前に立つて、一種の恐怖の感を抱くことがあつた。あらゆる抵抗に對する彼の不機嫌は、彼をして不可解な表面不條理の行爲に至らしめることがあつた。

それは、彼の力が低下したからでは無い。現實に對する理想の名に於ての奮闘が支へ難く

なつたからである。彼は地に觸れて傷つき、その爲めに反感を抱かされてゐた。障礙は彼を焦立たせた。神の子といふ彼の觀念は素れ、誇張された。神性は間斷のあるものである。人は一生を通じて繼續不斷の神の子である譯には行かない。或時期には、永い暗黒の真中で、突然光明に會つた爲めに神の子になることもある。ところで、觀念が人を改宗させようとすると、直ちに力を失ふといふ宿命的法則が、イエスにも適用せられたのであつた。彼に觸れる時、人々は彼を自己の水平線に引下げた。彼がもつてゐた調子は最早數個月の間しか支へられなかつた。極度に緊張した地位から彼を解放し、出口の無い道の窮境から彼を奪ひ去り、あまり久しきに亘る試鍊より彼を救うて、今後天空清朗の邊に無垢の彼の姿を置くために、死の來るのは正にその時機であつた。

第二十章

イエスに對する反對

其生涯の初期には、イエスはさう眞面目な反對に遭遇しなかつたやうである。ガリラヤで受けてゐた非常な自由と、四方に競ひ出た師の數の多かつたことから、彼の説教はかなり限られた人々の範圍内で光彩を放つてゐたに過ぎなかつた。しかしながら、イエスが奇蹟の華々しい道に入り、世間的成功を獲るやうになつてから、暴風雨が怒號したのである。再三彼は身を匿し逃走した。けれども、アンチパスは、イエスが時として彼に對して手酷しいことを言ふことがあつても、決して彼を妨害しなかつた。チベリアの常の住居にあつた封主は、イエスが活動の天地として選んだ土地から僅一二里の距離にゐたのである。彼はイエスの奇蹟を噂に聞いて疑も無くそれを巧妙な業とおもひ、且それを見ようと欲してゐた。當時の信仰無き者

は、この種の奇蹟に對して非常な好奇心をもつてゐた。イエスは平素の調子でそれを拒絶した。彼は己を以て詰まらぬ娯樂の具としようとした非宗教的社會に捲きこまれることを避けたのである。只管、彼は民衆を味方とすることにつとめてゐた。彼は素朴な者にのみ役に立つ方法を素朴な者の爲めに保存してゐたのである。

ある時、イエスこそ死者の中から蘇つたバプテスマのヨハネに他ならぬといふ噂が廣がつた。アンチパスは氣がかりで不安であつた。彼はその領土からこの新豫言者を遠ざけようとして計略を用ひた。パリサイ人は、イエスの身の上を案ずる風を装うて、アンチパスが彼を殺さうとしてゐる旨を告げに來た。イエスは非常に心の純な人であつたが、その計略を觀破つて敢て出發しなかつた。彼の極めて平和な態度と、民衆の陰謀から遠ざかつてゐたことは、封主をして安心せしめ、危険を消散させることになつた。

ガリラヤの何れの町でも、新しい教に對する歡迎が同じやうに好かつたとは言はれなかつた。常に信仰の無いナザレが、依然としてその地の光榮となるべき者を斥けてゐたばかりで無く、また彼の兄弟が彼を信仰しなかつたばかりで無く、湖畔の諸都市も概して好意的ではあつ

たが、悉く歸依してゐたのでは無かつた。イエスは、屢その遭遇する無信仰と、人の心の頑固なことを嘆いてゐた。かういふ批難の中には、説教者の誇張があるのは當然であるが、またその中にはバプテスマのヨハネを眞似て装つた「時代批難」といふべきもののあることも感じられる。唯この地が全部神の王國に迎合するもので無かつたことは明かである。「禍なるかな、コラジンよ、禍なるかな、ベトサイダよ、汝等の中にて行ひたる能力ある業をツロとシドンとに行ひしならば、彼等は早く荒布を著、灰の中にて悔改めしならん。されば汝等に告ぐ、審判の日にはツロとシドンとのかた汝等よりも耐へ易からん。カペナウムよ、汝は天にまで擧げらるべきか、黄泉にまで下らん。汝のうちにて行ひたる能力ある業をソドムにて行ひしならば、今日までも、かの町は遺りしならん。然れば汝等に告ぐ、審判の日にはソドムの地のかた汝よりも耐へ易からん。」——「南の女王、審判の時今の代の人とともに起きて之が罪を定めん、彼はソロモンの智慧を聽かんとて地の極より來れり。視よ、ソロモンよりも勝る者此處にあり。ニネベの人、審判の時今の代の人とともに立ちて之が罪を定めん、彼等はヨナの宣ふる言によりて悔改めたり。視よ、ヨナよりも勝る者此處にあり。」最初興の盡きざるものあつた彼の故

浪生活も、また彼にとつて壓迫となり始めた。「狐は穴あり、空の鳥は罅あり、されど人の子は枕する所無し。」彼は明證を拒む信仰無き者を責めた。苦悶と批難とは漸次に彼の胸に現れて來た。(一)

事實、イエスは、世界にある種々の思想の理由あることを理解し、人が自己の意見と一致しないのは、當然であると考へる哲學者の冷靜をもつて、反對を迎へることはできなかつた。猶太民族の主要缺點の一は、駁論に峻烈なこと、殆ど常に其の中に混じてゐる誹謗の調子のあることである。世界に猶太人同志の爭論程、激しい爭論は嘗て無かつた。人を慇懃溫和にするものは縹渺の感じである。しかるに、縹渺たるところの無いのが、セミチック精神の不斷の一特色である。例へばプラトンの對話篇のやうなものは全く此民族には無かつた。その民族のあらゆる缺點を殆ど有つてゐないで、その主要特色が正に無限の微妙であつたイエスも、知らず知らず、論戰に共通の調子を用ひるやうになつた。パプテスマのヨハネのやうに、彼は敵に對して極めて激烈な言葉を用ひた。心の純なる者に對しては非常に濃厚な彼が、無信仰の者に對すると、毫も反抗的で無い無信仰者の前にも辛辣であつた。彼は、まだ抵抗にも困難にも遭遇

しない「山上の訓戒」の溫和な師では最早無かつた。彼の性格の底にある情熱が、最も烈しい罵詈に彼を誘うたのである。この奇異なる混合は必ずしも驚くべきものでは無かつた。現代のある人も稀有の力をもつて同様の對照を示した。それはラムネエである。「或信者の言葉」といふ立派な彼の書の中に、極めて狂的の憤怒と、極めて爽かな反覆とが、蜃氣樓の中のやうに混交してゐる。大慈悲の生活と交通してゐたこの人は、彼と同様に考へない者に對すると、相手にし難い狂的の人となつた。イエスも同様に、理由無しでは無いが、イザヤ書の一節をわが身に適用した。「彼は争はず、叫ばず、その聲を大路にて聞く者無からん。正義をして勝ち遂げしむるまでは、傷へる葦を折ること無く、煙れる亞麻を消すことなからん。」それにも拘らず、彼が弟子に與へた多くの注意には、中世が容赦無く發達させることになるところの眞の狂熱の萌芽を含んでゐた。然らばそれに就いて、彼を難すべきものかといふに、多少の荒荒しいところが無くては、革命は一として行はれるものではない。若しルウテルや、佛蘭西革命の主動者が、慇懃な社交法則を辨へねばならなかつたとしたら、宗教改革も大革命も行はれなかつたであらう。民衆の一階級に對して侮辱を罰する何等の法律に、イエスの遭遇しなかつたことは慶

押すべきことである。さうで無かつたら、パリサイ人は犯すべからざる人々であつたかも知れない。人類の大事件は、悉く絶対原理の名に於て成就せられるものである。批評哲學者であつたら、「他人の意見を尊重し、何人もその敵が全く誤つてゐないと同様に、全然理由のあるものでは無いと信ぜよ」と言つたかも知れない。しかしながら、イエスの行爲には、哲學者の無關心な思索と何等共通なところが無いのである。一時理想に達したけれども、或者の惡意によつて遮られたと信ずることは、熱情の人にとっては堪へ難い思想である。そんな考は新世界の創始者にとつて、果して何になつたであらう。

イエスの思想にとつて打破し難い障礙は、主としてパリサイ人から來たものである。イエスは、正統の名を受けてゐる猶太教から漸次に遠ざかつた。ところで、パリサイ人が猶太教の神經であり、力であつた。その派は中心をエルサレムに有つてゐたが、ガリラヤにも居住してゐる幾多の後繼者があり、または屢北部に來た者があつた。概して、それは外部を誇示する、他を輕蔑するやうな、威張つた信仰であり、且それに満足し安心してゐる狭量な人々であつた。彼等の態度は、滑稽であり、彼等を尊敬してゐる者にも可笑しくなるものであつた。人民が彼

等につけた滑稽の感じのある綽名が其證據となるものである。中には、脚を引き搦つて往來を歩き、小石に踏く「蟹股のパリサイ人——ニクファイ」があり、婦人を見ないやうに眼を閉ぢて歩き、壁に衝突し、額を常に血塗れにしてゐる「血塗れ額のパリサイ人——キザイ」があり、杵の柄のやうに折疊まれたやうな「杵のパリサイ人——メドウキア」があり、兩肩に律法の重荷を悉く負うてゐるやうな、脊を曲げて歩く「肩の強いパリサイ人——シクミ」があり、常に成すべき教を探し廻つてゐる、「何かすることがあればするぞのパリサイ人」がある。時には「染められたパリサイ人」を加へることもある。それは信仰の外部が、悉く偽善のニス色になつてゐるからである。事實、この嚴格主義は、往々表面だけのことであつて、實際には非常に道德的墮落を隠してゐることがあつた。けれども、民衆はそれに瞞されてゐた。民衆の本能は、深く人の問題に觸れた時にも、正直であつて、容易に虚偽の信心家に欺かれるものである。民衆が彼等を愛するのは、親切であり、愛せられる價值があるからである。しかし、民衆は表裏を識別する十分の洞察力の無いものである。

さういふ情熱的世界で、先づイエスとこの種の性格の人達との間に起るべき反感は想像す

るに難く無い。イエスは、ひたすら心の宗教を欲したのである。パリサイ人の宗教は、主として殆ど戒律遵守で成り立つてゐた。イエスは、謙讓な者と、あらゆる種類の虐げられた人々を求めたのである。パリサイ人は、それをもつて彼等の所謂立派な人々の宗教を侮辱するものと認めた。パリサイ人は完全無欲の人であり、眞理を自信せる街學者であり、會堂では上位を占め、途上で祈禱し、大聲に慈善をし、他人が敬禮を與へるや否やを氣にとめてゐる人であつた。イエスは、何人も恐怖戰慄して神の審判を待つべきものであると主張した。パリサイ人によつて代表されてゐる宗教の惡傾向が、一切制御を受けること無く、一般に普及してゐたといふのでは無い。イエスの前にも、或はその當時にも、ナザレのイエスの眞の祖先の一人であつたシラクの子イエスや、ガマリエル、ソコのアンチゴヌス、就中柔和高貴のヒレルのやうな多くの人々が、ずつと高尚な、殆ど福音書の教義を嘗て教へてゐたのである。しかしながら、これらの良き種子は打消されたのである。律法全部を公平に概括してゐるヒレルの立派な格言や善を行ふことによつて宗教儀式は成立するものであるとした、シラクの子イエスの格言は忘却せられ、或は呪はれてゐた。狹量排他的のシャンマイが勝利を占めてゐたのである。「傳統」

の夥しい量は保護解釋を口實として律法を殺してゐた。無論戒律の法も有益な一面があつた。猶太人が狂的に律法を熱愛するのは結構である。その熱愛があつて、アンチオクス・エピファネスの時代、及びヘロデの時代に、モオゼ教を救うて、基督教を産出するに必要な酵母を残したのである。しかしながら、それ自身として見ると、此處でいふ舊い注意は、兒戯に等しいものに過ぎなかつた。その寶庫であつた會堂は、最早誤謬の母であつたに過ぎない。その治世は終つてゐたのである。それにも拘らず、それに讓位を要請することは、既成權威のした例も無く、することもできなかつたことであつた。

公然の偽善に對するイエスの奮闘は繼續された。前述の宗教的狀態中に現れる改革者の普通の行きかたであり、傳統的形式主義とも呼ぶべきものは、「傳統」に對して聖書の本文を對立させる事であつた。宗教に熱心な者は、最高度の保守主義者と自稱する時に於てすら、常に改革者である。今日の新加特力教徒が絶えず福音書より遠ざかりつつあると同じやうに、パリサイ人は一足ごとに聖書から遠ざかりつつあつた。それ故、厳格な改革者は、時代と並行し時流に投じてゐる神學を批評するたにめ、不變の本文から出發し根本に於て普通「聖書的」である。

それが、後にカライイトや新教徒の成したところである。イエスは、もつと力強く斧を根に當てがった。時には、パリサイ人の間違つたマソル即ち傳統に對して、聖經を引用することが無いことは無かつた。けれども、概して彼は解釋をしてゐない。彼がそれを訴へるのは、良心に對してである。一撃で彼は本文をも註解をも解決する。彼はパリサイ人に對して、彼等が傳統をもつて甚しくモオゼの教を改悪してゐることを證明する。けれども、彼はモオゼに歸れとは自分で毫も主張しない。彼の目的は前方にあつて後方にあるのでは無かつた。イエスは舊宗教の改革者以上であつた。それは人類永遠の宗教の創造者であつた。

主として、争論は、傳統によつて輸入せられた多くの外的の行に關して起つた。その行をイエスも弟子達も守つてゐなかつた。パリサイ人はそれを強く彼に責めた。彼が彼等の宅で食事をした時、彼は慣例の淨めをしないで、酷く彼等を侮辱したことがあつた。「唯その内にある物を施せ、さらば一切の物汝等の爲めに潔くなるなり。」彼の精妙な心を最も酷く傷けたものは、パリサイ人が宗教の事柄に安心してゐる態度と、座席肩書の優劣吟味のやうな、毫も心の改善には役に立たない幼稚な信仰心であつた。それが、立派な譬喩で、非常に面白く正しく描き出

してある。「ある日二人の者祈らんとて宮にのぼる。一人はパリサイ人、一人は取税人なり。パリサイ人立ちて心の中にかく祈る、「神よ、われは他の人の強奪不義姦淫するが如き者ならず、又この取税人の如くならぬを感謝す。われは一週の中に二度斷食し、凡て得るものの十分の一を献ぐ。」然るに取税人は遙に立ちて、目を天に向くる事だにせず、胸を打ちて言ふ、「神よ、罪人なるわれを憫みたまへ。」われ汝等に告ぐ、この人は、かの人よりも義とせられて、己が家に下り往けり。」(2)

死によつてで無ければ飽き足ることを知らなかつた憎悪は、これらの奮闘の結果であつた。パプテズマのヨハネが既に同じ種類の憎悪を挑發してゐた。しかしながら、彼を侮辱してゐたエルサレムの貴族等は、心の純な者が彼を豫言者として奉ずることを黙過してゐた。此度の戦は死を賭したものであつた。それは世界に顯れた先立てる思想の悉くを不完全の物として攻撃した新思想であつた。パプテズマのヨハネは何處までも猶太人であつた。イエスは殆ど猶太人では無かつた。イエスは常に道徳的感情の微妙なところに訴へた。毎度あるやうに、敵に強ひられて本來の調子を現し、パリサイ人に向つて議論をする時に限つて、彼は議論家となつたの

である。彼の秀抜な嘲弄、彼の狡猾な挑發は、何時も敵の胸を刺した。それは永久の痕となつて疵の中に残つた。パリサイ人の子孫の猶太人が、その後十八世紀間纏縷のまま引擦つてゐるネツススの繻絆は、イエスが神の細工で織つたものである。高級な嘲弄の傑作となつてゐるその特色は、偽善者及び偽信仰家の肉の上に火の筋として記入されてゐる。それは無類の特色であり、神の子に相應しい特色である。神にして始めてかやうな殺しかたを成しうるものである。ソクラテスやモリエールは、唯皮膚に觸れただけに過ぎない。彼は骨の底迄火と憤怒とを突き通してゐる。

しかしながら、この偉大な諷刺の大家が、生命をもつてその勝利を購ふことも亦當然のことであつた。ガリラヤ以來、パリサイ人は彼を亡き者にしようと思ひ、後にエルサレムに於て成功することとなるその計略を彼に對して用ひた。彼等は、既に權威を確立してゐた新政黨の達人に、彼等の論争に興味を有たせようと試みた。ガリラヤに於ては、イエスの逃走の容易さとアンチパス政府の薄弱とが、これらの計畫を失敗させた。今度は彼自身敢て危険に赴かうとした。若しガリラヤに楯籠つてゐたのでは、その行爲が必然的に限られてゐることを、彼は十分

認めてゐた。猶太は引力のやうに彼を牽きつけた。彼は順はざる都を陥れるために、最後の努力を試みようと思つた。さうして、豫言者はエルサレムの外にて死ぬこと無しといふ諺を正しきものとするを彼がその任務としてゐるものやうであつた。

第二十一章

エルサレムへの最後の旅

すつと以前から、イエスは自己を取巻いてゐる危険を感じてゐた。推定によると、十八個月の間、彼は聖都へ順禮に行くことを避けてゐた。紀元三十二年の結茅節（われらの採用する臆説に従へば）に、常に好意の無い無信仰な彼の親族達が彼に同行を勧めた。福音書の記者は、その勧誘の中に彼を滅ぼさうとする或隠れた企のあつたことを仄めかしてゐるやうである。彼等は、イエスに向つてかう言つた。「誰にても自ら顯れんことを求めて密かに業をなす者無し。汝の行ふ業を人々にも見せんために、此處を去りて猶太に行け。」イエスは何か謀があるものと疑つて、最初は拒んだのである。そのうち、順禮のこの一隊が出發してから、誰にも知れないやうに、殆ど一人で彼もまた旅に上つた。結茅節は秋の彼岸に當つてゐた。彼の運命の最後迄

には尙六個月を経過する筈であつた。しかしながら、この間に、再びイエスは懐しい北部の地を見ることは無かつた。楽しい時は過ぎたのである。今は、死の苦痛で終を告げる痛ましい道を、彼は一步一步進まねばならなくなつてゐたのである。

彼の弟子と、彼に奉仕してゐた敬虔な女性等は、猶太で再び彼と一緒になつた。けれども、其他のことはどんなに彼にとつて變つてゐたことであらう。エルサレムでは、イエスは一個の異郷人であつた。彼は其處に突き破れない抵抗の壁があることを感じた。陥穽と異論とに取巻かれてゐる彼は、絶えずパリサイ人の悪意に追跡されてゐた。ガリラヤで見たやうな、若々しい人々の幸福な賜物の、限り無い信仰の力や、異論（好意の無いことと頑迷との結果であるのが常である）の入る餘地の無い善良溫和な住民の代りに、此處では、彼は一步一步毎に頑固な無信仰に遭遇した。北部ではあれ程よく成功した行ひかたも、その頑固に對しては殆ど効果が無かつた。彼の弟子は、ガリラヤ人であるといふ理由で輕蔑された。前回の旅行の際、夜中彼と會談したニコデモは、彼を辯護しようとしたといふので、猶太教議會で危い目に會ふところであつた。「さらば汝もガリラヤ人なりや。聖經に訊し見よ、ガリラヤより豫言者の來ることあり

ヤ」と人はニコデモに向つて言つた。

前に述べたやうに、イエスは都會を好まなかつた。この時迄、彼は自己の事業の爲めに、田舎と、さまで重要で無い町々を擇んで、常に大中心地を避けてゐた。彼が使徒に與へた多くの教訓は、身分の低い人々の小社會以外には、絶対に適用不可能のものであつた。ガリラヤの愉快な共產主義に慣れてゐて、毫も世界の觀念の無かつた爲めに、エルサレムでは可笑しくおもはれるやうな無邪氣な言葉が斷えず彼の口から洩れた。彼の想像力、彼の自然趣味はこの城壁内では窮屈であつた。眞の宗教は、都市の喧騒裡から生るべきものでは無く、田園の靜寂晴朗の中から生るべきものであつた。

祭職者の傲慢は、殿堂の内陣を彼に不愉快におもはせた。或日、彼以上にエルサレムを熟知してゐた弟子の二三が、殿堂の建築美、立派な材料の選擇、壁一面の祈願の捧物を彼に認めさせようとした。すると、彼はかう言つた。「汝等すべてこれらの建物を見よ、誠にわれ汝等に告ぐ、此處に一つの石も崩されずしては石の上に遺らじ。」若し、その時哀れな一人の寡婦が通りかかつて小さな錢を箱の中に投げ入れなかつたとしたら、彼は一切の物を讚美することを拒

んだであらう。彼は告げた。「この寡婦は他の者より多く投げ入れたり。他の者は餘れる中より投げ入れ、この女は乏しき中より投げ入れたればなり。」かういふやうに、エルサレムで起つた事は何事でも批評的に見、少し投げ入れた貧者を賞揚し、多く投げ入れた富者を貶し、人民の幸福に一向功献しない富裕な聖職者を批難することは、當然祭職階級を憤らせた。後に受繼いだ回教のハラムのやうに、保守主義の貴族が楯籠つてゐた殿堂が、革命の成功し得るところとしては最後の場所であつた。今日革新家が、オマアルの禮拜堂の周圍に、回教顛覆を説きに行くところを想像したらよからう。しかし、其處には猶太生活の中心があつて、征服をするか、さも無ければ、討死をすべきところであつた。儘にゴルゴタ以上にイエスの苦しんだあの丘陵の上で、宗法解釋の長たらしい論駁の中で、それには彼の偉大な道徳的向上心も何等の利益するところも無く、否寧ろ彼に一種の墮落をさせるやうな議論と憤懣の裡に彼の日が過ぎて行くのであつた。

この混亂の生活裡に、イエスの善良多感の心は、幸に多大の優味を味ふ隠れ場を作ることができた。殿堂の議論に一日を過した後に、イエスは夕方ケデロンの谷に下りて、農園（多分製

油場であつた)の果樹園でゲッセマネといふ市民の遊び場となつてゐる所で少し憩ひ、夜は町の東の眺望を限つてゐる橄欖山に行つて過した。この方角が、エルサレムの郊外で多少緑の美しい景色となつてゐる唯一の地であつた。橄欖樹、無花果樹、椰子樹などの栽培が、ベトファアダ、ゲッセマネ、ベタニヤの村落の周圍にある農園や牧場に多かつた。橄欖山上には二本の大きな柏香樹があつて、その記憶は永い間漂浪の猶太人の間に残つてゐた。その枝は鳩の群の棲家となり、樹蔭には小店が出てゐた。この郊外が、いはばイエスと弟子達の居場所であつた。彼等は、野といふ野、家といふ家を殆ど識つてゐた。(1)

殊に、岡の上にあつて、エルサレムから一時間半位の距離にある、死海とヨルダンとを見晴す傾斜にあるベタニヤの村は、イエスの最も好める場所であつた。彼は其處に、二人の姉妹と一人の男との三人暮しの一家族を識つてゐた。二人の姉妹の一人は、マルタといつて、親切な甲斐々々しい女であつた。今一人は、マリヤといつて、反對に物倦げなところがあり、非常に發達した冥想的の本能のあることで、イエスの氣に入つてゐた。毎度イエスの足許に腰を掛けて、彼の言葉に聽きとれ、日々の務めを忘れることさへあつた。従つて、何もかも姉の方に仕事は

落ちて來るので、姉は靜かに不平をいふことがあつた。イエスはマルタに向つていつた。「マルタよ、マルタよ、汝さまさまの事により思ひ煩ひて心勞す、されど無くてならぬものは多からず、唯一つのみ、マリヤは善きかたを選びたり、これは彼より奪ふべからざるものなり。』此家の主人であつた癩病のシモンといふ者は、マリヤ、マルタの兄弟か、さも無いにしても、一家の者であつたらしい。此處の敬虔な友情の中で、イエスは公生活の嫌厭を忘れてゐた。この靜かな家の中で、彼はパリサイ人や學者等が、斷えず彼に起させた苦勞を慰めてゐた。彼はまた毎度橄欖山上に腰を卸して、正面にモリヤ山を眺め、目の下には殿堂の庭や煌めく瓦を葺いた屋根の美しい眺めを見た。この光景は異郷人をして嘆美させるものであつた。殊に、日の昇る時、聖山は眩しく見え、雪と黄金との塊のやうに見えた。しかしながら、深い悲哀の感情は、他のすべてのイズラエル人には、歡喜と誇りとに溢れる程の景色も、イエスには暗い影であつた。『ああエルサレム、エルサレム、豫言者達を殺し、遣はされたる人々を石にて撃つ者よ、牝鶏のその雛を翼の下に集むる如く、われ汝等の子どもを集めんとせしこと幾度ぞや。』(2)

ガリラヤに於ける如く、此處では多くの善人が感動しなかつたといふのでは無い。けれども、